

ながら、その味では柿の果と酷似してゐるために、南洋の柿と稱して、食ふて故郷の秋を偲ぶのであるといふ、勿論このサラツクは、秋とはいはず、四季を通じて枝も撓はに生つてゐる。

その夜の夢は穩かであつた、私は久しぶりで故郷に歸つて來たやうな思ひがした、夜は明け、私は又マンデーを試みて後、浴衣姿で園中を散歩した、後庭へ出て仰のくと、忽ち一個の大雄峰が雲霧を披いて北方の天に秀麗の姿を現した。

ボロブドールの大佛蹟

何といふ秀麗な山の姿であらう、形は富士その儘である、緩やかな弧線を引いて、麓は廣い裾野になつてゐる、主人は指さして、ムラツピー山だといふ、活火山だ、山の絶頂から、さながら香爐の烟のやうな薄い烟が搖曳してゐる、高さは海拔二八〇〇米と註せられる、その山の後に、遙かに紫色に冴えてゐる山が見える、メルバールといふ、高さはムラツピーよりも優つてゐるが、距離があるから小さく見える、休火山である。

朝の九時半、私達は再びS氏と共に自動車を驅つて、郊外四十哩の處にあるボロブドールの大

佛蹟を見るべくドライブした、この郊外も亦甘蔗の圃のみであつた、一丈に近いその甘蔗は、紫色の穂を抽いて、烈日の下に靡いてゐる、満目の翠浪裡、そこに瓜哇の土人群は、偃月の形をした大きな鎌を提げて、サクリ／＼とこれを刈る、又映つる日の光、鎌は閃白し又閃紫する、圃と圃の間には軌道が架設されて、刈り取つた甘蔗はトロツコの上に山と積まれて、右に左に走つてゐる。

やがて車頭に一個の丘陵が見え出した、丘の上に、無数の覆鉢が姿を現す、それがボロブドールの大佛蹟である、私の心は躍動した、私の自動車は、夷かな路を丘に傍ふて走り、迂餘し、遷透し、盤旋しつゝ丘を登つた。

眼前に幻出したボロブドール大佛蹟。

何といふ嚴肅さであらう、何といふ莊重さであらう、又は何といふ崇高さであらう。

印度以東に於いて、古代美術の第一にも推さるべき此偉大なるボロブドールの大佛蹟は、總て七千餘坪の地を掩ふて建てられた大曼陀羅、大卒塔婆である、九層より成りて基壇は二十の多角を有し、四層の廻廊これを繞り、その上部には總て七十二個の覆鉢式の寶龕あつて、龕毎に、一

個の佛像を安置してある、その最高處には、更に大なる一個の覆鉢があつて、高い空を擎げて立つてゐる、そしてその廻廊には、釋迦一代記を現した浮彫の繪があつて、風俗、習慣、器用の品に至るまで、以て當時の事象を明かに私達に觀せてゐるのである。

此大佛蹟は、全部石材をもつて築造されてある、しかも石と石とを結合するに、セメントなどの物を使はず、巧にそれを組み合せたものである、石材は火山岩の沙石で、色は暗青灰色を呈してゐる、一體沙石は、質は堅いが疎鬆であるため、寒い國では霜雪に浸蝕されると水の氷結するため、龜裂し又は霉爛するので、日本などで之を建築材料に用ひても、やがては自然に零落し廢殘する、しかし常夏の國にありてはさういふ心配もなく、永くその原形を保つてゐるのである。

私は廻廊を回つて、佛一代の壁面浮彫と、妙相端嚴なる諸佛諸天の彫像とを耽觀し、時の移るのを覺えなかつた。

私は佛蹟に近き小さき旅館に入り、窓前に聳えてゐるポロブドールを再び耽觀した、打ち豁けた食堂は、この大佛蹟の全體を、坐ながらにして觀られるのである、私はジョンゴスから寫眞帖を借り得て、そのうちの數枚を買つた、そして東京の諸友にこの佛蹟を觀るの喜びを頒つべく、

郵筒に附した。私は再び自動車を驅つて、丘下のチャンデー、メンタルに向つた、一哩ばかりを隔てた耶蘇教會堂の裏にその佛殿があつた、矢張り沙石で築造された印度風のものである、中央寶龕の中には、たけ一丈ばかりの彌陀三尊の佛體があつた、

ポロブドールの大佛蹟、その偉大なる印度藝術を觀た私は、實に嚴肅なる感激に撲たれた、始めて丘上遙かに覆鉢の頂きを仰ぎ瞰た時は、私はこれを形容するの辭を忘れてしまつた。

壁上の半肉彫は都て二百二十面

ポロブドール廻廊の壁面にある浮彫を看るのには、先づ東南部から順を逐ふて歩を進めて行くのが好い、浮彫は、兜率天に在す釋尊にはじまり、菩薩降下の評定、吠陀の豫言、摩耶夫人の靈夢、無憂園の摩耶夫人、迦毘羅城の奇瑞、藍毘尼園の行啓、佛の誕生、淨飯王の婆羅門供養、太子哺乳に至りて、更に西南部に移る。

西南部には仙人占相、寺院行啓、寶冠の捧呈、學童時代の太子、閻浮樹下の太子、耶輸陀羅姫の引見、擲象、算數、弓術の競技、太子の結婚、三時殿、四門出遊、太子妃の惡夢に終りて西北

部に移る。

西北部には、太子父王を訪ふの浮彫に始まり、采女の熟寝、健歩の馬装、太子の踰城、剃髮落飾、淨居天の捧衣、阿藍仙と太子、太子王舎城訪問、頻婆娑來訪、五釋種の隨從、尼連禪河畔の太子、摩耶夫人太子に見ゆ、諸天太子を念護、惡魔太子を誘惑せんとす、村女の獻糜、死者と衣を換ふ、天人の赤衣捧獻、須奢陀の奉仕、太子尼連禪河畔に至る、太子の沐浴、龍女寶座を獻す、太子金鉢を水に投ず、菩提樹下の覺座、を過ぎて東北部に入る。

東北部には梵天迦梨迦の敬禮より始まりて、菩提樹下の太子、釋尊の降魔、魔王の三女、太子の大悟成道、成道後初の七日、諸天、佛陀に灌頂、諸天の佛陀讚仰、成道後三七日、魔王の三女老婆となる、目真隣陀龍王の禮佛、二商の供養、四箇の鉢、乳糜の獻奉、梵天の勸請、諸天の勸請、佛の摩揭陀通過、アチバカとの邂逅、スダルカナ龍王の供饌、ロヒタバスツの款待、サラチの供養、世尊と渡船夫、婆羅奈斯城の佛陀、五比丘の教化、蓮池の灌頂、弘法の世尊に至つて、全廊を一匝し、遍くその群妙を見ることを得るのである。

この後私は東蒲塞國の北邊に、アンコールワット大迦籃の壁面にある浮彫を見たが、アンコー

ルの方は浮彫といふよりも寧ろ筋彫に近く、此ボロブドールの牛肉彫といふよりは寧ろ全き浮彫といふべきに比較して、その構圖の雄大なるを除き、技倆の點に於いては、ボロブドールの方は遙かに優越してゐると思はれる。

私は、ボロブドールの浮彫を稱して群妙とたゞへた、壁面各箇の浮彫は、いづれも皆な精妙なものである、人物、殿堂、器什、衣裳、風俗、正さに當代の一切の世相を盡してゐることのみでも、誠に世界の至寶といふべきである、摩耶夫人の靈夢感得の浮彫の、寢殿に安臥して熟睡してゐる夫人、その枕頭には燈盤あり、右には五人の侍女がゐて、一人は扇子を執つて扇ぎ、一人は夫人の脚を按摩してゐる、左の上には金蓋、瓔珞を垂れた白象に騎つた菩薩が降下し、諸天之を迎へて恭敬してゐる、床の下や宮殿の外には兵器を執つた臣僚達が警衛してゐるところを彫つて、王宮内の結構や調度などが一目に分る、太子競技のうちで、弓を彎きしぼつて將に射んとするさまなどは、讚嘆するに足る至妙の浮彫であるといはれてゐる、壁上の彫刻は、都べて一百二十面に及んでゐる。一刀三禮、渾身の血を傾瀉して、刻み成した當年の巨匠の敬虔の態度が想はれる。

瓜哇のモボと其洋風劇

チャンデー、メンタルの佛殿に詣でた時、そこには幾多の參詣人が群がつてゐた、土人の兵隊さんもをれば、色彩麗しい瓜哇更紗のカイン、パンジャン(上袴)を乳の邊から稜を襲んで穿いてゐる乙女もあり、綺麗なスレンジン(肩掛)を左の肩から右の脇へと投げかけてゐる老女もあつた、これ等の人々は、石壇を登つて、黄昏のやうな薄暗い寶龕のうちに入り、先づ妙相端麗なる三尊佛の前に跪づいて合掌してから、手を揚げて跣足の膝を撫で、結印の手に觸れ、眉暈臉鬢、いとも氣高いその顔を摩して後、己れの顔や手足をさする、佛の利益で己れの患部が治ると思つてゐるのである、手に觸れた佛體の、顔、手、足の邊は、宛がら吾が淺草觀音堂にある賓頭盧尊者のやうに光つてゐる。

わたくしは其群集のうちに異様な帽子を戴いてゐる數人の客を見た、いづれも王宮に仕ふる武士と見えて、式の通りのスレンジンを掛け、式の通りのカイン、パンジャンを穿き、腰に瓜哇刀を佩てゐるが、獨りその頭に戴いてゐる帽子の不思議さ、それは普通の帽子の鏝を残して、鉢型

の後半を截り捨てたものを、更紗のカイン、カバラ(裏頭)を纏ふてゐる其頭髮を露出させつゝ被つてゐるのであつた、カイン、カバラを頭に巻くといふことは、王宮に仕ふる人の威儀の一つで、如何なる場合でも巻いてゐなければならぬので、そこで斯ういふ半分帽がそれ等の頭に載せられるのであつた、正しく瓜哇のモダン、ボーイである。

瓜哇の芝居のうち、古典劇は傳説を採つた古代の英雄物語を主とし、世話劇は我邦の新派劇のやうなもの、洋風劇は、西洋のオペラを瓜哇化したものである、私は、新嘉坡に淹留してゐた時、宿屋の番頭の案内で、活動や、支那劇や、曲藝など雜多の演技が催されるパラダイスといふ娛樂場で、瓜哇土人の演ずる雜劇を始めて見物して、唯旅人の好奇心をそゝるより外に、何の興味も惹かない變挺なものだと思つた、瓜哇バタバヤへ來て、友人に伴れられて、再びその演劇を見物した、その時は瓜哇化した洋風の歌劇であつたが、洋装したスندگان美人が、その細腰に兩手を當て、脚を揚げ、臀を振つて歌ひつゝ踊るたびに、足首や手首、二の腕やなどに、幾個も嵌めてゐる金環が、コロコロと一種の音を立て、響くのと、いよ／＼幕になるといふその時に、舞臺の上の楯間に飾られてある紙製の大きな紅い蓮華の花が、何かの仕掛けでパツと開くと、香水

をふりまいた椰樹の若芽で拵へた小さな無数の造花が飛び散つて、見物人の頭の上から雨のやうにふりかゝり、この歡樂場を香世界に化して了ふそれが面白いと思つた位なものであつた。

私は、爾うした幼稚な單調の舞踊や歌劇を見物して、瓜哇の劇を輕蔑してゐた、ところが、このソロー市へ來て、端なくも王家の後宮に直屬してゐる男女俳優の演劇を観ることを得て、その演技といひ、この音樂といひ、誠に典麗優雅のものあることに驚嘆して了つた、古い國には、古い床しい藝術がある、王朝の全盛時代に成就されたその藝術が、年所を歴るに従つて次第にそれにサビが出て來て、丁度我邦の能樂そのものゝやうな莊重にして嚴肅な氣分に、見物人が自然に頭が下るやうな藝術となつた古典劇を、私は始めて見物して實に驚嘆に禁へなかつたのである。

ソロー王宮の史的歌劇と ジヨクヂヤ郊外の佛蹟巡禮

香草シトロネ萬頃の翠浪に圍まれて、小高いチカハヂの丘の上に立つ大谷光瑞師の環翠莊、環のごとく莊を繞るチクライ、グノンジャヤ、ガロンゴン、グンドルの近碧遙紫、いろとりどりの大雄峯を八角堂の窓に仰ぎ瞻めながら、御國振のスキヤキに飽滿したのは昨日のことであつた。村の乙女のかき鳴らすアンコロン(樂器の一種)に送られて、薄紫の花藻を分けて舟をブゲンヂ湖に浮べたのは一昨日のことであつた、グンドルの山の麓、熔岩を登んだ方池のうちに、春を湛えて青く澄むチバナスの温泉に快浴したのもその日の黄昏であつた。

新嘉坡から馬來半島、そこに二十日の旅寢を重ね、更に新嘉坡から瓜哇バタビヤに三日の船路、總督の華麗な官邸と、世界に名高い植物園のあるバイデン、ゾルグ、西部瓜哇での繁華の都

市と聞えたバンドン市、碧空の一片が大地に墮ちたと歌はれた風光明媚なガローの清涼郷、こゝ

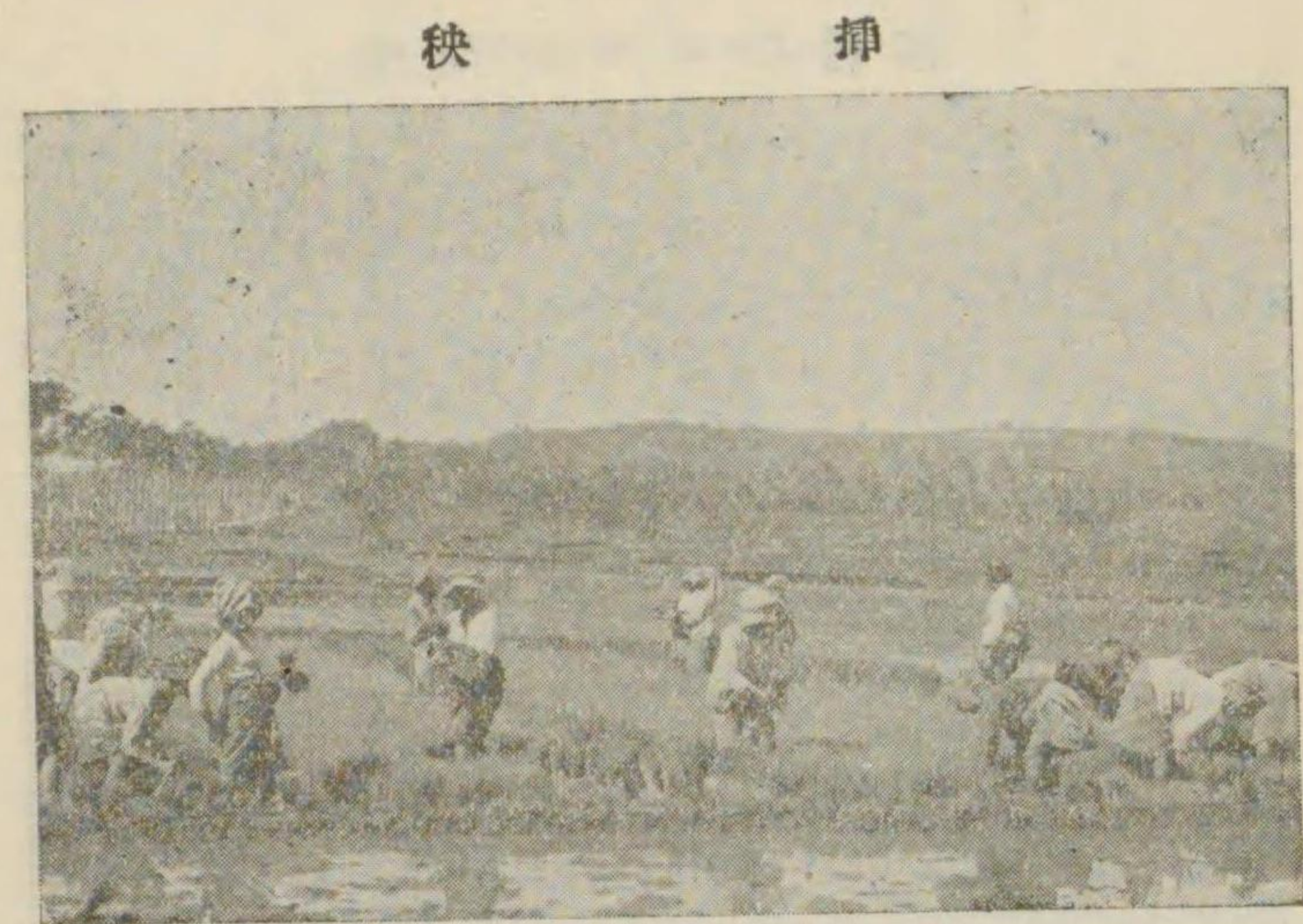
にも幾夜の旅寝を重ねて、けふはそのガローからサルタンの居城のあるジョクジャに向つて旅立つのであつた。

自動車王と稱せらるゝS氏の邸を出たのが朝の六時、六十哩の路をタクマライの驛へと自動車~~車~~を走らす、路はやがて山に入る、私は車をホテル、ナンブランの門に停めて、その断崖の小亭に憩ひ、軽い朝飯をした、めた、曠に縈りからむ凌霄花、その青い葉と丹い花の間から四方に圍む雄峯とガロー一帯の盆地が一と目に見渡された、緑田、碧水、そこにガローの粉壁の、朝の日影に映射して、遠く鶏犬の聲も聞える、路は山の峽に入つて、迂餘して登り行くのである、景致はさながら我が天城山中を行くやうである、八時、シンガバルナの村に入り、朝市を觀て、魚の形に彫りなした黒

村 落 小 景



檀のを櫛すげた大鈍と、草を編んで拵らへた巻煙草入とを購ひ求め、又た自動車~~車~~を走らせてタクマライ驛につき、同五十分發の汽車に搭じてジョクジャに向つた。



挿 秧

終つた稲田は、稻稈の立つたまゝ火をかけて灰となし、それを肥料として再びそこに苗代を植え

時は今ま甘蔗の秋であつた、薄桃色の穂を抽く丈けなす砂糖きびを、双渡り八尺、柄の長い利謙を振つて、半裸體の土人の群が、鈍黒い膚に玉なす汗を光らせながら刈つてゐる、その廣い畠の小逕に敷設された幾條の軌道には、トロツコが並べ置かれて、刈られた甘蔗を山と積んで運び去るのである、苗代田に隣る穰れる稲田、常夏の國だから、稻は不斷に植えられるのであつた、穰れる田には村を擧げて稻の穂を摘みに群がる、男も女も、人毎に大きな籃を抱えて、稻の穂を摘み入れる、穂を摘み

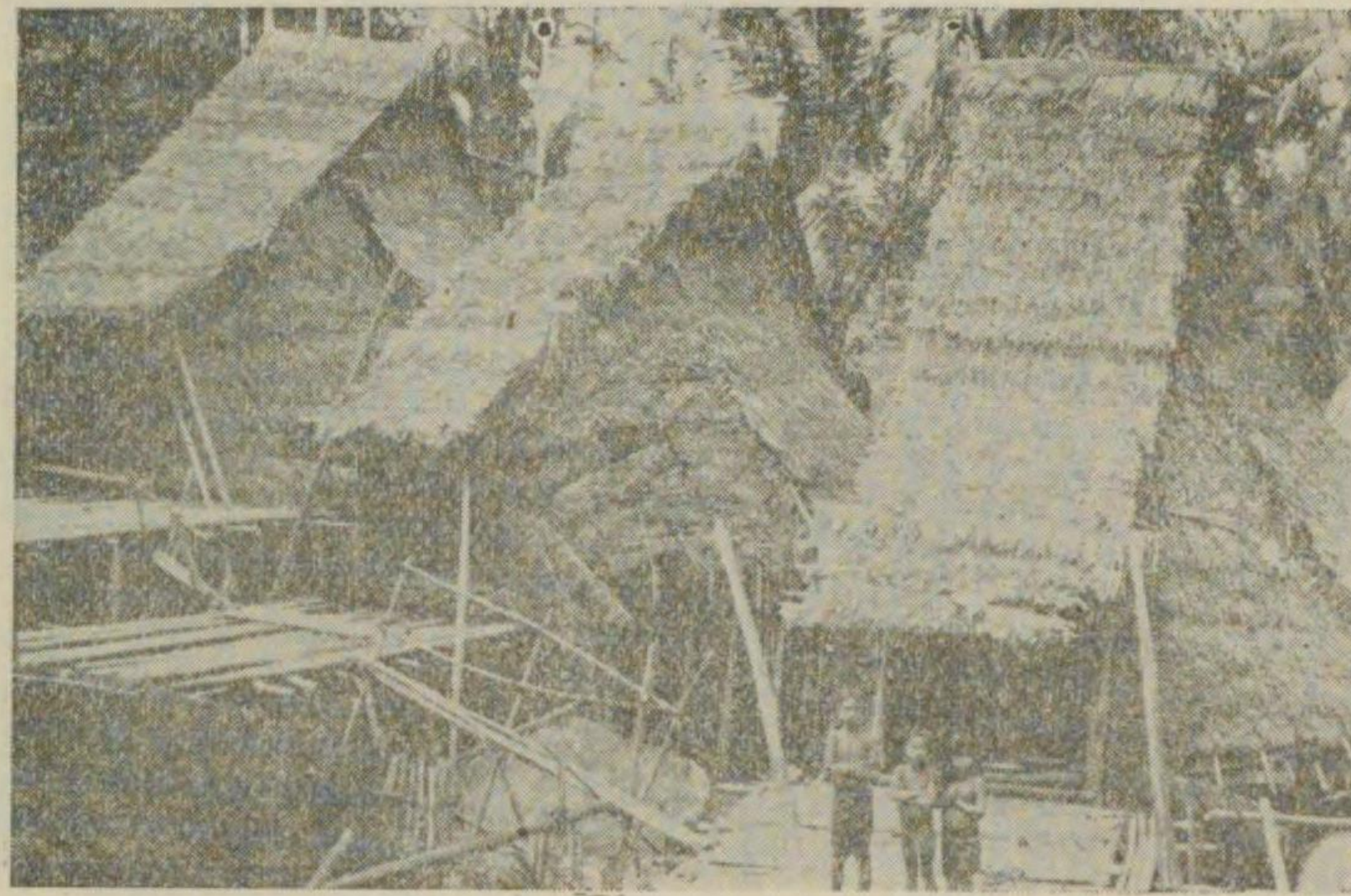
るのである、人家の茅屋も、西部瓜哇のとは趣きを異にして、その棟やうやく高く、さながら凸

字の様をなし、椰樹、檳榔の木に囲まれて、山のやうに聳えてゐる。

二

榕樹、タマリンド、合歡の木の街路樹は、涼しげなその蔭を、滲み入るやうにアスファルトで舗装された大道に敷いてゐる、爐に載せられた炮烙のやうに、爛れて熱いその歩道を、素足のまゝ往來してゐるサロン姿の居民のうち、琉球人のやうに髪を結んで、更紗のカイン、カパラ(裹頭)を戴き、同じバジル(上衣)を被り、サロン(腰巻)を穿き、これも同じ更紗のスレンジン(肩掛)を

中 部 ツ ヤ の 村 落



右の肩から左の脇へと懸け下げた王宮出仕の武士達が、傳家の寶と誇るクリス(匕首)を佩びて、

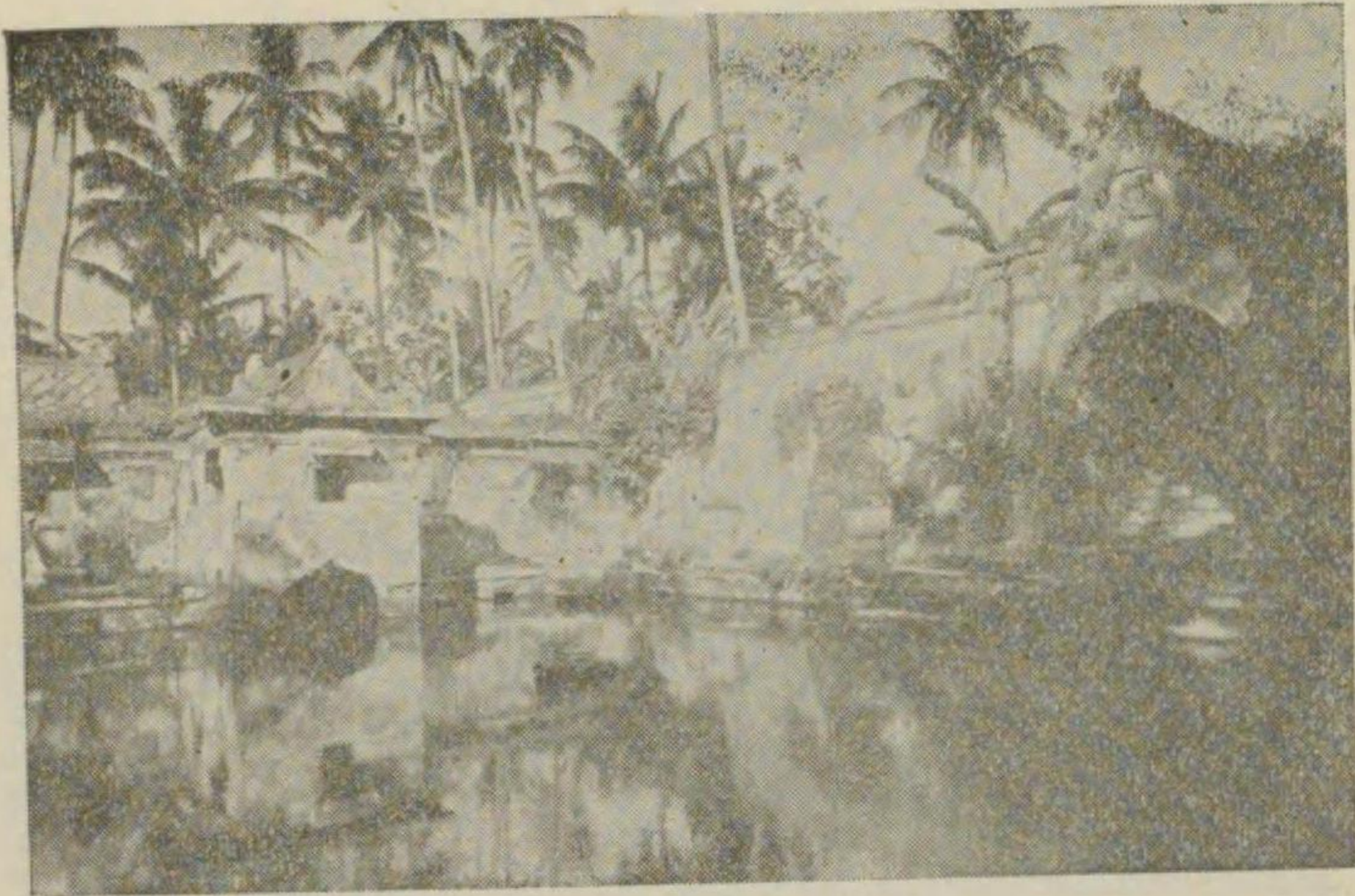
我が元祿武士を想はさせる悠揚とした態度をもつて、銀糸や金糸で刺繍したスリッパを突ツかけ

て、シヤナリ〜と歩いて行くのが人の目を惹く。

停車場を降りた私は、一人乗りの馬車を僦ふて、富士洋行にS氏を訪づれた、これも邦人の成功者の一人で、市の中心街に日本雜貨の大きなトコを開いてゐる、トコとは瓜哇語の店を意味する、S氏は又た其の別邸の傍らに更紗工場を設け、多くの土人を使役して可なり多量の製品を輸出してゐる。

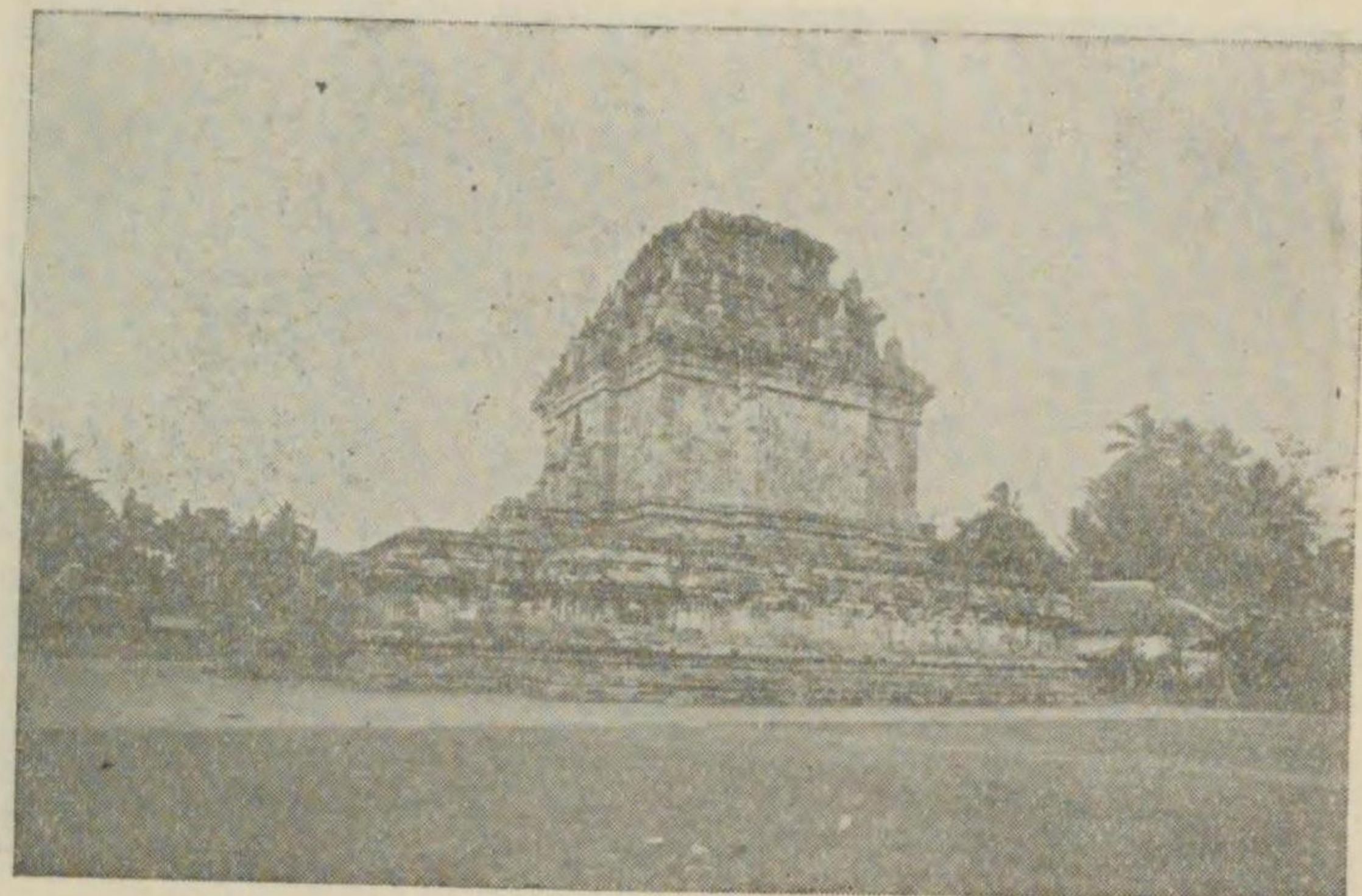
私は詩囊をS氏の別邸に卸した、香りの高い本場の珈琲を飲み、マンゴー、サラツクなどの珍果を喫し、常夏の暑さを浴室の冷水灌頂に攘つた後、主人と共に自動車を走らせて、幾代前の故王が築造したといふタマン、サ

タ マ ン ・ サ ・ リ の 廢 墟



リ、(花苑)の廢墟ををこづれた、高さ一丈、厚さは三頭の馬を駢べ走らしむるに足る墻壁の、一

里の長さに取り囲まれた一種の銷暑殿ともいふべき建造物である、都て赤い煉瓦で登み上げ、上



王妃の修道場、王の寢殿、王妃や宮嬪の寢殿は、土の帳、土の床、何さま土の牢獄のさまにも似て

に煉瓦の細粉と石灰とを混和したものを塗り、處々に臺閣と小亭とあつて、長い廻廊が、その間に迂餘曲折して通じてゐる、青白い苔の花や、名も知らぬ蘭や、まつはり絡む葛蘿を排して、私達は廻廊の中を辿つた、廻廊の隨處には源氏窓の形の牖が穿たれて、牖は毎に池に枕んでゐるが、汀には醜草の生ひ茂り、浮藻ははびこりて、かれ／＼の水は蛇のやうに蒼白く流れてゐるばかり、黄昏よりも暗い廻廊の左右の壁には、處々に燈器を置いたやうな凹みがあり、中には極樂鳥が翼を擴げてゐる形の、はや青錆がして、指を觸れると土のやうに壞れ潰ゆる小さいな燈器の懸つてゐるのもあつた、王の修道場、

る、やがて小さな水閣の前に出た、廣い牖は方池に枕んでゐる、曾ては盈々の泉を湛えて、綃を織る小々波のうちに、あまたの女人に浴を賜ひ、王親からそのうちより嬋妍の美姫を撰んだ處であるといふ、白蘋、死水、今は何の看るところもない荒涼たる廢墟となつてゐる。

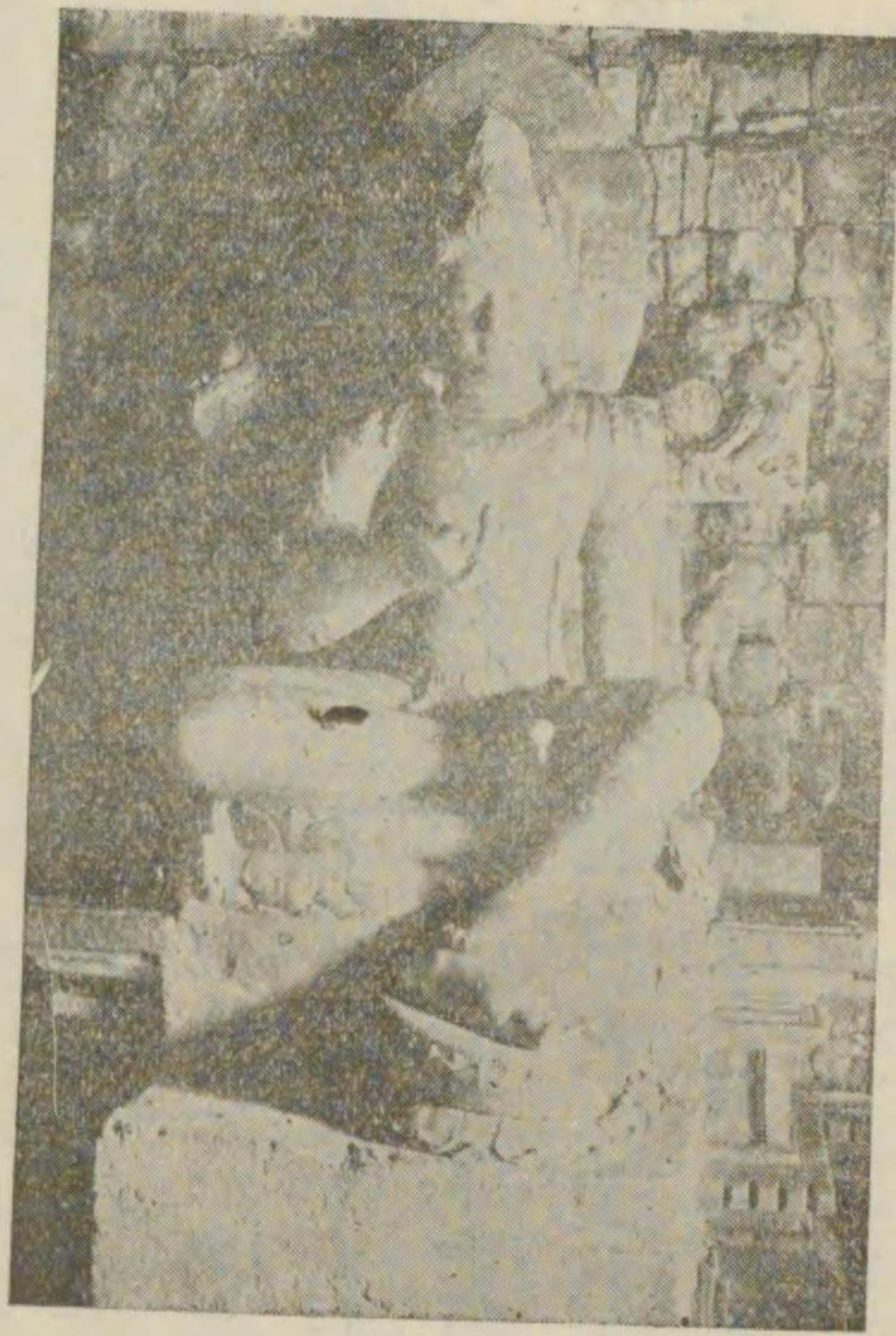
開闢以來の常夏と、その生活の安易とに慣されたこの國のだらしない有様を眼のあたり見た私は、草木と共に朽ち果て、行くその宿命を悲しまずにはゐられなかつた、それでも流石は瓜哇の王家、ジヨクジャ市に栖めるサルタン家は、その統治の實權を擧げて和蘭政廳に任せてゐるが、格式だけは昔のまゝに持ちこたへてゐるのであつた、サルタン王宮の廣場には、濃緑日に榮えた、鬱々蒼々たる二株のワーリンギンの老樹が、左右相對して立つてゐる、その樹の形が、恰も王家の鹵簿を飾る日傘のさまに見えるので、土民はこれを王宮擁護の聖樹と崇めてゐる、王宮の前を過ぐる人達は、歩みを停め掌を合せて拜んで行くのである。

三

私はジヨクジャ市の西北郊外、七哩のところにブラン、パナンの佛蹟を觀た、無數の覆鉢と數

層の基臺より成る三基の寶塔は、全部沙石で築造されてある、私は更に北部二十餘哩を隔てたクドウの丘の上に、ボロブドールの大佛蹟を觀た、打ち開けた廣い野原は、すべて薄紫の穂を抽く

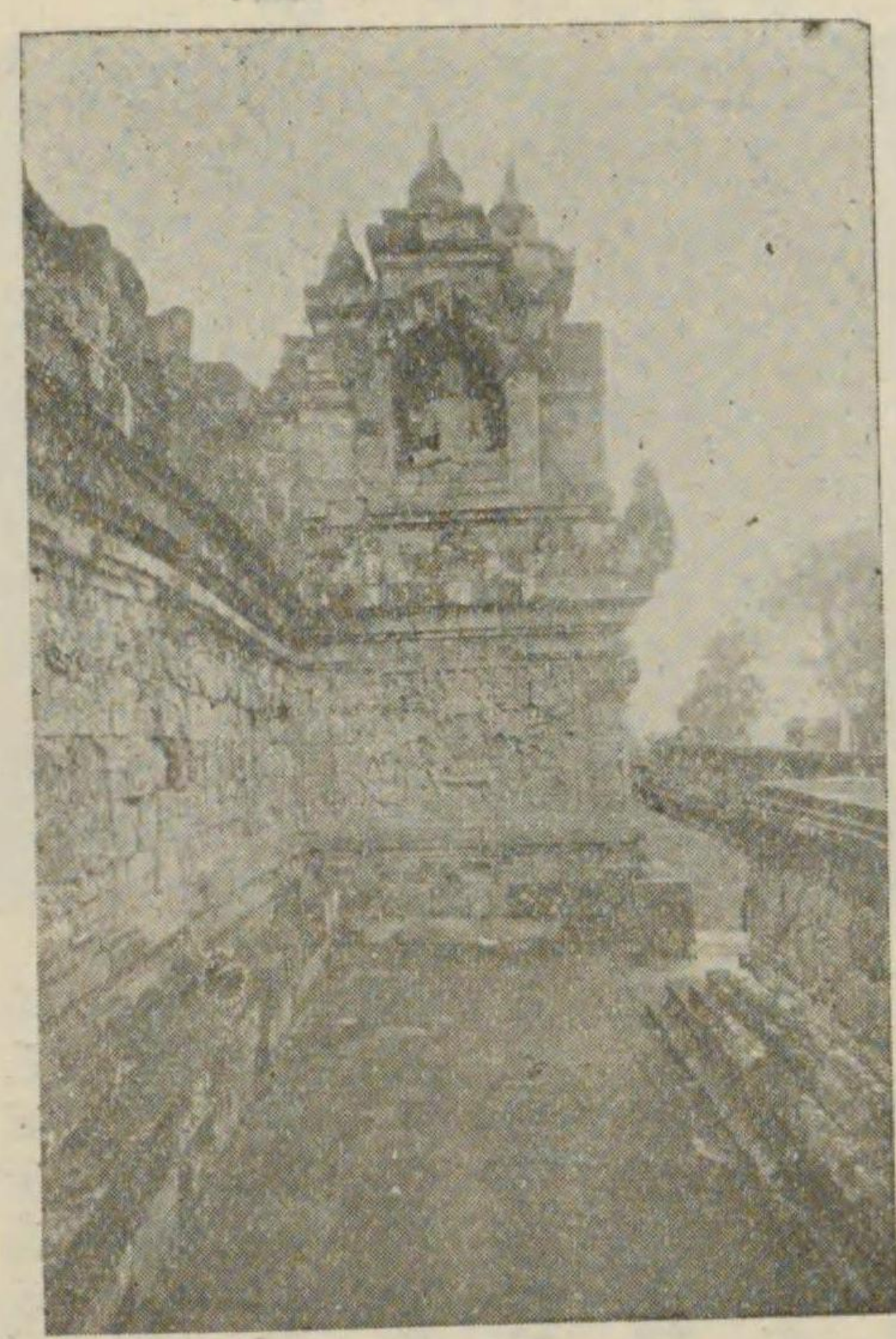
一の佛尊三ある内に塔石



丈なす甘蔗圃である、その中に立つ小高い丘、そこに萬笏天に攢するボロブドールの大佛蹟が聳えてゐるのである、記録に残つてゐる佛教の傳來は、紀元六百年の頃、クージエラ公が百餘隻の船に五千の眷屬家臣を載せて、印度からこの地に渡來し、波羅門教徒を驅逐して佛教國たるマタラン王國を建てた時に始まり、七世紀の頃瓜哇王アヂチャダルマ、七層の寶塔を築いたとある、十世紀以來、佛教やうやく衰へ、十五世紀に及んで、回々教徒の蹂躪するところとなり、佛教徒は、僅かに東方バリー島に遁れて、餘喘を今に留めてゐるのである、一八一一年、瓜哇の一時英領となつた時、總督ラツフルス

卿、この遺蹟を發見し、再び蘭領となつた後、歴代の總督その修理に努め、やがて彼の東蒲寨のアンコール、ワットと共に、世界に著聞する大佛蹟と稱せらるゝに至つたのである。一本の鏝も、又た一匙のセメントも用ひずに、都て沙石で築き上げられたこの大佛蹟は、七千坪平方の地を掩ふて建てられ、十層より成つてゐる、各層の周圍は廻廊となり、その壁には精妙な釋迦一代の浮彫があり、更に四百三十六の壁龕があつて、蓮華臺上に釋迦坐像を安置してある、第七層から絶頂にかけては七十二箇の覆鉢が整列し、覆鉢の中にも一箇毎に佛像がある、絶頂の大覆鉢は、地を抜くこと實に十三丈と註

廊廻のロードプロボ

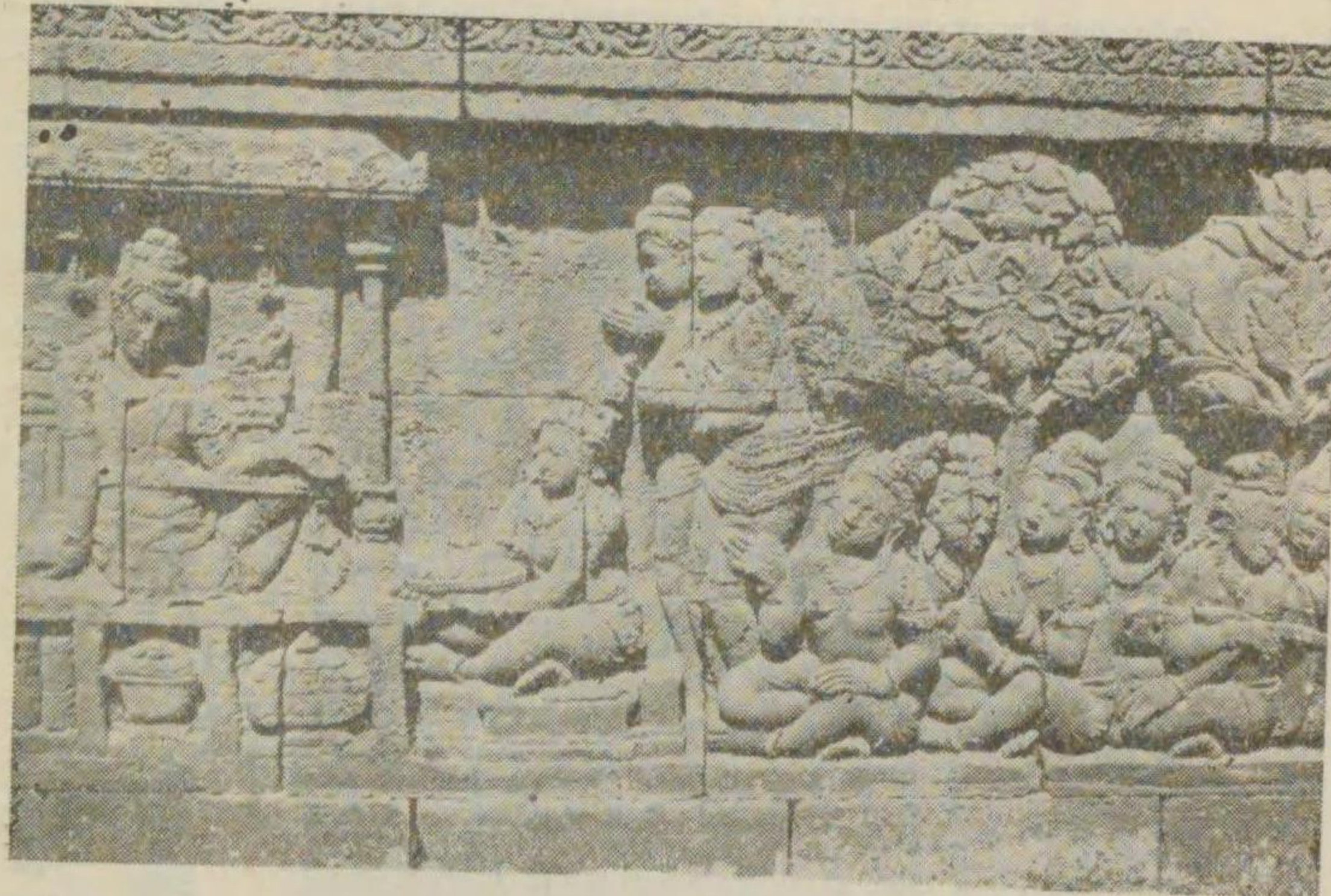


せられる。

廻廊の壁面にある釋迦一代の彫刻物は、兜卒天に在す釋迦、王妃の靈夢、誕生から、出城、修

道、大覺、説教、涅槃に至るまで、當時の匠工が、一刀三禮の誠心を籠めて彫り成したものであ

部一の彫浮面壁



る、その浮彫の壁面を延長すると、實に三哩に亘るといふことである、當時の世相、器用、萬般のさまは、この浮彫のうちから看取せられて、私達は時の移るのも忘れて耽り看めた、但しこのボロブドールを莊嚴する各浮彫のうちには婆羅門教から胚胎したものも交つてゐる、亦た以て熱帯國民の持つ宗教心が、多教神をも受け入れて怪しまない寛容な態度を見ることが出来るのである。

私は更にクドーの丘に近い茂林のうちにチャンデー、メンゾーの佛蹟を訪れた、これも石造建築で高さは七十尺、廣さは四十五尺平方と註せられた、八世紀頃の建造物である、中に高さ一丈ばかりの三箇の佛像が安置されてある、彌陀、三尊の像であらう、妙相端嚴、私は奈良法隆寺畔の中宮寺にある觀世音の木像

の、尊くもいや氣高いそれと思ひ較らべて、微妙じきこの佛の姿に心酔した、支那の大同龍門の

部一の彫浮面壁



佛像といへども、この佛像に比べては、大いに遜色があると思はれた。

クドーの丘の上には、官營の小旅館がある、ボロブドールの佛蹟を前にして、四方に圍む雄峯が展望される、東に高く聳えてゐるものは、メラビーの活火山である、山の形は富士山に似て、その絶頂から、さながら極樂島の柔毛のやうな薄い烟を斷えず噴いてゐる。

四

サルタンの都ジヨクヂヤから、ススーナンの都ソローに入つたのは、ジヨクヂヤの佛蹟巡拜三日の後であつた、午後五時半にジヨクヂヤ驛を發し、七時半にソローに着いた、今までの汽車は狭軌であつた

が、こゝのは廣軌で、一等客室は柔らかい黒革蒲團で一室五人、樂々と手足を伸ばせられる、但し燈火だけはアセチリン瓦斯を用いてゐる、ソロー市についてから、自動車をホテル、シリエル、ソローに驅つてその客となつた。

和蘭では瓜哇統治の政策の上から、王家の權勢を兩分して、その正統直系の王家をソローに居らしめ、これにススナーンの尊號を授け、傍系の王家をジョクジャに居らしめサルタンの貴稱を與へてゐる、ススナーンは宇宙の柱といふ義、サルタンは王の義である、マタラム王朝四百年の裔なる今のススーナンは、瓜哇語で英雄の都といふ意味のスーラカルタのソローの王宮に、日夕美姫と宴遊して、醉生夢死の享樂に沈湎してゐるのである。

ソローの市にO氏がある、大きな雜貨店主で、兼て瓜哇語の新聞社を經營してゐる、亦た瓜哇に成功したものゝ一人である、私はO氏に依つて、ススーナンの王城内を見物し、王の駙馬の侍從長の引接によつて、王殿下に見え、更に王室直屬の男女俳優の演ずる古典劇を観ることを得た。

和蘭理事官のサインした許可證を得た私は、先づ王室劇場へと馬車を驅つた、王宮前の廣場に隣つて植物園がある、瑠瑠、椰子、合歡の大木は、鬱葱として茂つてゐる、そこに散在する獸園のうちには、虎もゐる、豹もゐる、火のやうな舌を吐く巨蟒や、せゝらぎの水に背を晒らして、懶眠に耽つてゐる鱷魚もゐる、一とわたりそれを見物して、劇場の門に入った。王室劇場は、瓜哇風の建物で、都て木造である、棕梠の葉に似たアタツプで、厚く屋根が葺かれてあつた、入口の兩側の扉には、戟のやうな牙を露はして口を開けたカラー魔神の極彩色の繪が描れてある、正面は、更紗の緞帳を絞り上げた舞臺となり、一面の平土間には數十脚の疊椅子が行儀よく排列されてそこが觀覽席である、觀衆は早や半ばその椅子を占めてゐた、髪を明治時代の束髪のやうに結び、青貝釦子の光る筒袖を衣て、華やかなサロンを穿き、頸には聯珠、腕には金環、指に寶石の指環を拵めた貴婦人や、頭はカインカパラで裏み、サロンの上から、乳のあたりに鬘をたゝんで色鮮やかなカイン、パンジャン(上袴)を穿き、細身作りのヒ首を腰にさした侍從武官や、銀釦子の制服に、中折の後半部をそぎ落した帽子を冠つてゐる舍人達や、右の肩から左の脇へ懸け垂らしたスレンジン(肩掛)に睡つてゐる兒を包み抱えた舍人の妻らしい人の群、見渡したところ何れも中流以上のものと思はれた、舞臺に近い數行の椅子席には、青い綱が張りわたされて、普通

の席と區別されてある、王室に縁故ある人の特別席と見られたが、そこには一箇の人もまた来てゐなかつた、私達は、その特別席に近い椅子に案内された。

五

舞臺に隣りて樂手の席、そこには十數人の樂手が手にく樂器を擁して控へてゐた、大きさは一間餘、さながら小舟の型をした朱檀の枠のうちに、短冊型の木片をうち並べた木琴や、丹塗の大きな匣の中に、眞鍮製の大小幾個の伏鉦を置いたものや、長さ三尺もあらうかと思はれる長笛や、一尺にも足らぬ短笛や、大きな磬、白鮫の皮を張つた大鼓、同じ小鼓、蛇皮を張つた蛇皮線、それ等くさくさの樂器を胡坐の膝に載せて、幕の開くのを待つてゐる、觀衆のごよみもやがて靜まつた。

王直室の男優



王直室の女優



偶、見れば、舞臺に垂れてゐた淺黄色の幕は音もなく徐かに揚つた、ソロー王宮を描き現はした極めて簡素の背景の前に、立てるは王と王妃と侍女、三人の武士は胡坐してゐる、私はこれ等數人の登場俳優の絢爛華麗な服裝にまづ驚異の眼を睜つた、紅玉や金剛石を鏤ばめた黄金の寶冠に、濃厚な熱帶國特有の青黄紅紫の錯綜した衣裳を着けた王や王妃、殊に長いカイン、パンジャン（上袴）を穿いた王妃の、乳より上は半裸體で、寶玉の頸飾り、十指の指環、兩耳の珠環、双腕のうで環、手首にも足首に幾個かの金環を拵めたその威儀の美しさは四邊を拂つて看められた、縦へその寶石が眞の寶石でなくて贗物であるにせよ、その衣裳が我が國の能樂師の傳家の重寶でなくてイカ物であるにせよ、その容儀を相應しい典雅な色彩を看取した私は感嘆した。王は顔に丹の隈取をつけてゐた、王妃は白粉を

塗つてゐた、更に三人の武士はと見ると、稜高にカイン、バンジヤンを穿き、その上半の裸身には、頸にも、耳にも、二の腕にも、手首にも、寶石、金環、式のごとく、兩の腕をぬいてその背にかけて、さながら胡蝶の翅のやうな黄金の甲をつけてゐる、頭には鳥兜、我が伎樂の舞人の冠つてゐるものと些しも變らないその鳥兜を戴だいてゐる、我が國の古樂は、唐から傳へられたものが多い、唐樂はその源を西域に發してゐる、更にその源は印度である、私はこの武士の舞人のかぶつてゐる鳥兜を觀て、印度西域に發した舞樂の一脈が、分れて南に走り、この瓜哇に跡を留めたものではなからうかと思つた。

幕が明いた、樂人の座から立ち上つた男があつた、何やら書き記した一片の紙を手にして、朗々と語り出した、ダラン(舞臺監督)である、ダランは先づ舞臺の背景を説明し、更に登場俳優の受持ち役と、その筋書の梗概とを説明するのであると、今ま、私達の眼の前に演ぜらるゝ歌劇は、三百年來この國に傳はつてゐるワーヤン、ウオン、白粉を傳けてする歌劇の一つで、傳説的英雄物語コンソー一代記であつた、其筋書の要領は、昔の或る時代にあつた王室に仇する妖怪を、その王の姫君が、男装してこれを退治するのであるといふ、正しく我が日本武尊が、女装し

て熊襲を研つたといふ英雄的物語を反對に取り扱つたものである、舞臺監督なるダランは、獨り背景や筋書の説明をするのみではなく、又たオーケストラの指揮にも當らねばならぬのである。

六

最初の幕は、妖怪退治の御前會議である、私は登場俳優の技巧よりも、先づそのオーケストラの雍容暢和の樂音に心酔してしまつた、木琴や、伏鉦や、胡弓、長短笛、大小鼓、それから起る高低參差の樂音は、この王室直屬の樂人の、鍛鍊された妙技によつて、その金聲であり、木聲であり、絃聲であり、管聲であるその樂音が、渾然として暢和し混融し、微妙の天籟となつて私の耳を酔はしめたのである、瓜哇にも斯んな立派な音樂があるのか知らず、私は訝かり且つ驚いた。

次の幕は魔王及びその眷屬會議の場であつた、魔王は長髪を振り亂だし、獸の皮の胸服を衣てゐた、被つた朱の假面には唇が耳まで裂け、猪のやうな牙が、吻を割いて露はれてゐた、惡魔の家來も同じ粉装だが黒い面を被つてゐる、そこに三人の道化役者が現はれて、おかしい科をしな

から活躍する、顔には白粉を眞白に塗つてゐた、これ等三人の道化者をセマル、セトルツク、ナガレンといひ、古典劇に舞臺に現はれねばならぬ約束となつてゐるのであるといふ、前の幕の古典的場面を面白しと観めた私は、此に於いて興味の素然たるを覺えた、まるで我が邦の二十五座の神樂を観るやうである、思ふにこの場面は、後世になつて挿入されたものであらう。

次の幕は男装の美姫が、魔王と闘つて之を斬るの場面であつた、美しい姫君は、五彩にいろどる烏兜を戴き、矢を盛つた胡録を負ひ、腰に長劍を佩いてゐた、黒髪、獸衣、これも大刀を横へた大魔王は、刀を抜いて切つてかゝる、美姫は容易に劍を抜かない、身を翻はし、又た身を翻して、右手をその細腰に、左の手を高く抗げて、歌ふその麗はしさ、歌の聲調は、さながら我が追分節に善く似てゐた、我が追分は北海道の怒濤から湧いた民謡で、幽邃にして而かも悽愴、まことに壯士の腸を斷つものがある、しかしながら、この美姫の歌ふその歌は、聲調こそ追分には似通つてはゐるが、極めて優雅に、極めて暢和に、洋々として太平の象ありと謂ふべき歌で、目を冥つて聽いてゐると、心は飄揚として無何有の郷に遊ぶといつたやうな心地がする、私の前で失なつた興味は、再び潮のやうに蘇つて、耳を澄せてその歌聲に陶醉した。

その優婉なる歌聲が終つたと思ふ刹那、私は閉ぢた眼を見ひらいた、美姫の長劍は大魔王の心臓を刺し貫ぬいた、これで歌劇は関つたのであつた。

由來、瓜哇には數種の劇がある、この日觀た古典劇の外に、世話劇、西洋の歌劇に模した新しい劇などがある、更に又た、白い幕に操つり人形の影ばかりを映寫して見せるワーヤンといふ影芝居などがあり、人形芝居もある、この國の劇は家長がその祖先を祭る儀式に胚胎し、やがて巫祝が災禍を攘らふ儀式から發達したものであるといふ、〇氏は私に告げて、今日の最後の幕に出た男装の美姫に扮した女優は、王室直屬の俳優中の第一人者で、殊に美しい音聲をもつてゐる人氣役者であるといつた。

丁度、魔王眷屬會議の幕明きの時であつた、髪を背中に結び下げた眉目好い二人の少女が乳母と見える老女や侍女達に冊かれて特別觀覽席に入つて來た、サルタン王の二十一番目と二十三番目の公主であるさうな、公主達も老女も侍女も純瓜哇風の服裝であつた、我儘一杯に育てられた兩公主は、金糸で刺繡したスリツパで椅子の上に乗し、舞臺に半身を寄せ、飴菓子を舐りながら傍若無人に振舞つてゐたが、老女も、侍女も、他の看衆も、舞臺監督なる彼のダランも、その爲す

がまゝに任せて一言の制止も敢てしなかつた、劇閲つて、看衆の場を出る時、公主達もその群に交つて場外に出て来た、偶、老女は路上に唾した、唾は石竹の花のやうに眞紅であつた、私は咯血したのではないかしらと驚いた、小川氏は語る、瓜哇の土人は檳榔子と石灰とを椰子の嫩葉に包んで常にこれを咬んで唾を吐く、彼等唯一の嗜好物である、されば檳榔子を咬む中年以上の人の齒は、鐵漿をつけたやうに、都て茄子紺色に黒いのである。

七

ホテルではO氏と共に、殊に注文して置いたライステープルの午餐をした。粘力のない瓜哇米は、匙で掬ふとさらさらと霰のやうに皿に落ちる、七八人のジョンゴス(給仕人)が鷲次雁行して擎げ来る幾枚の皿の上から鶏肉、魚肉、蕃椒、小鰈の佃煮、辣蕪、タビオカ、馬鈴薯、數知れぬ藥味を分ち取つて食べるのである、午餐を終つた後、酷しい午熱の中を歩いて公設質屋を見物してから、いよ／＼スヌーナン殿下の居られる王城さして、馬車を驅つた。

細かい緑の葉の蔭がくれに、深紅の優しい花を見せた合歡の大樹の並木道を過ぎると、やがて

王宮前の廣場であつた、王宮は三重の墻壁で圍まれ、墻毎に門がある、カーキ色の木綿の上衣にサロンを穿つた跣足の土人兵士が門を護つてゐた、第三の門を入ると、そこが王宮の玄關である、玄關の左右には、頭が虎、胴が獅子で、その背に大きな翼をもつた奇古な神獸の石像が置かれてあつた、正面には瓜哇風の歩衝があり、歩衝の蔭には半裸體の舍人達が、サロン姿で胡坐の膝を並べて控へてゐた、私達は和蘭理事官からの許可證をその人達に見せた、舍人の一人はそれを持つて小走に奥へと入いつた、待つこと久し、やがて整石の床の彼方から、サロンの上に派手な更紗のカイン、バンジャン(上袴)を乳のあたりから稜高に著流した一壯夫が跣足のまゝで立ち現はれた、頭はカバラで裹み、深紅のスレンダン(肩掛)を懸け、腰の右には寶玉を鏤ばめたクリス(匕首)を、左には金色の短かい太刀を横たへて、半裸身のその骨格の逞ましき、齡は二十四五と覺しく、髭を綺麗に剃り落して、眉目清秀、まことに好箇の美男子であつた、O氏を見て微笑して、大きな掌を伸べて握手しながら、何事か語り合つたが、幾たびか點頭いて更に私の前に進み寄つて握手を求めた。

この美男子こそ、スヌーナン王家の侍従長で、しかも第十八番目の公主の駙馬であつた、若い

侍従長は、O氏から私の身分、職業、年齒などを詳しく聞いて、珍客善くこそ來給ひしと慇懃に私の先に立つて案内した、ヘルメットを左の脇にはさんで、私はつゝましく後からつゞいた、石板を敷きつめた長い廊下を出ると、代赭の土の色を、あらはに見せた廣い庭があつた、そこには一株の木、一莖の草もない、砂庭に圍まれて、柱も、欄干も、床も、長押も、皆な一樣の白い大理石で築造された涼しげな御殿があつた、私は先づ石の階の下に立つて、仰ぎ瞻た、御殿は、疊二三百枚を敷かれ得るほどの廣さであらう、その中央、二三十疊敷と思はれる部屋の真中に、金色の覆輪のある眩掛椅子、朱檀の卓、それが王の御座である、玉座の次の間には、王室劇場で見たやうな各種の樂器が置かれてあつた、洞然として打ち響き、宥然として遠かなるこの宮殿は、この外に何等の長物も置いてない。

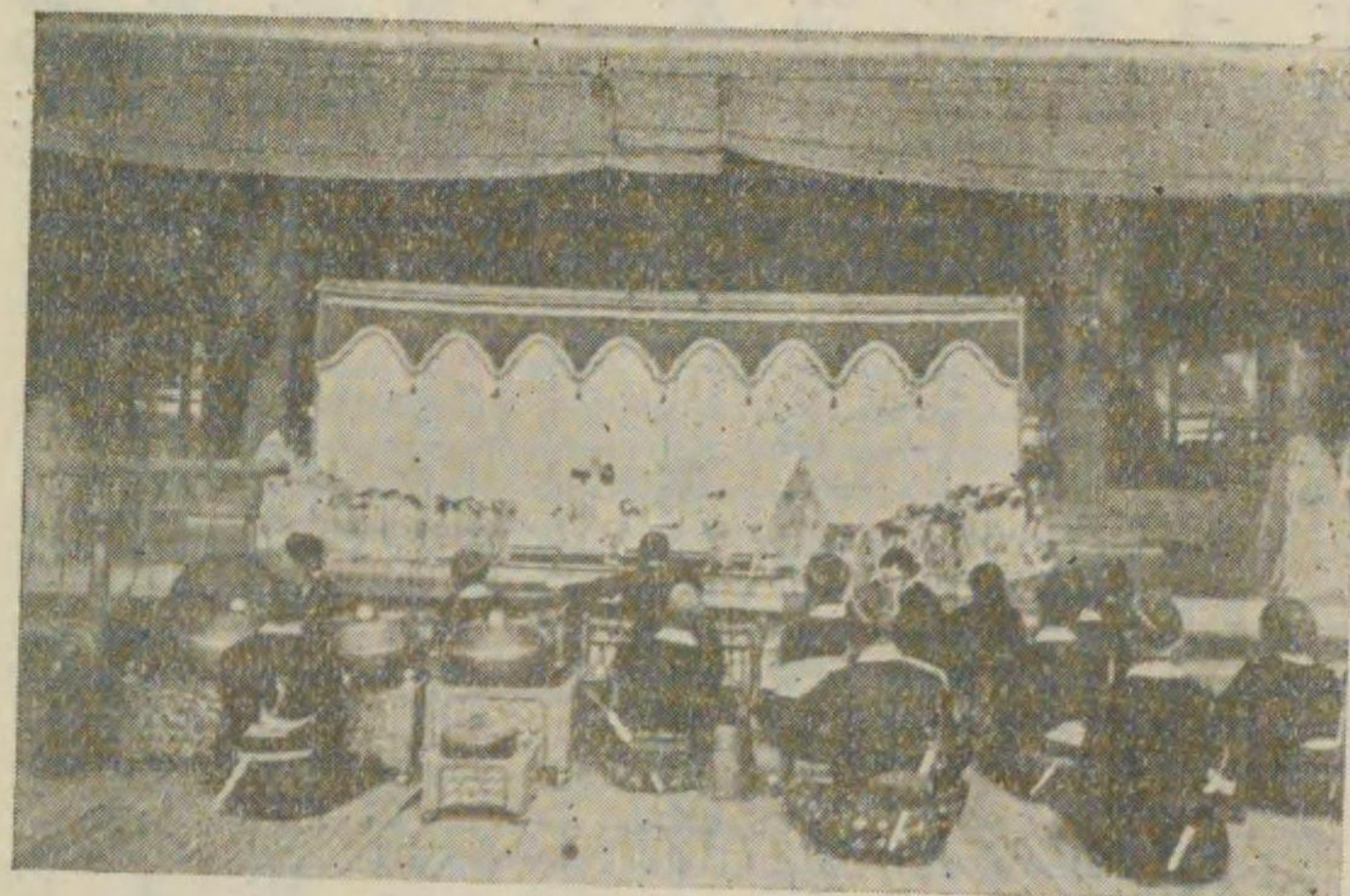
私等は、侍従長の後に随がつて石の階の下を歩いた、偶、見ると、何處からともなく、清らかな水は涓々としてその砂庭の中に流れ入つた、絹のやうな小波を變みながら、水は音もなく盈々として庭の淨沙のうへに敷くのである、沙の庭はやがて漫々たる泉池に變つてしまつた、照る日の影は、その清淺の水を映射してきら／＼と柱、欄干、楣間の邊に雲や龍の姿を描がき、青い簷

や赤い瓦屋根は、倒しまに影を靜かな波に醜した、水を掠める涼風は、細々と吹いて御殿を包んで仕舞つた。

この時、私は迴廊の彼方から、數十人の侍従達が半裸身、カイン、バヂヤンの正装で、雁行しつゝ來るのを見た、一列の人は玉座の左右に、更に一列の人は階の上下左右に蹲踞し、兩手を前に、首を俛れ、いと謹ましやかに威儀を正して坐した、O氏は、私に私語いて王殿下の出御であるといつた。

やがて王殿下は、十數人の侍従を随がへて深殿の彼方から徐かに出御された、青光のする上衣に、古代模様のパンヂヤンを穿き、足は金糸で刺繡したスリッパを履んでをられた、靜かに椅子に腰を卸して、卓上にあつた紙片を手に執られたやうに見られた、王殿下の出御と同時に、次の部屋からいかにも物靜かな音樂が起つた、私を案内した侍従長は、この時遽かに膝を折つて階下に跪づいて、合掌して王殿下を拜した、私は脇に挟んでゐたヘルメットを床の上に置いて、立禮の式によつて敬禮した。

影繪芝居のそと樂人團



てゐた、木琴、胡弓、鉦、磬、大小鼓、長短笛、その交響樂はいかにも婉雅で優雅たるものであ

八

この日は恰も和蘭女帝陛下の第一公主ユリアナ姫殿下第十八回の誕辰であつた、和蘭の理事官は、その誕辰祝賀の夜宴を張るべく、晝のうちから多忙の爲めに私を帶同して謁見することが出来なかつた、外國人の謁見には、常に理事官の侍立を要する、それほど多大の注意を拂つてゐるのである、私の公けに謁見することを得なかつたのは、その爲であつた、私は年若い侍従長の心入れで、唯だ相見えて敬意を表したことに満足した。

やがて王殿下は奥殿に入られた、私は侍従長の後に跟着いて殿上に昇つた、宮中の樂手はこの時まで音樂を奏し

つた、そのうちの一人に老女の唱歌手があつた、何といふ好い聲をもつた老女であらう、私はこ

こでもその歌聲に心酔した、鉦を撃つ撥の、薄い象牙の小さな圓盤に、長い柄をつけたものであるのも私の好奇の眼を惹いた。

御殿を下りて、私は廻廊の彼方にある割禮殿を觀た、回々教の儀式に由つて男子は七歳女子は五歳の時に行はるゝ割禮の儀場である、私は更に第三廻廊から順次に見物した、多くは王室の武庫である、累代の王の用ゐた王冠、甲冑、刀劍、楯、鉾などは、何れも金剛石や紅玉、翠玉が鑲められてあつた、和蘭製の、古色蒼然たる大砲もあつた、廻廊の隅には幾個の部屋がつゞいてゐる、その一室を覗いて見ると、四十ばかりの瘦せた人が五六

シヤグ更紗を描く女工



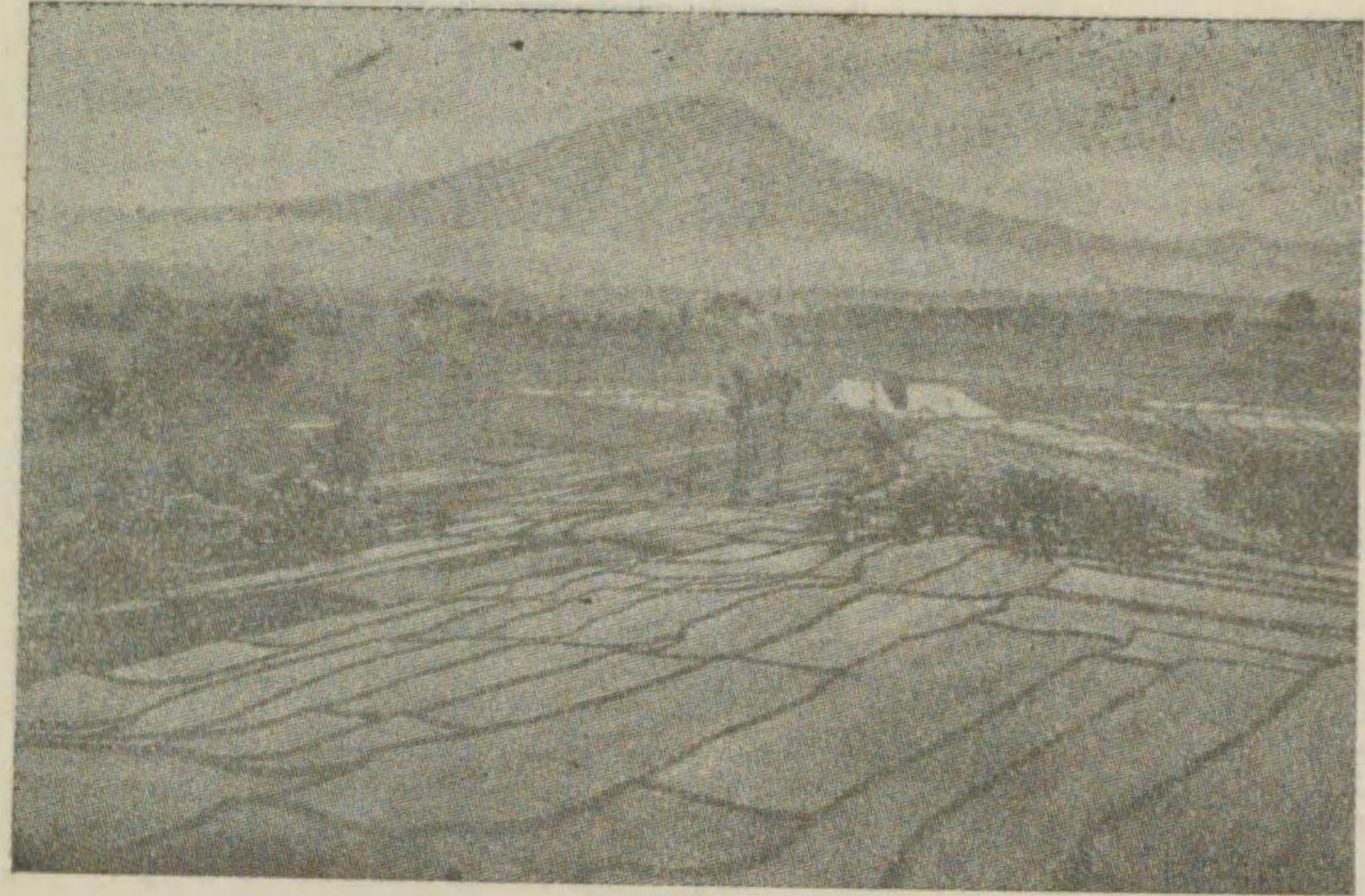
人の役人と共に、床の上に紙幣や銀貨や銅錢を撒き散らしてその計算に努めてゐる、明日王殿下

が、茂林と修竹とに囲まれた近郊の避暑殿へ行啓されるその費用を調べてゐるのであるといふ、

四十男は、大藏大臣某氏であつた、傍の部屋の扉が啓くと、髭を蓄へた長身の人が現はれて、O氏を見て互ひに軽く會釋した、それは總理大臣某氏である。

第二の廻廊には、宮中の宴會に用ゆる金銀の食器やギヤマンの瓶子、高脚盃などが陳列されてある、現代式の武器、主として多くの銃器もあつた、數多の雜役人は、廊下の床の上で、しきりに銃器の手入に努しんでゐる、劔の柄に短銃が取りつけられ、且つ撃ち且つ射る奇妙な武器もあつた、第一廻廊は、和蘭政府から寄贈した金色燦然たる御料馬車や、寶輦や、鹵簿に用ゆる金色の三蓋日傘が陳列されてあつた、その華麗な馬車や寶輦を觀た私は、和蘭政府がマタラン王室に、豪華と奢侈とを教えて多くの内帑を消耗せしめたことを知つた。

舍田の—ロツ



廊下の一室には、又た影芝居に用ゆる操り人形が幾個の函に收められてあつた、牛皮に精妙な極

彩色を施して、水牛の柄を取りつけたものである、その數、幾千枚、宮中の貴嬪達が夜の團欒に寫して娛しむものであるといふ、薄暗い他の幾個の室には、老女の群が、蠟を盛つた管針を執つて、丈なす布に更紗の繪を描いてゐた、これも亦た後宮の御料となるのである。

私達は、最後に七層の時計臺に登つた、宮中の各殿は一望のうちに收められた、しかし幾十百人の美姫の栖む後宮だけは、深樹のうちにその屋根瓦の隠見してゐるのを望むのみで、一人の姿さへも見る事が出来なかつた、私達は時計臺を降りた。

王の駙馬なる侍従長は、私達を玄關まで送つて出た、

景小園田の—ロツ



そして私にもO氏にも握手して相別れた。

この夜私は、昨夏徳川侯爵が、三夜の旅寝を重ねたといふホテルのその一室で、ユリヤナ公主

十八回誕辰祝賀の夜宴に吹奏せらるゝ華やかな樂音が、涼風を傳ふて訪づれ来るのを聞きながら曉まで甘睡した。



感 應 の ソ ア リ ド

宮中に入つても帽子を脱がず、ステツキを振り廻して指呼しつゝ、傍若無人の舉動を敢てした、し

かるに今日の日本紳士は、頗る謙讓に、步趨、進退、誠に禮儀に適つてをられた、私は感激した、よろしく貴國紳士にこのことを寄語されたいとの事であつたといふ、縦、今こそ衰殘の王家とはいへ、國人は尙ほ宇宙の柱の尊號の下にその王を崇敬してゐる。國威といふことを笠にきて、非禮を彼に加ふることは、敢へてなさざるところであると私は答へた。

ソローからスラバヤへ

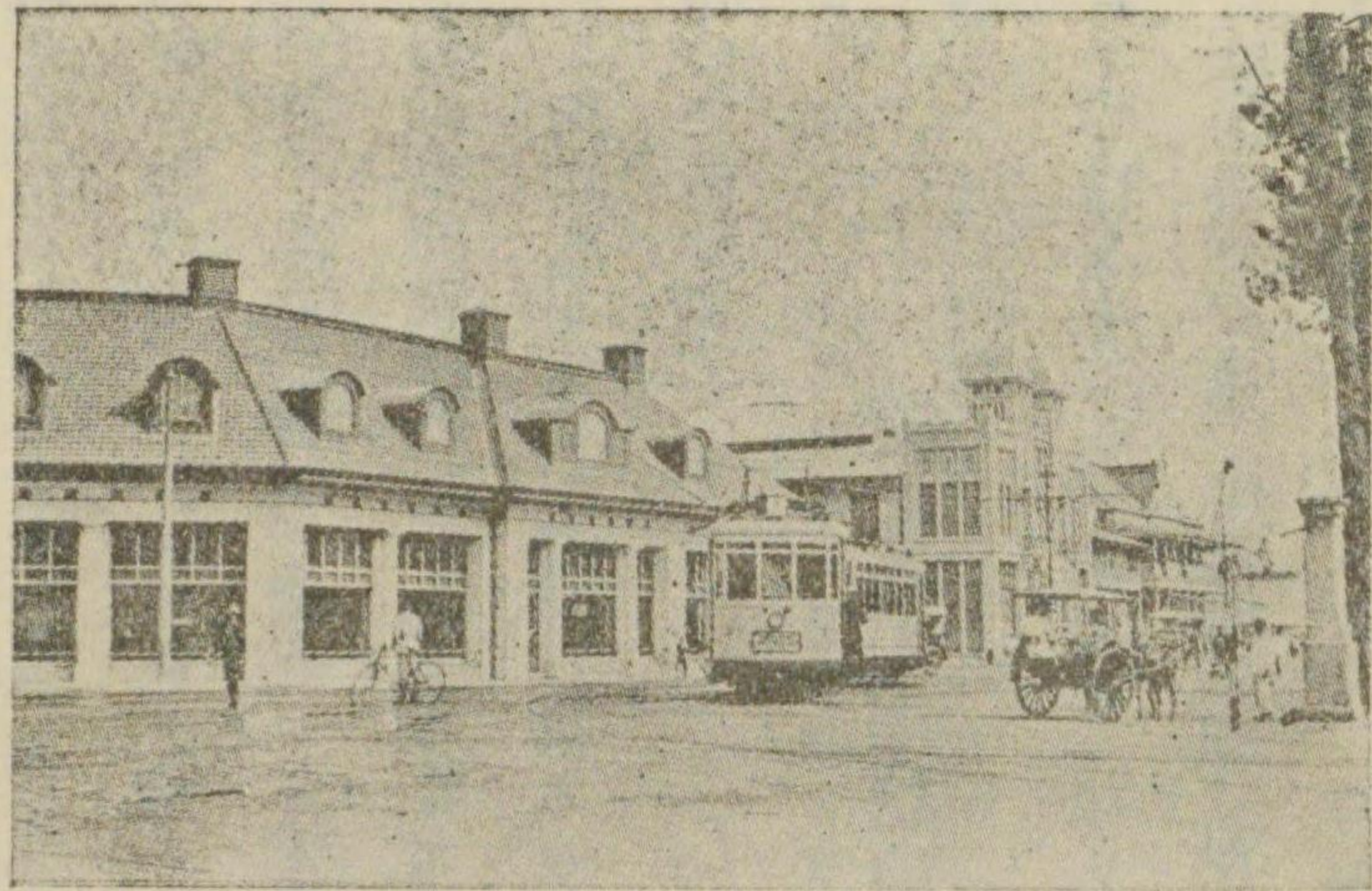
本場で旨いジャガタラ芋

午後二時、ソローの城市を去つて、汽車五時間、夜の燈光華のやうなスラバヤに入ったのは、正に七時であつた。

B氏の自動車は、停車場に私達を待つてゐた、私は華麗な家並、雑沓せる大路の賑はひよりも、先づ新聞記者が自家用自動車を持つてゐるのに敬服した。

B氏は私を、此市唯一の日本旅館Tホテルに送り届けて自邸へと車を回した、瓜哇に十數日の旅路を重ねた私は、バタビヤの箱根ホテルに宿つた以來、到る所の名邑大都では、皆紅毛人のホテルの客となつたのである、朝、晝、晩、の三餐は、都て膾炙の食である、私は老來肉食よりも蔬菜の方を好んでゐる、瓜哇の洋風旅館の食膳のうちで、尤も私を喜ばしたものは馬鈴薯であつた、ジャガタラ芋發祥地といはれる昔のジャガタラ、今の瓜哇にあつては、ジャガタラ芋は誠に

街市のヤパラス



好味のものである、本邦のジャガタラ芋は水分多く甘味に乏しく、咬んで齒牙に粘着する渣滓あるに反して、瓜哇のジャガタラ芋は、さながら薄い雁皮のやうな紅い皮を有つ川越本場の薩摩薯を食ふ如く、又新たに蒸籠を出でたる茹栗を啖ふが如く、ボク／＼として一種の香味の忘れ難いものがある、されば隨處のホテルでは、それを自慢にして、皿を換ふる毎に、肉にも魚にも、ジャガタラ芋を添へない食堂はないのである。

私は泊り／＼のホテルに於いてこのジャガタラ芋を飽喫して美しと稱へた、ジャガタラ芋を除いては、鮮美なる蔬菜を喰べた事はない、アスパラカスは例の罐詰物である、キャベツも亦た美味いものに出會ない、一體、この國には美味い野菜は無いのである、但し、竹の子は鮮美なものがある、しかしそれは西部瓜哇に限られてゐる、疣の少ない胡瓜、剥げちよろけた茄

子、とてもうまくない。

わたくしはホテルの食堂で久しぶりの日本食を攝つたのである、鯛の眼玉の潮、鯉らしい魚の刺身、蝦の酢の物、半片と松茸と蝦との茶碗蒸、私は故國の料理を故國の姐さんのお給仕で、飽喫した、獨り遺憾に思つた事は、日本酒のないことである、日本酒は熱帯を通過すると多くは酸敗してしまふ、私は已むを得ずウキスキー、ソーダを飲んだ、私はこの旅館で、元我社の同人であつたY氏に端りなくも邂逅した、氏は東京旅商隊を率ゐて、前夜チエリボン丸でスラバヤに到着したのであつた。

闇に咲く解語の花

ソローでは、ホテル、シリエル、ソローの客となつた、タマリンドの並木ある廣衢を前にして、前庭には花卉を裁る、中央が母屋、左右に平家作りの客室が取り圍んでゐる、私の詩囊を卸したところは玄關から細い小路を隔てた大路に面した一室で、徳川侯や、藤山雷太さんの來られた時に行李を置いた部屋だといふことである。

丁度、雨季から乾季に入つて、一年中で尤も暑い時であるといふので、旅行者も尠い爲めか、着いた當夜、食堂に出て見ると、客は私達を入れて僅か七人、しかも男切れといへば私達二人のみで、残る五人の都てが和蘭の婦人であるのに尠からず面食らつた、中央は私達の食卓、私の右手にある他の食卓には、鷺のやうな覗き鼻を有つてゐるオールドミス、遙か離れた向ふの席には、頬に大きな黒子のある二十二三の瘦た婦人、後の三人も思ひ／＼に一個づゝ食卓を占領してゐるその中で、混血兒とも思はれる髪の毛の黒い眼の大きな十八九の處女、この一人が女客のうちの花であつた、同伴者のMさんは、永らく瓜哇にゐて土語に通じてゐる、食事が済んで部屋に歸つてジョンゴス(ボーイ)に訊いて見ると、純粹の旅行者は私達二人のみで、五人の婦人のうちの四人はこの地の學校へ勤めてゐる教員さん、髪の毛の黒い婦人は、矢張りこの市の役人のタイピストで、皆此ホテルの二階に下宿をしてゐるのだといふ、私達は、端りなくも女護の島へ泊り合せたのであつた。

水浴をすませ、ピヂヤマに衣換へて部屋の前のベランダで、水のやうな夜涼にひたつてゐると、涼を趁ふ人達で往來は賑やかである、風に傳ふて音樂の合奏も聞えて來る、訊けば今日は和

蘭女皇陛下の第一公主ユリアナ姫殿下の第十八回の誕辰で、この夜は某ホテルで夜會があるのだといふ、私達は疲れてゐるので臥戸に入つたが、夜が次第に更けて行つても往來の賑やかさは増すばかり、トロと／＼睡んだかと思ふうちに、忽ち痾高に笑ひさゞめく女人の聲に眼が醒めた、時計を見ると午前二時半、路ゆく人はやうやく杜絶えた丑滿過ぎ、或は高く或ひは低く語り且つ笑ふ數人の男女の聲は、正しく大路に傍へる並木の蔭から聞ゆるのであつた。

漢上、桑間の鄭聲は、何れの國にもあることだ、私は瓜哇の土を踏んで、殊にこの國に姪磨の風のあるのを想つた。

佛教徒の栖むバリー島

瓜哇の東端なるスラバヤは、これを瓜哇の西端なるバタビヤに較べて、頗る活氣の横溢するを見る、大濠洲を控へてゐる港であるからである、水には千櫓を簇がらし、陸には萬墓をたゞむと、詩人ならば歌ふべき繁華な海市である。

私はこの地の三井銀行のS氏や三井物産のU氏等の厚意によつて、數日をおの股賑なる海市に

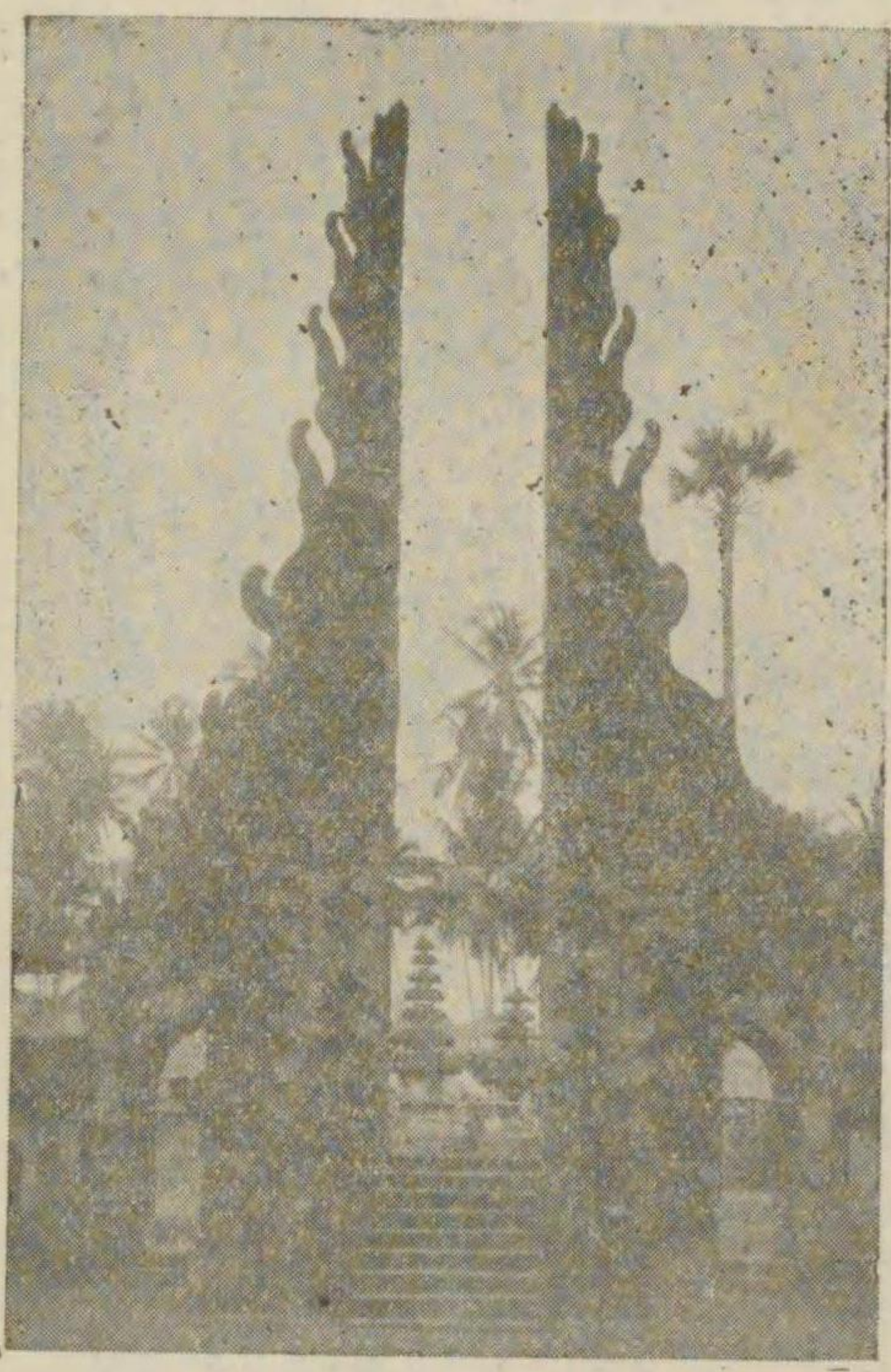
過ぎした、その間、海拔六千餘尺と註せらるゝトサリの清涼郷にも遊んだ、八千尺と稱せらるゝプロモの大火山にも登攀した。

スラバヤが、居然たる海市となつたのは、七八十年以來のことである、それまでは丁度我横濱が今から六七十年前までは蟹舍蟹莊、極めて落莫たる寒村であつたと同様であつたのである、スラバヤは、今から百年以前までは、一個の漁村さへなく、鱧や鱷の棲處であつたのである、スラバヤのスラといふ言葉は鱧といふ義、バヤといふ言葉は鱷のことである、すなはちその當時のスラバヤは、正しく鮫鱷の淵であつたのである、その時代の海市は現在のスラバヤを距ること幾十里のキリセであつたと傳はつてゐる、アラブ種の渡海し殖民した處である、アラブの回教徒は先住民の印度の佛教徒や波羅門教徒を驅逐して、その殿堂を破却して了つた、印度種屬は今やスラバヤから二日航程のバリー島に餘喘を保つてゐる。

私がスラバヤに入つた頃、そのバリー島に火祭と稱する盛大な年中行事の波羅門教徒の祭事があつた、私は遊意の動くを禁じ得なかつたが、歸期の既に迫るの故をもつて、唯土地の新聞紙によつて、この怪奇にして殷盛なる祭の様を想望するのみであつた、バリーの島民は彫刻の技に巧

である、殿堂、佛閣、隨處にその技巧を發揮してゐる、私の宿つたTホテルの主人は、年毎に此島に渡つて土人の彫匠の手に成つた彫像を將來し、食堂の棚に飾つて旅人の購ひ去るを待つてゐる、鐵木とも見られる堅い木材に彫られ

門閭の落村島-リバ



た各種異様の彫像は、購ひ歸つて書齋の珍玩となすに足るものが少くなかつた、私は貧寒なる財囊を傾けて、迦陵頻迦に騎れる天女の像を購ひ得た、南洋協會のストラバヤ商品陳列館長Y氏は、私の爲に更にその一個を買ふて私に贈られた、南洋郵船のU氏も、亦私の瓜哇渡來記念として、ソロー武士の佩べる瓜哇刀と、セレベスの土民が魚を射るに用ゆる竹製の鋸及び半弓を贈られた。

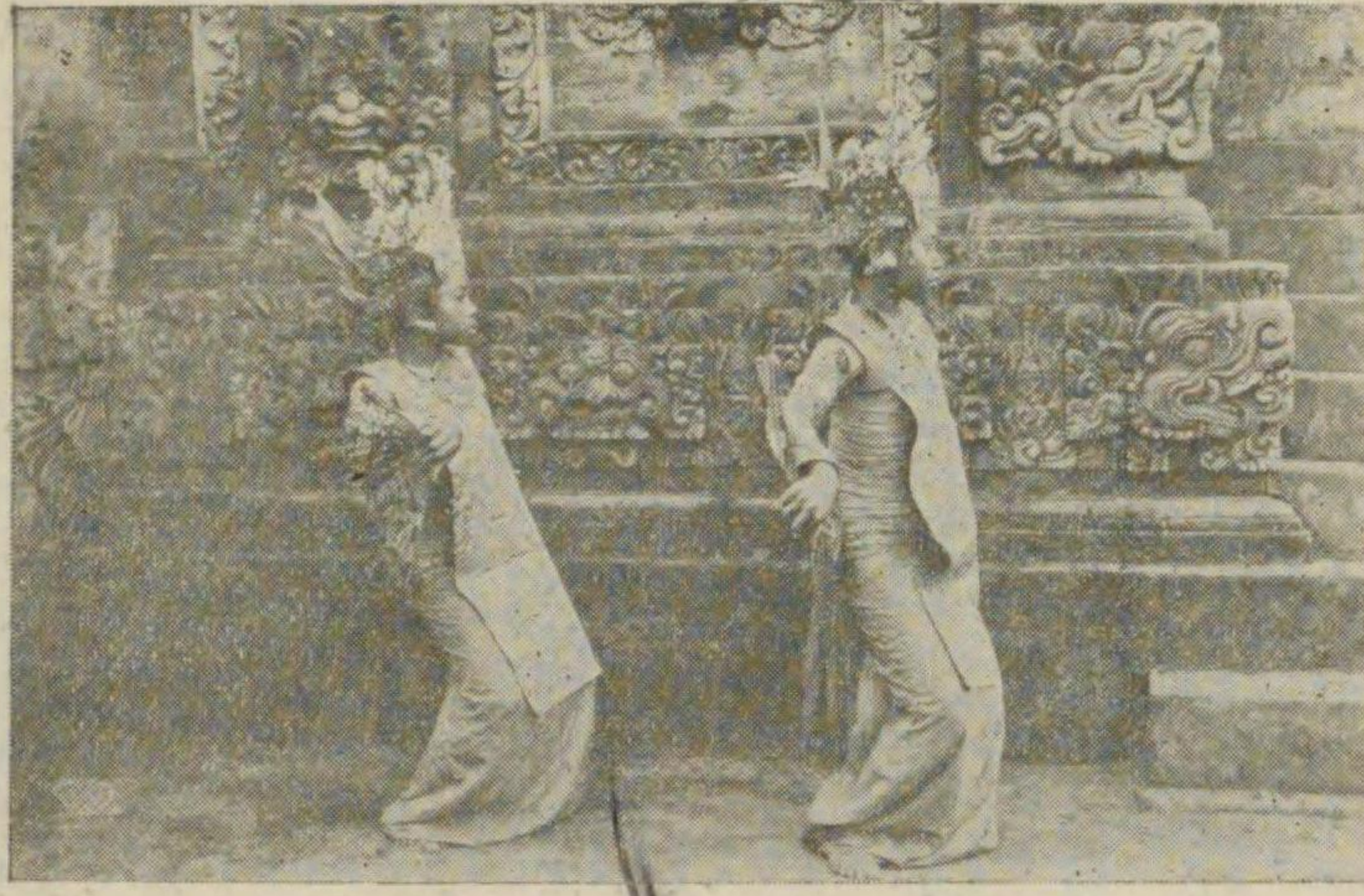
夏知らぬトサリの清涼郷へ

ストラバヤの海市は、極めて明かるい港であつた、南溟の海氣はこゝに氤氳して、朝には蜃樓を現じ、夕には虹橋を架け、空は碧く、大氣は澄みて、誠に游子の久戀の地であつた。

三井物産のU氏と三井銀行のS氏とは、私にトサリの清涼郷と、プロモの活火山に遊ぶべく慫慂した、銀行のT氏がその東道の主人であつた、ガロー、ジヨクヂヤ、ソローに私と共に數日の旅寢を重ねた瓜哇日報のB氏も二日の暇を割愛して、亦たこの游を共にした。

トサリの清涼郷へ行くには、汽車ならばストラバヤ驛から上車してバセロアン驛で降り、更に自動車を驅り登山するのである、自動車ならば、直路トサ

樂舞の宮玉島-リバ



ら上車してバセロアン驛で降り、更に自動車を驅り登山するのである、自動車ならば、直路トサ

リ街道を快駛して、デンガー峻峯の半腹に至ることが出来る、共に約二時間半の行程である、薄紫の靄籠むるこの曉、銀行からの自動車は早や門に候してゐた、山の上は寒むいから三四枚の襦衣、外套の用意も肝腎と、手當り次第トランクに詰めこんで、直ちに自動車の人となつた、甘蔗の里、タビオカの村、賑やかな町、靜かな郷、バセアロン驛から西に折れて、ひたはしりに山に入る、大甕を割つたやうな懸崖の路を、迂餘して車は徐かに登る、車上にあつて眺望すると、長風吹き晴れて靄の薄れ行くその間に、スラバヤの丹瓦粉壁の、朝日に光る蒸々たる萬家の市を見はるかし、碧波浩蕩として空に連なる大海原の、或は晴れ、或は陰り、そこに明霞を拖き、かしこに白衣蒼狗の雲を點じて、マヅラ島、バリ島、碁布する八十島の島がくれ行く出船入船、眸を脚下に轉すれば、葉山、繁山、蟲々として立つ喬木は、さながら春の野邊の薺草とばかりその梢を俯瞰し、盤舞の鷺鳥の背をも見せて、山村水廓、綺錯して日に媚ぶる雄大なるその景趣は、筆にも言葉にも及びがたく思はれた。

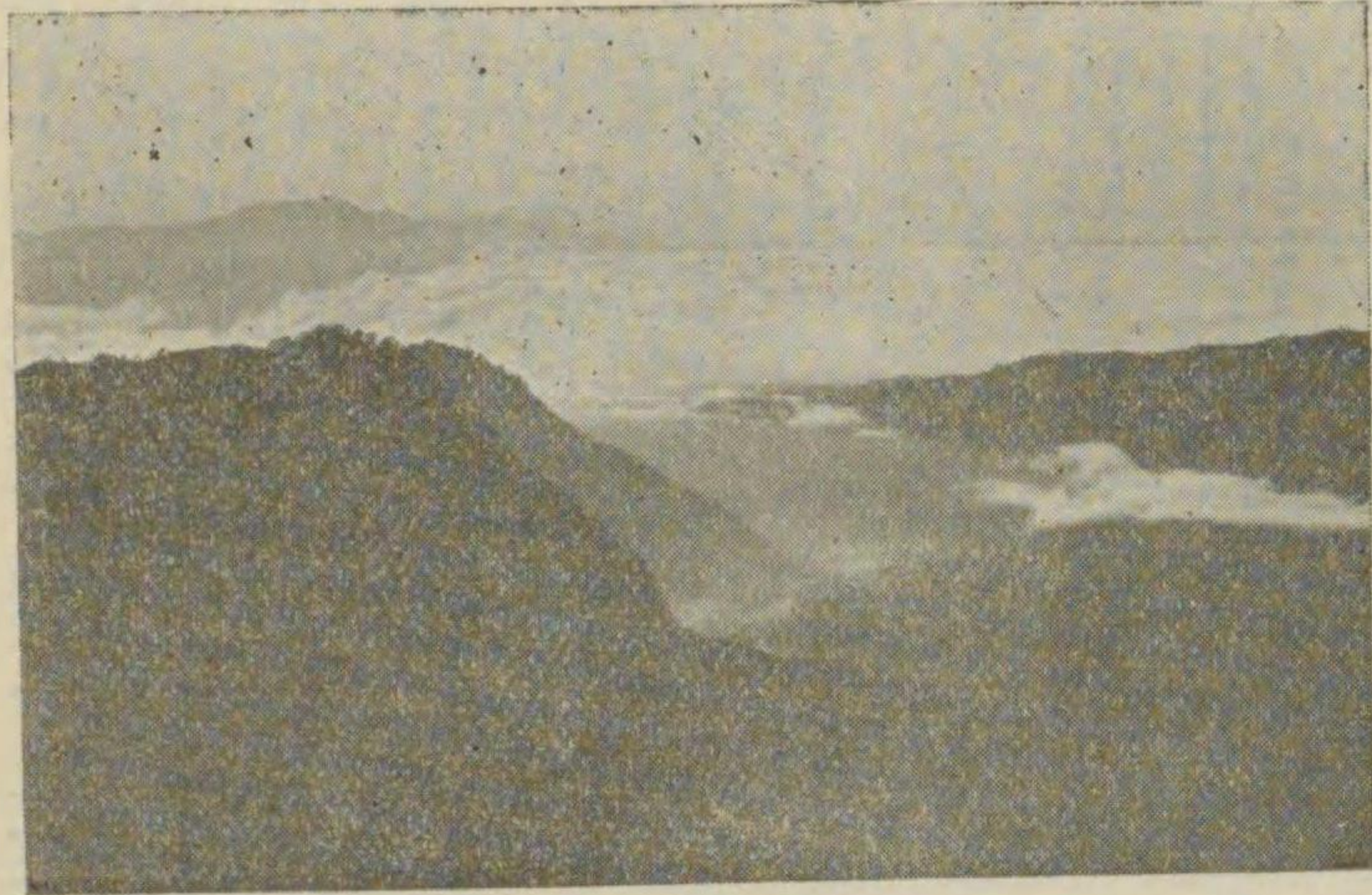
途にプースポアの人の栖める寒村を通つた、この種屬は、瓜哇にあつて唯一の拜火教徒で、他の種屬と絶へて婚嫁を通ぜず、山に樵り、谷に漁り、この山奥の一廓に孤居してゐるのである

といふ、路の曲折して車行の甚だ危険なる處には、曾つて此處に墜落の慘事を出した自動車の殘骸を懸け列ねて、注意せよと大書したる木標を立て、あ

る、運轉手は細心にハンドル執つて、徐々として輾り進む。

峯を踰え谷に傍ふて、やがてトサリの郷に入つた、海拔六千五百尺の高地にあつて、熱帶國にはあるまじき氣温の低さ、なだらかな阪を夾んで簇々數十家、そこにある一軒の邦人寫眞師の家を除いては、いづれも湫隘なる土人の宅である、村の盡頭、そこに形勝の地を相して、バンガロ風に建てられた、ホテル、サナトリウムは、蒼岨の上にあつて眺望雄大に、母屋を中にして此處に、彼處に、バビリオン風に建てられた客室は、薔薇の垣根、

トサリ溪谷の雲海



葛蘿の簪、百日葵、躑躅、錢葵などの花咲く小庭に圍まれて、儘ま旅客の選擇に任せてある、白髮

の老和蘭人、スリッパのまゝ扉を啓いて一晒私達を迎へ、好くこそ來給ひしと懇ろに内に請じて煖爐の傍に椅子を移し、温たかき紅茶を供す、九十度の地上から、一躍してこの清涼郷の客となる、晩秋かと訝かる風は襟に輕寒を吹き入れて覺えず外套の襟を立てた、日本のお方ならボン、レパスがお氣に召さう、ボーイを呼んで案内さす、導かれて母屋を出で、離家を見て廻る、母屋の廣庭、そこに鬱乎として生ひ茂つたヒマラヤ杉の陰に大きな寒暑鉞が懸つてゐた、正に六十度を指してゐた、寒い筈である。

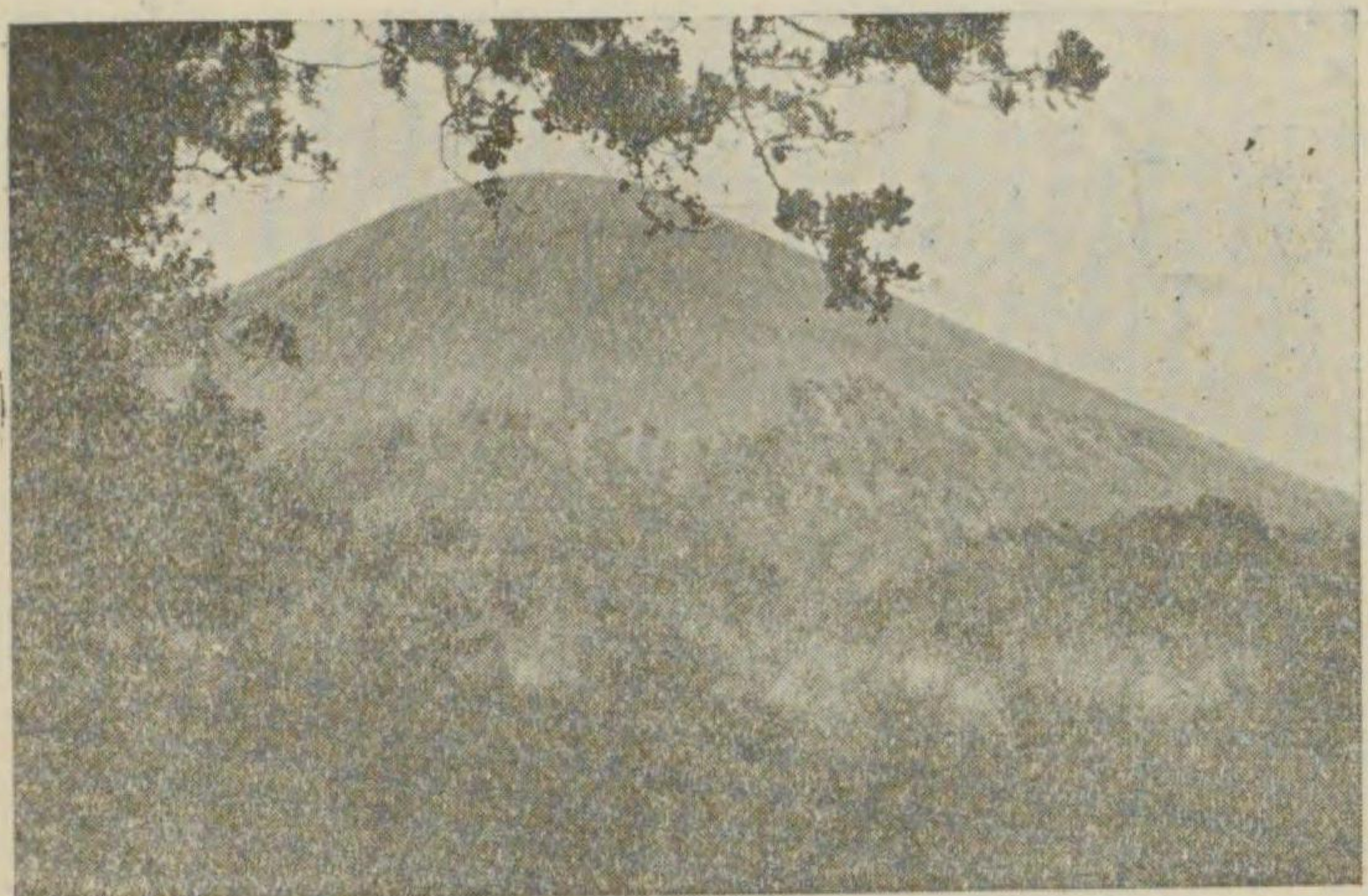
薔薇の花咲く低い垣の中に入る、そこにボン、レパスと標札のある瀟洒な家が、私達の部屋である、入口を上ると、正面に一箇、左右に各一個の客房がある、T氏は左、B氏は右、私は中央の房に行李を卸した、先づ母屋の食堂で朝食をすませ、馬を雇ふてプロモ火山の見物に行くこととする、瓜哇人の馬丁三人は、やがて三頭の乗馬を牽いて來た、一頭は鹿毛、一頭は驪、他の一頭は葦毛であつた、最初私は瓜哇種の小馬であらうと猜した、見ればいづれも大きな馬で、競馬に出たことのあるものだといふ、何の馬が一番馴れておとなしいかと馬丁に訊ねる、馬丁は一齊に、自分の馬が尤も柔和であると答へる、取捨に迷ふた私は、馬相を見て柔和であるらしい葦毛

の馬を選んで騎つた、B氏は驪、T氏は鹿毛、三騎相列んでプロモに向つて駛せた、B氏とT氏

とは、既に馬を馭するの術を習ひ得て頗る自信がある、行くこと幾ばくならずして、私の馬を超乗して、互ひに後先を争ひつゝ鞭を揚げて進んで行つた、殿後に落ちた私は、あせり立つても馬は平氣、長い首を伸ばしながら路傍の草を食んでゐる、綱を馬丁に執らせ、叱々、鞭を加へて後からつゞいた。

路は多く深樹の間を行く、猿が多い、人を見れば白い齒を露はして嘻々と相呼び相磨へつゝ、枝より枝へと飛び移る、林箴のうち、風もないのにざわ／＼と竹樹の戦ぎ靡くを見ると、藍面亂髮のブースポー人が、木の果を盛つた籃を薄墨色の半裸體の背に負ひて、狐顧し又た狼

山クツドバナ雅温

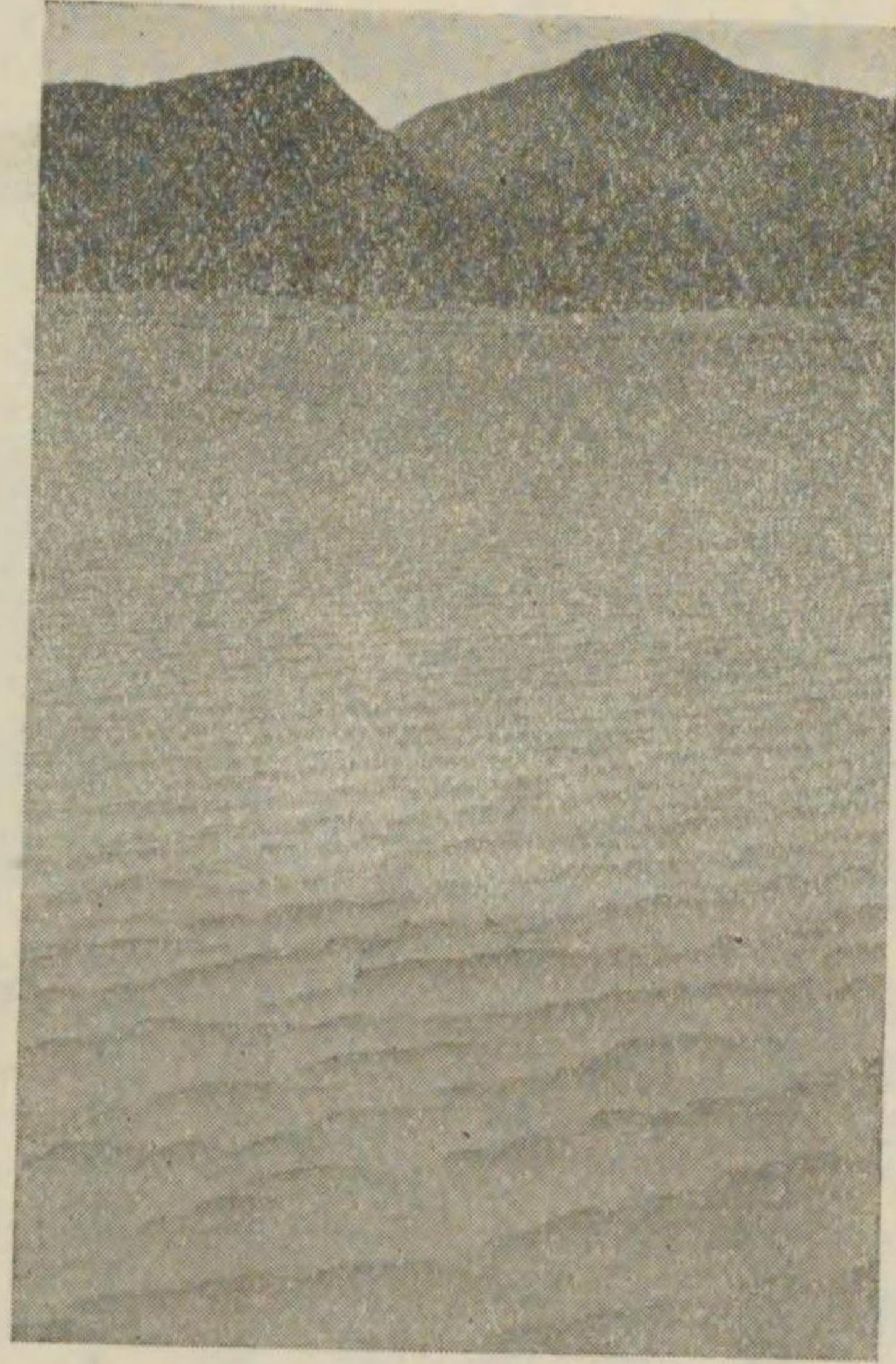


歩いて木の下闇の奥へと遁げ去る、十哩も來たかと思ふ頃、私達は辛くもムーンガル峯の絶壁の

上まで来た。

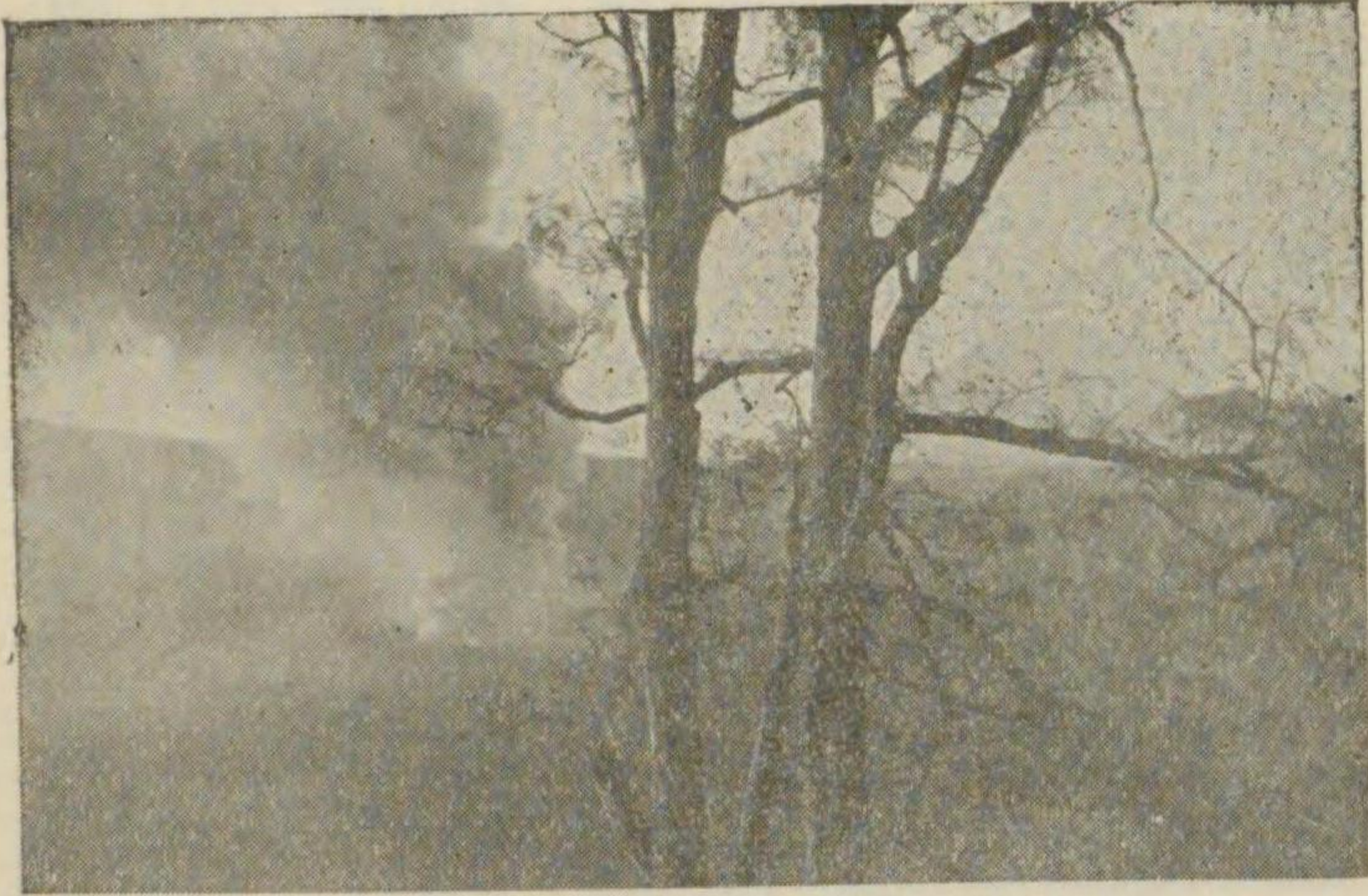
楯鉢を覆せたやうなバトック山は、私達の眉を掠めて、高く兜卒の天を摩して立つてゐる、私達は先づその峯の形ちの秀麗なのに心酔してしまつた、何といふ柔和な温籍な、婉雅な山であ

物 凄 い 砂 海



らう、しかもこの秀麗な山を圍んで、薄墨色に打ち豁けてゐる砂海の、その荒涼寂莫たるながめには、私達は復た心の悸くを覚えるのであつた、長さ六哩、幅は五哩と註せらるゝ砂の海原、そこには木もなく又た草もない、不斷の天風、沙を吹いて千疊の愁をたゞむ沙の波は、その風の姿をその儘に、高低參差の畝を成して、莽々渺々として死のごとく黙しつゝ遙かに天際に向つて走つてゐるのである、聲のなき波、死せる海、何の故かは知らず、私は唯だ愴然として泣の下るを覺えたのである。

ブ ロ モ の 噴 火 山



私達は、この絶壁の上で、午餐の行厨を開いた、馬丁達とは見ると、芭蕉の葉に包んだ人頭大のものを取り出した、糲飯を握り丸めた團飯である、やがて鴨越ともいふべき絶壁の九十九折を、私達は馬を扶けつゝ徐かに降つた、降りるとそこは、靴をも没する死の沙海である。

砂海を越えてプロモ火山の登臨

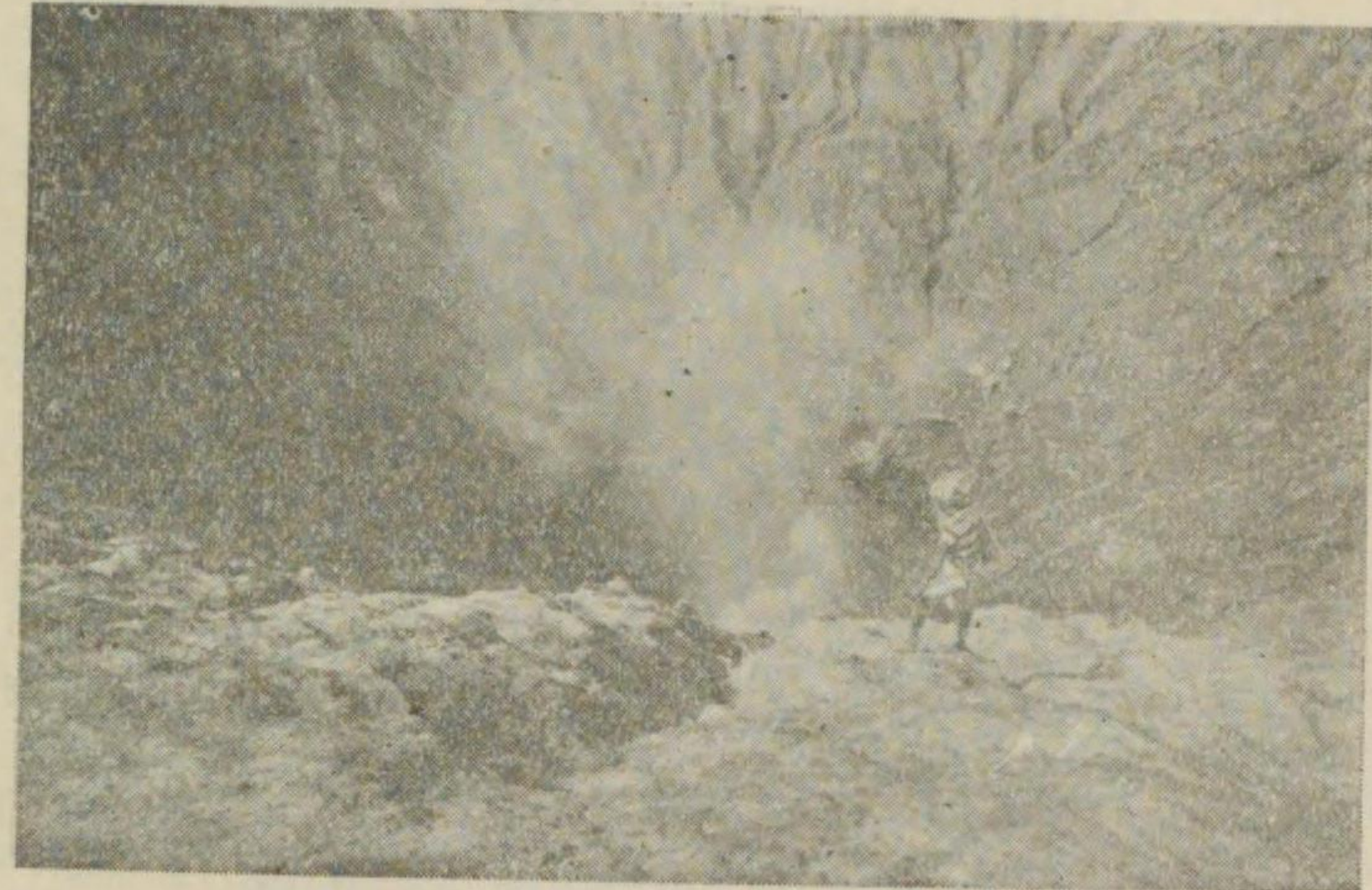
私達は躊躇として馬を沙海のうちに進めた、越し方、行く手、時に沙塵の渦まきつゝ蓬々として起つつを見、旋風である、時には旋風の中を貫き通つて、満身に靈雨を浴びた、次第にバトックの山を右に見て、熔岩の大集塊を攀ぢ登ると、すぐ眼の前に、プロモの噴火山は、大地を揺りつゝ鳴動して、萬斛の烟を高く噴いてゐるのである、熔岩を削つて造られた長い

急傾斜の石磴が、その噴火口ある峯頭へと續いてゐる、磴下に馬を捨て、私達は喘ぎつゝ攀ち

登つた、俯瞰すれば私達の脚下に呀然として奈落の底に打ちつゞく周圍一哩の噴火口は現はれた、硫黄華さく六百尺の深處から、噴き出す烟は中空高く渦まき昇る、硫黄の臭は鼻を衝いて、小時しもそこに佇みがたい。

偶、硫烟の中から走り出でた一箇の怪物が私の傍に近いて來た、身に灰色に汚れたサロンを纏ふた蓬髪の瘦せさらばふた老人であつた、老人は長く青い爪の生へた掌を私にさしつけて、トワン、トワン(檀那)錢を投げて下さいまして噎れた聲で呼びかけたのである、訝り怪しんでその老人を凝視しつゝある私の答へも俟たず、傍のB氏はポケットから一箇の銀貨を取り出して、噴火口の底をめぐりて投げ入れた、老人は、それと見るより、狙公のやうに噴火口の内壁を辿つて駈け下り、

火坑の内錢拾ひ



渦まく烟の下を潜つて、指に銀貨を挟みつゝ、手を抗げて高く號けんだ、世に生業はさまざまあれど、まだ聞き知らぬ危うき生業は、プロモの山人の錢拾ひに勝るものがあらうかと、私は冷たい汗を兩掌に握つた。

やがて風の向きが變つて、噴烟は私達の佇む方へと頽れなびいた、私達は一驂にそれを避けて、石磴を馳け降りた、風に吹き靡いた黒烟は、むく／＼と頭を擡げて、火口を這ひ出で、峯を度り、溶岩塊から音もなくなだれて私達の後を逐ふた、私達は咄嗟に馬に飛び乗つて、鞭を揚げて、沙海をさして却走した。

黄昏の頃、私達はトサリの村に歸つて來た、大霧はやがて雨を催して、いまだ宵ならざるに、咫尺を辨ぜざる山路である、數點の燈火、霧を透して青く滲んで見えた時の私は、村に來たかと胸を撫で下した。

山上の星月夜は、誠に靜かなものであつた、特に主人に吩咐して、私達は部屋で温浴を攝つた後、鐘の鳴るのを聞いて母屋の食堂の卓に就いた、私達の外に、旅客は僅かに五人の髭男のみであつた、こゝにも蓄音器があつて、ジャズの樂音劉亮と鳴りひゞいて旅客の舞踊を促すのであつ

た、手に執る肉叉を投げ出して、知るも知らぬも手を聯ねて跳ね廻る、旅は面白し、異境の旅は殊に面白し。

夜闌けて暖爐の前に椅子を移して相語る、程遠からぬ誰が家ぞ、大鼓、笛、銅鑼などの賑やか



瓜哇の新郎新婦

なる樂音、風に傳ふて聞ゆ、偶ま來り話する邦人寫眞師曰ふ、そは私の家に近き土人の宅にて、けふ新婚の式に乗ねて祖先の祭事を行ふ、その家の主人年十六、

けふ十八の婦を娶る、その婚禮の宴と共に、先人の祭事を修する既に不思議なれど、彼等の習慣は少しもこれを忌まないのである、最初に合巻の式を終り、次に

祭事に移る、壇上には祭らるゝ人の木主を置く、故人の顔に似せた人形である、曾祖父、祖父、及び先人、椰樹の若葉をもて作り成した花や蘭花の香ばしきを、像の頸、胸、臂に懸け飾る、その儀式ありて祭事を終り、やがて酒宴に移つるのであるといふ、鼓鉦の聲、夜を徹して聞ゆ。その夜、私は三枚の毛布に身を裹んで僅かに眠ることを得た、山下は是れ常夏の郷、峯上は是れ恒秋の里、旅客はこのトサリの清涼郷を、印度のダーチリンと並び稱すといふ。

スラバヤの今昔

スラバヤに於ける古い邦人の遺蹟は、既に全く湮滅して、これを討尋するに由もないのを遺憾とする、比較的新しい海市であるので、或は鎖國令前後の遺蹟は無いのであらうと思はれる。市を貫ぬくカリ、マスといふ川がある、亞細亞大陸の河のやうに味噌汁のやうな濁流が渦まき流れてゐるのである、カリは河の義、マスは黄金のことである、黄金の川、黄いろい水の流れを美しく形容したのである、タンジョン、ペーラといふ處がある、タンジョンは崎、ペーラは銀の

義である、白浪銀山の崩れるやうに、岸に觸れて回るさまを言つたものであらう、ジョンバタン、メラと名づけられた街がある、ジョンバタンは橋、メラは赤いといふ言葉である、そこには朱塗の橋が架つてゐたのであらう、チャンテ、イアンといふ處がある、チャンテは美しいといふ義、イアンは物で、美しい物すなはち美人である、私はそこに狭斜の巷のあつたことを想像する。

瓜哇人の皮膚の色は、澁紙に淡墨を塗つたやうである、但しスンダといふ種属だけは膚の色や白く、日本で言へば淺黒いといふ程度である、眼に特色があつて、明眸とは行かないまでも、亦遠來の游子の一顧に値するものがある、さればスンダ種の女人には賣笑婦や俳優などが多いやうである、スンダは、須陀、冉陀羅、印度の四階級の一番下の須陀なる賤民の後裔であらうと思ふ。

スラバヤの街のうちに、クンバン、ジツボンといふのがある、ジツボンは日本である、繁華な町で、大きな商賈が櫛比してゐるが、私は曾て其處に長崎、五島あたりの娘子軍が、遠征して根據を構へた處ではないか不知と想像する、しかし現今では、このスラバヤの海市といはず、瓜哇一帯、賣笑婦らしい本邦女人の隻影をも認むることのないことは、私の最も愉快とするところである。

一日、私は三井銀行支店のS氏と散策して動物園を觀た、虎、豹、大蛇、鱔の屬をはじめ、極樂鳥や古錦鳥などが皆野生の状態に組立てられた檻や柵のうちに優游自適してゐた、私はその動物園で不思議な動物を始めて見た、一つは野豚の一種のバビラッサと稱し、大きな牙と角とを有するものであつた、角あるものは牙をもたず、牙あるものは角をもたずと幼年の頃から教へられてゐた私は、その原則を破られたのであつた、今一つは黒毛の野羊の、その角が螺旋のやうに渦巻いてゐて、しかもその耳が殆ど大地に曳するやうに長いのを奇らしく看めたのであつた。

路の並木と村の市場

瓜哇を旅行して、第一游子の心目を快よくするものは並木の整美なることである、凡そ名邑大市に論なく、町より町へ、村より村へ、その間に申通する大道の左右には長け高き並木の列をなして、清陰を地に敷いてゐる、露根を絡り纏ふその幹の太き二抱若くは三抱もある榕樹はいふも更なり、翠なす葉隠れに、鮮朱、火の燃ゆるがごとき花の亂れ咲く合歡の大木、この外、葉の密

にして陰多い名も知らぬ大木の並木路の、何れもアスファルトにて舗装してあることは、自動車
でドライブする旅客の快心はいかばかりであらう、もしその道路が破損でもしてゐると、逸早く
入夫が集まつて、鶴嘴でつきならし、アスファルトを流して、補修して仕舞ふのである、道路の
補修は、町若くは村の負擔となつてゐるのであるといふ、丁度我徳川時代の制度に似てゐる、和
蘭は徳川時代には唯一の通商國で、八重洲河岸の名に残る彼のヤンヨースなどは、厚く幕府に用
ひられて居た、吾街道の松並木、榎の一里塚、道路に關する制度などは、正しく蘭人の獻策に由
つて生れたものであらうと私は竊に思ふ。

樹木が極めて豊多であるに拘らず、樹木を愛護することは、やがてその豊多なる原因であらう
と思はれる、淋しき田舎道にても、道路に一尺若くは二尺ぐらゐの樹木を植ゑつけてあるのを見
るに、蛇籠のやうな籠を掩ふか、さもなくば鐵線にて籠のやうに作りなしたものをもて之を掩ふ
て牛馬の損傷するに備へてゐる、我國などの、道傍の花木を栽ゑるに、一本の嫺竹を添ゆるに過
ぎず、水さへ碌々與へざるとは誠に雲泥の相違である、都會などでは、大道左右の並木の枝に、
横に鐵線を張り、インシュレートを取りつけて電話線を架設し、街燈も亦木の枝に吊りさげたの

を多く見る、活用といふ熟字の意義を、私は瓜哇の並木を見て悟り得た、凡そ瓜哇の通邑大市に
は電信電話の柱も見えず、亦街燈の柱も見受けない、我國のやうに、歩道に跨る大小參差の無數
の電柱の狼籍するに較べ見て、誠に雅潔に、まことに清楚である。

町といはず、村といはず、そこには必ず一個の市場があつて、一切の日用雜貨や食品を賣つて
ゐることも、旅行者の目を惹くものである、市場は大抵、朝の六時に開いて八時に閉づるを例と
する、賣る人は總て婦人、買ひに来る人もまた總て婦人のみで、一個の鬚眉男子を見うけない、
正しく女護の島である、人の出盛の七時頃には、言葉多きは何處の國も同じ女人群、いふばかり
もない喧騒さである。

黎明と黄昏の情趣がない

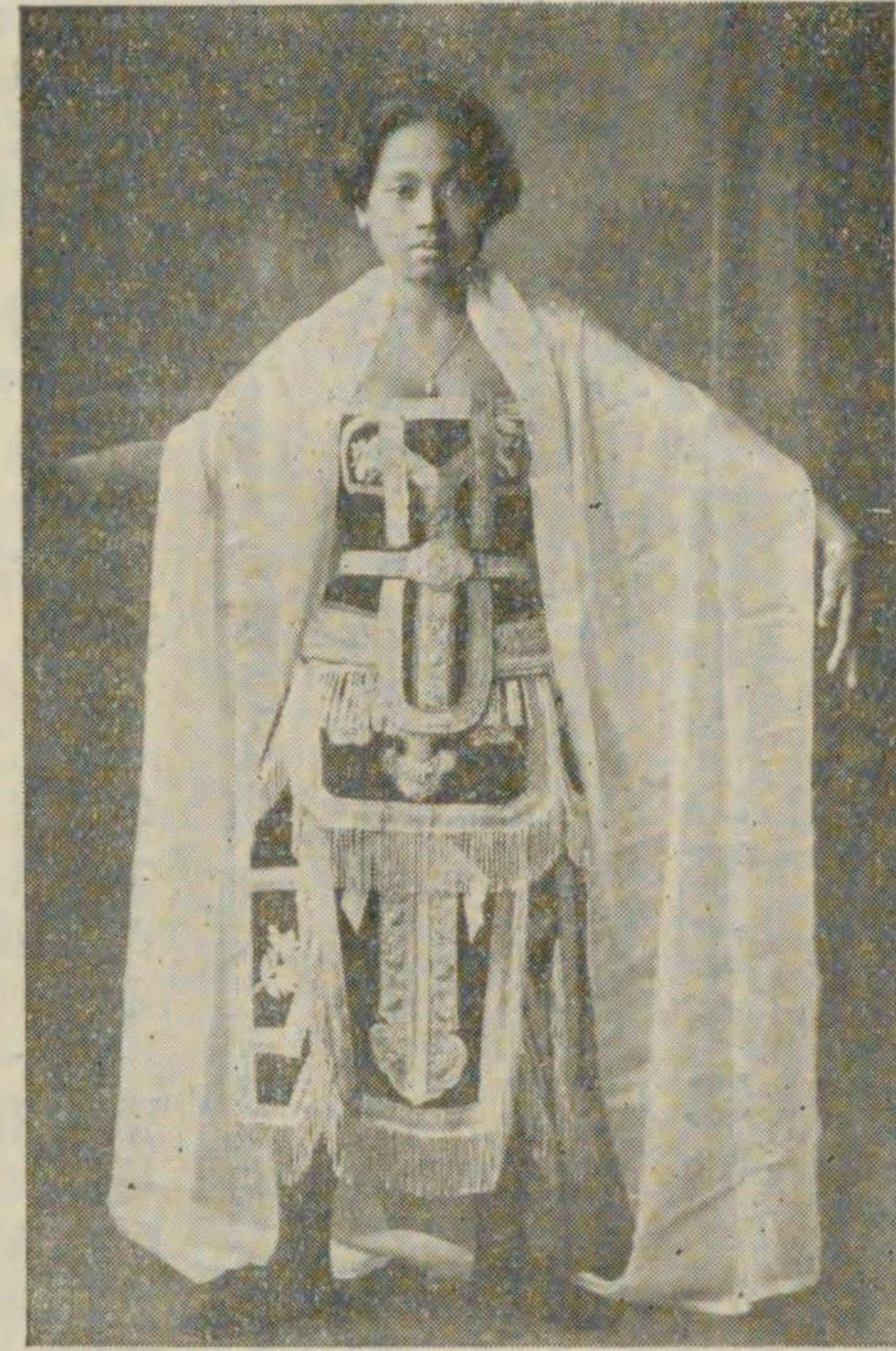
瓜哇にありては、黎明の情趣を味ひ、黄昏の風懷に耽るといふことは、望み能はざる國であ
る、そは四時を通じて晝と夜とが、殆ど平分してゐるからである。朝の六時になると、切つて放
したやうに夜が明ける、晩の六時になると、慌たゞしく日が暮る、曉風殘月、まだ明けやらぬ風

露の庭の井の華を汲んで、一碗の芳茗に日の出づるを待つその情趣、暮残る山紫に水白く、鴉背の夕陽、天外の歸雲、やがて彼は誰時の涼を趁ふての漫る歩き、斯うした風情は藥にしたくもな

いのである。

ホテルの晚餐は八時半の定めである、私達遠來の遊子には、夕方から八時半までの時を空しく度るに堪へない、私は何時も夕方になると、ジョンゴス(ボーイ)に吩咐して一臺のサド(一人乗りの馬車)を雇はしめて、街の中を緩行することに極めてゐた、丁度六時少し前、サドは旅

現代的歌劇女優



館の玄關に候する、或日、私は例の通り馬車を喚ばせた、玄關に出て乗らうとする時、私は私の部屋にステッキをわすれたことに気がついた、部屋へ歸つてステッキを携へて來て見ると、今まで明るかつた日は暮れて、夜の帳は早や慌たしく卸されてゐた、瓜哇は恚うした國柄である。

名邑大市、隨處に洋式のホテルがある、いづれも和蘭人の經營で、瓜哇人を使役してゐる、私の泊つたホテルのうちで、バンドンのグラント、ホテルと、銷暑地トサリのホテル、サナトリウムとが、最も私を喜ばせた、グラント、ホテルは邦人の定宿ともいふべき廣く美しい旅館である、一體に瓜哇の旅館では温浴を攝ることが不可能である、都ての旅館、皆冷水浴である、大きな瓶に水を湛へてあつて、旅客自ら小さいバケツでその水を浴びるのである、ところがこのグラント、ホテルでは、邦人の習性を知つてゐるので、特に温浴を供してくれる、トサリのホテル、サナトリウムでも、亦私達の爲めに温浴を進めたのであつた、トサリのホテルをはじめ、ガロー、ジョクジャ、ソローなどの遊覽客を迎ふる名所舊蹟のある都會の旅館は、何れもその構造がバビリオン式になつてゐる、すなはち多くの離れ座敷をもつてゐる、清雅な寢室と温室とをもつ瀟洒な小亭が母屋を圍んで廣い庭園のうちに散在してゐる、四つ目垣などを繞らして、そこに花木を栽ゑ、人は他客に累らはさるゝことなく、吾が家の書齋にゐるやうな暢然した心地になる、鐘が鳴る、食堂の開けたとの報知である、小亭の人々は、髪を櫛づり手を洗ひ、衣裳を整へて母屋をさして行くのである。

瓜哇海から南支那海へ

湖水より穏かな瓜哇の海

船の太肚に、井理紋の大三字が、隸書で横に書現された六千餘噸のチェリボン丸は、スラバヤ埠頭に繫留されてある、私は南洋郵船の支店長で、元外國語學校の教授であつたUさんの自動車に迎へられて、船長のY君と共に、支那料理の午餐をうけた、けふはいよ／＼瓜哇半月の遊びを終つて、同じ蘭領のセレベスと、ボルネオとに向つて旅立つ日である。

スラバヤの港口には、延長十三哩に亘る壯大な防波堤がある、印度洋の激浪を防ぐために、和蘭政府の手で築造したものである、私は岸壁から汽艇に上つて、やがてチェリボン丸の人となつた、私はソローの王宮直屬俳優の演技を觀て、殊にその優雅にして雍容なる唱歌に心酔し、その歌聲を移し入れた蓄音機のレコードがあるならば、携へ歸つて母國の友達に聽かせてやりたいと思つてゐた、私の爲めに瓜哇東道の主人となつてくれたB氏は、私がチェリボン丸に乗り移つた

後、幾ばくもなく輕舸を飛ばして來り訪れ、普く市中を物色して購ひ獲たレコード數枚を餞別として贈られた、私はその厚意に感激した。

けふは涼しい日であつた、しかし船の寒温計は八十八度に上つてゐた、母國の船では何の遠慮もいらぬ、髻を剃つたり、髪を櫛けつたり、衣裳を整へたりして食堂へ出る煩瑣の禮儀もないのである、私は船房に入るや否や、窮窟な洋服をかなぐり捨て、寛濶な日本服に着換えた、一等室には數人の客はあるが、いづれも皆な母國の人、三等客は百餘人、これは馬來人と支那人が多い、船長のY氏は、瘦ぎすの背の高い、海員には珍しい温厚の君子であつた、忙しい職務の際に、多くの小禽を自ら飼つてゐる、古錦鳥や、紅雀、十姉妹などの綺麗な小禽が、幾箇の籠の中で好音を弄してゐる、籐椅子をその籠の傍へひき寄せて、悠揚と腰をかけながら、唐本の桃花扇傳奇や金瓶梅を繙いてゐる船長は、全く詩人の風貌である、私も無聊の餘り、船長からくさぐさの書籍を借り、船長と椅子をならべてそれを讀んだ、倦み來れば雑談する、今までは路で逢ふ人、旅館で會ふ人、その多くは瓜哇人、支那人、蘭人、及びその他の外國人で、母國の言葉を操ることが稀であつたが、チェリボン船中の人となつてからは、堰を切つて落したやうに、母國の

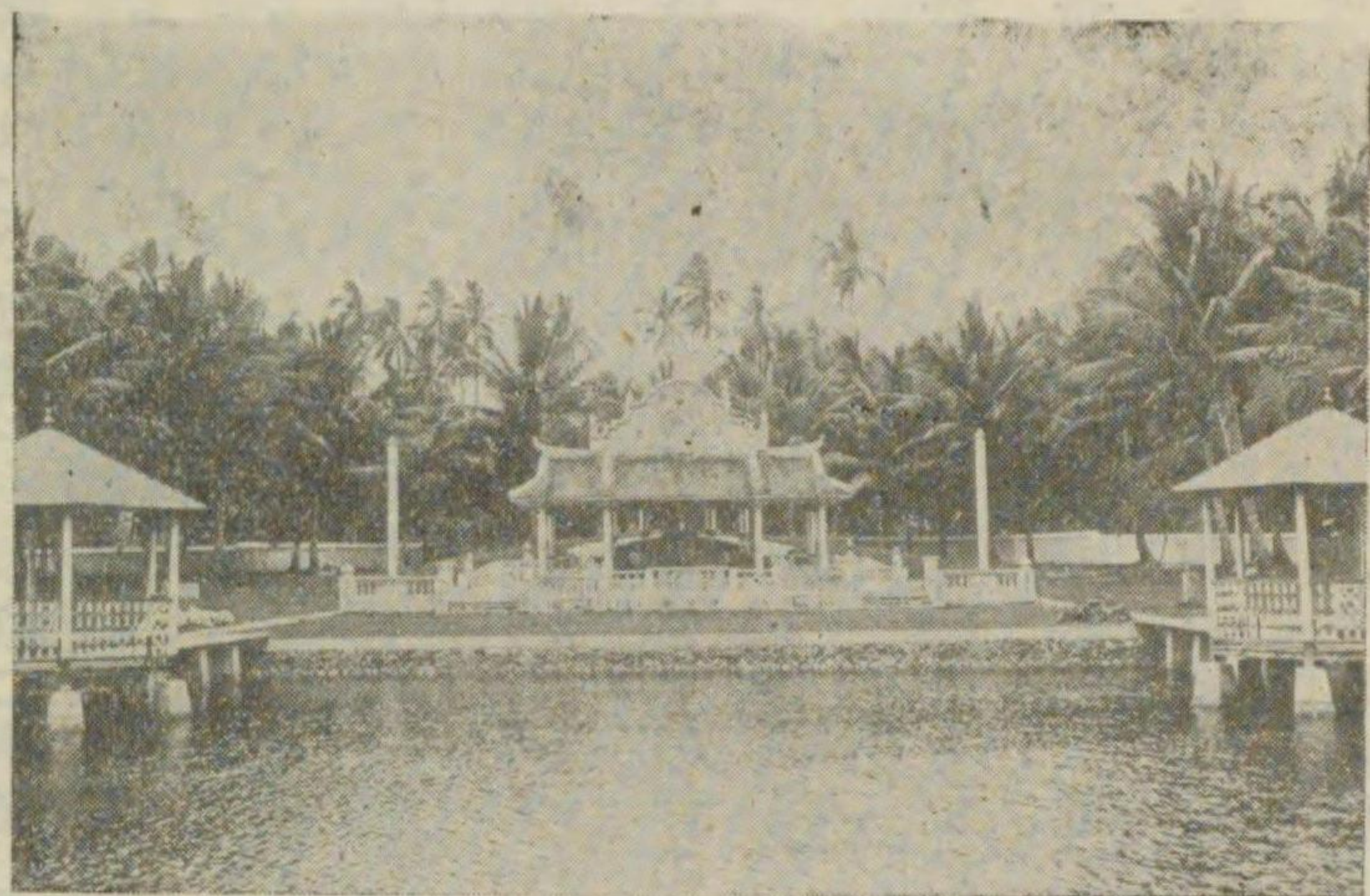
言葉は私の物を衝いて流れ出した。

私はY船長から、瓜哇の昔話やセレベスやボルネオの土人の風俗習慣を聞いた。

マカツサルの日

私の船は燕賦を醸したやうな夕陽の港を出てセレベスに向つた。一としきりの白雨、恒河沙の銀線が、夕日の外にふりそゞと思ふ間に霽れて、大きな虹が東の空に現はれた、私は生來未だ會つてこんな大きな美しい虹を見たことはない、七彩絢爛たる虹の掛橋は、スラバヤからバリ島の島かけて、大きく海に飲んでゐる、岸樹や雲物は、その虹の間から透き通つて、さながら蜃氣の樓のやうに看められた、富士の山に似たアルジヤノ高峰は、日の暮れるまで、牽を拖いて私の船を見

マカツサル海岸の涼亭



送つてくれた。

やがて日は六時になつてとつぷりと暮れて了つた、今宵は七日の月である、月朧の瓜哇の海、船の行くに随つて、各處の燈臺の隠見燈は閃白しつゝ、私の船の前路を照す、瓜哇近海の航路標識の、整備してゐるのに感服した、漫天の星宿、中にも南天遙かに懸つてゐる南方十字星は、殊に鮮かに仰ぎ瞻られた。

翌る日は、終日、山を見ず又船にも逢はず、漂渺たる大海を走つて行つた、夜は蒸し暑い、寒暑鍼は九十二度の上つてゐた、翌る日も亦終日船に逢はない、夜の十一時私の船はセレベス島のマカツサル港外まで来て、こゝに假泊した。

翌日の朝七時、船はマカツサルに入り、棧橋に横着けにされた、私は事務長M氏と、埠頭から馬車を賃して、市中と郊外とにドライブした、土人のサロン姿、その更紗の模様は、之を瓜哇に較べ見て頗る華麗になつたのが眼を惹いた。

市中は廣くはない、戸数は二千戸、人口なら一萬ぐらゐ、市街の幹道は洋式と支那式とを取り交ぜた二階屋で、こゝも支那人が幅を利かせてゐた、外に印度人の店がある、邦人の舗もある、

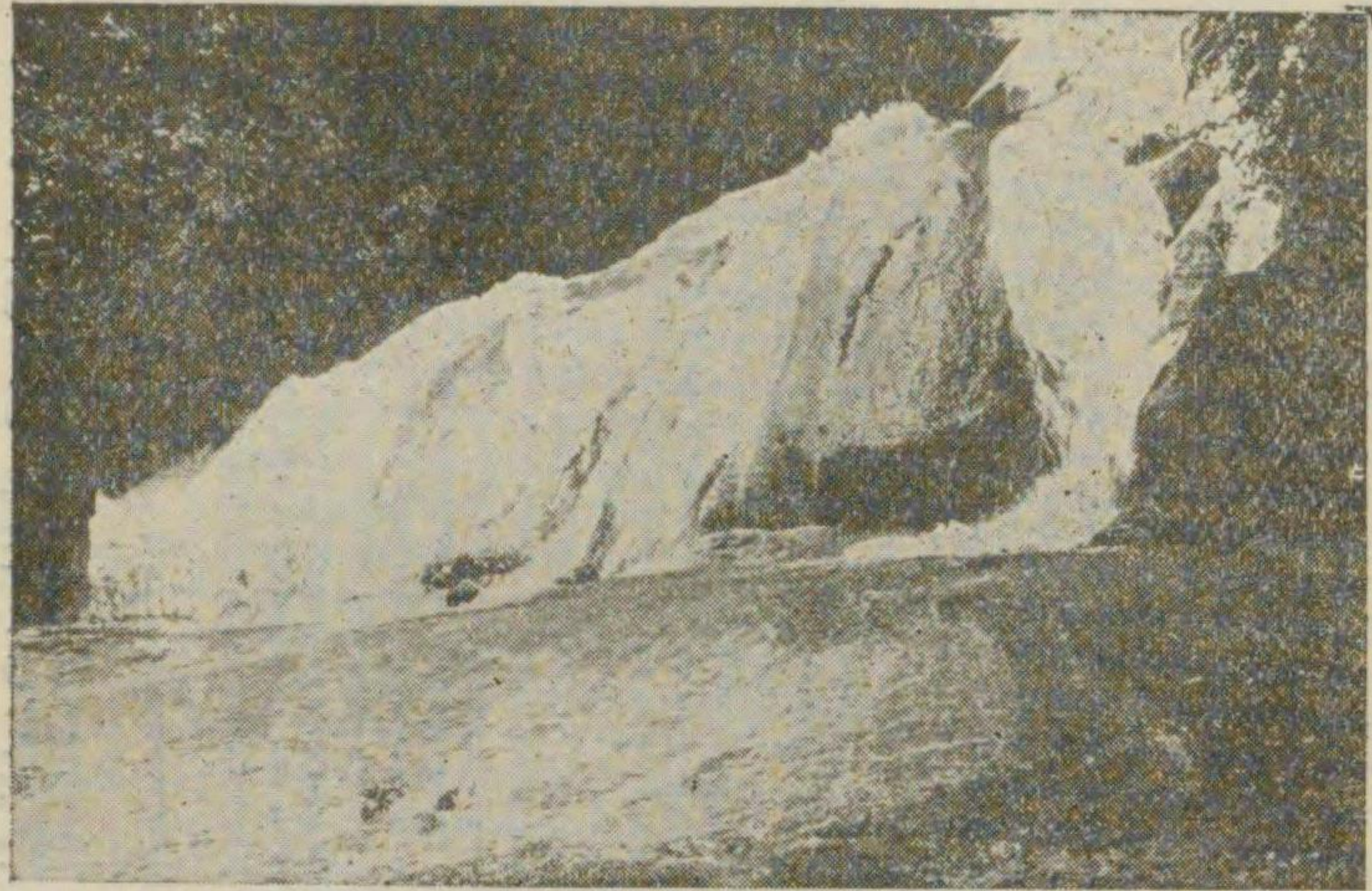
私は邦人理髪店に入つて長くなつた髪を剪らせ、更に邦人の雜貨店に入つて、土人の製作した丁子の實の船の置物を購ひ得た、數百千個の其の實を集めて竹の串に貫ぬき止め、一個の船に造り上げた玩具である、水を濺ぐと芳香四邊に薫じ、まことに風雅なものである、丁子船は、この地の名物で、遠來の游子のこの地を過ぐるもので、購ひ去らざる人はないといふ。

市内の廣場に、バツサル、マラムといふのがあつた、譯して夜の市といふ、興行場と雜貨店と、雜然として相隣つて開かれた處である、夜の繁華は想はれるが、晝だから極めて淋しく、多くの土人等は、支那人の賭博場に集まつて、錢を賭けて樗蒲の娛みに耽つてゐた。

椰樹、玳瑁の清蔭を敷く海岸の、波打際に突き出して瀟洒な涼亭が建てられてある、支那人やセレベス土民の、閑人らしい太公望が、長い竿に綸をつけて、悠然として釣を垂れてゐた、涼亭の欄干から、去來の潮に吊り下げた魚籠のうちには、釣り得た魚が潑刺として跳つてゐる、今しもその一人が竿も撓わに釣り上げた一尾の魚が、釣を離れて私の脚下に轉び落ちた、魚は本邦の丸鯨であつた。

涼亭の露床に腰うちかけて見渡すと、幾個の青螺が環のごとく港外を取り圍んでゐる、さなが

マカッサルの十哩のゴアの湍



ら砲臺のやうに、上には翠色滴るばかりの椰樹のしげみがある、その青螺を指點してみると、都て十個であつた、皆珊瑚礁である、この露出した珊瑚礁以外に、潮一重の下にも無数の珊瑚礁がある、それを避けながら、船を操縦しつゝ入港する船長は、十分の技術と經驗を要する、我チエリボン丸が昨夜港外に假泊して、朝になつて入港した理由も解る。

このマカッサルの近海で、一萬米突以上の深い深い海溝が発見されたといふことを、私は或新聞紙で讀んだ、珊瑚礁の多いこの邊は、魚群の一大巢窟である、鰹も鮪も不斷に漁れる、漁夫の都ては我沖繩縣の人であるといはれてゐる、綿津見の國の人は、先天的に海に慣れてゐる、八重の潮も琉球の人には坦途である。

白雨がやつて來た、事務長さんと私は、慌たゞしくチエリボン丸へ遁げ込んだ、雨は仲々歇ま

ないで、船の荷役が出来ない、偶、デッキパツセンジャーの携へ来たつた鶏の一羽が籠を脱けて飛び出した、支那人や馬來人の三等客は、擧つて之を追ひ掛けて捉へやうとする、憐れむべし鶏は、舷から海へ飛び入つた、渦まく急潮はこれを呑む。

斯うした騒ぎのうちに船は荷役を終へて、四時半に漸く出帆、マカツサルはゴアの首府である、こゝを去ること十餘哩にしてゴアの舊市がある、土人は蘭領にあつて殊に慄悍なるものと稱せられる、一昨年十一月瓜哇に共産黨事件のあつた時、之と策應して電燈局を襲撃し、全市を暗黒となして事を擧げんとした、幸ひにして密告者のあつた爲に、僅に事なきを得たといふ、マカツサル人は、常に我はマカツサル人なりと豪語してゐる、和蘭官憲の兵器を取締ることの嚴重なるに拘らず、サロン(腰巻)の下に利刃を隠し持ち、動もすれば人を殺傷する、戀愛關係に就いて執念殊に深いといふことである。

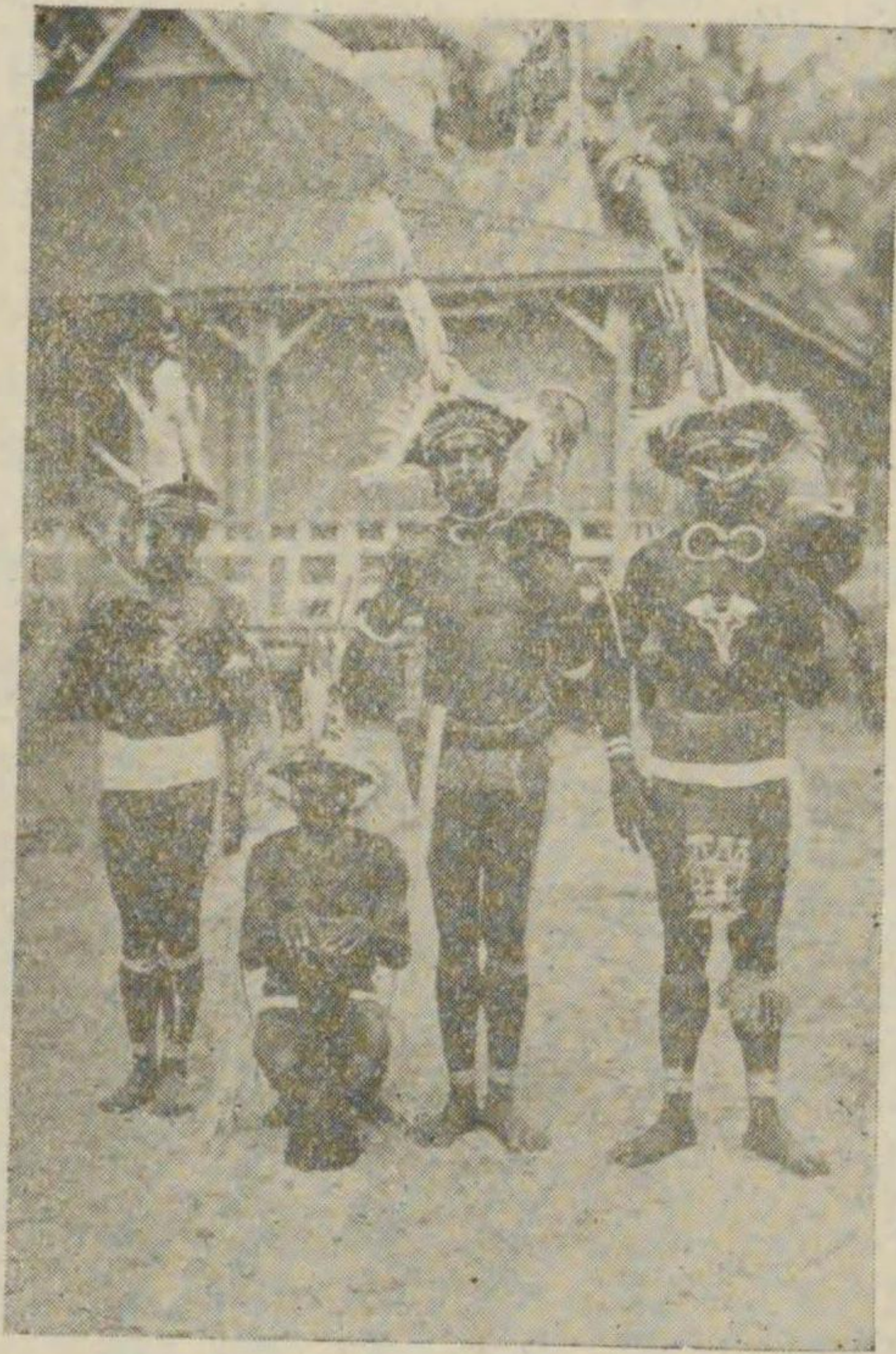
セレベスの北、トミニ灣にゴロンタロウ港がある、何の世にか邦人船頭五郎太郎といふものゝ拓いた港であるといふ、メナド港、これも邦語のミナトである、一帯の土人の風貌は、本邦人に酷似してゐる、殊に婦人の後姿などは、正しく日本人である。

石油の港バリクババン

私達の船は、セレベス島に沿ふて北へ北へと航走した、こゝは雨期と乾期の界目で、忽ちにして雨、忽ちにして晴、暑さも八十度から八十八度位の差があつて、天氣が少しも定まらない。

翌る日は夜明けから豪雨が降つた、船は大海の眞唯中を走つて行く、船を繞る波頭が、刹那に鮮紫の色に變つたと見る間も遅し、霹靂一聲、耳を掩ふに暇なく、八重の潮路の底も揺ぐかと訝かるば

奥地に住むプロツケ人



かりの大雷鳴、南洋旅次に出逢つた雷雨のうちで、こんな物凄い雷雨に會つたことはない、四面を顧みれば荒莽と打煙り、山もなく、船も見えず、心細さは一人であつた。

マカツサルを出てから三日目の朝、私達の船は、ボルネオ島のバリクパパンの川口につき、川を遡つて、バリクパパン市の沖に碇泊した、この朝も雨であつた、甲板から見渡すと、埠頭に並び立つ石油の大タンク、その數二十餘を算するを見る、こゝはボルネオのうち、石油田の所在地として有名なる港である、バリクパパンの石油田は今より二十餘年前に開發され、アムステルダムに本社を置き、社長と重役は蘭人、資金は英人、油田の面積は六百万方哩、一日の湧出量は、六千ガロン、海岸には數ヶ所の棧橋あつて、六千噸以上の汽船が横づけにされ、湧出地から鐵管でタンクに引いた石油の荷役をしてゐる、又大規模の精油場と木挽工場もある、奥地には山林多く、木材極めて豊富、その重なるアイオン、ウードには、枝下五十尺以上の巨材があるといふことである。

私達は汽艇に乗つて上陸し、石油臭き市街を度つて税關の山に登つた、山には落葉松が群れ立つて、風趣を添へてゐる、その海山の眺望は我が肥前唐津の濱を行くやうだ、自動車を驅つて邦人の雜貨店を訪ひ、烟茶少憩して埠頭に回る、そこに市場があつた、魚には干物、干鰯、大きな鱈、蝦、蟹、果はバナナ、パイナップル、肉、蔬菜、日用の雜具や、サロン、襪衣、店ともいはず大地ともいはず雜陳され、其間を魚貫しつゝ、群客は往來する、私はそこに齡四十を踰えたとい見える一女人の、華美なサロンを穿き、紅いスレンダーを掛け、足に銀の刺繡あるスリッパを履み、左右の十指、指毎に指環、手首に金環、そして頸から胸にかけて、和蘭の十盾金貨の數十個を、金の鎖に串いて懸け、手に籠を提げたのが、誇らかに悠揚と左盼右顧して、この群客の間を行くのを見た、定めて富める土人の細君であらう、この土地の婦人連は、全財産を身につけて、人に誇るが風習で、一たびその巷閭の家に戻れば、家は唯だ四壁の立つあるのみであるといふ。

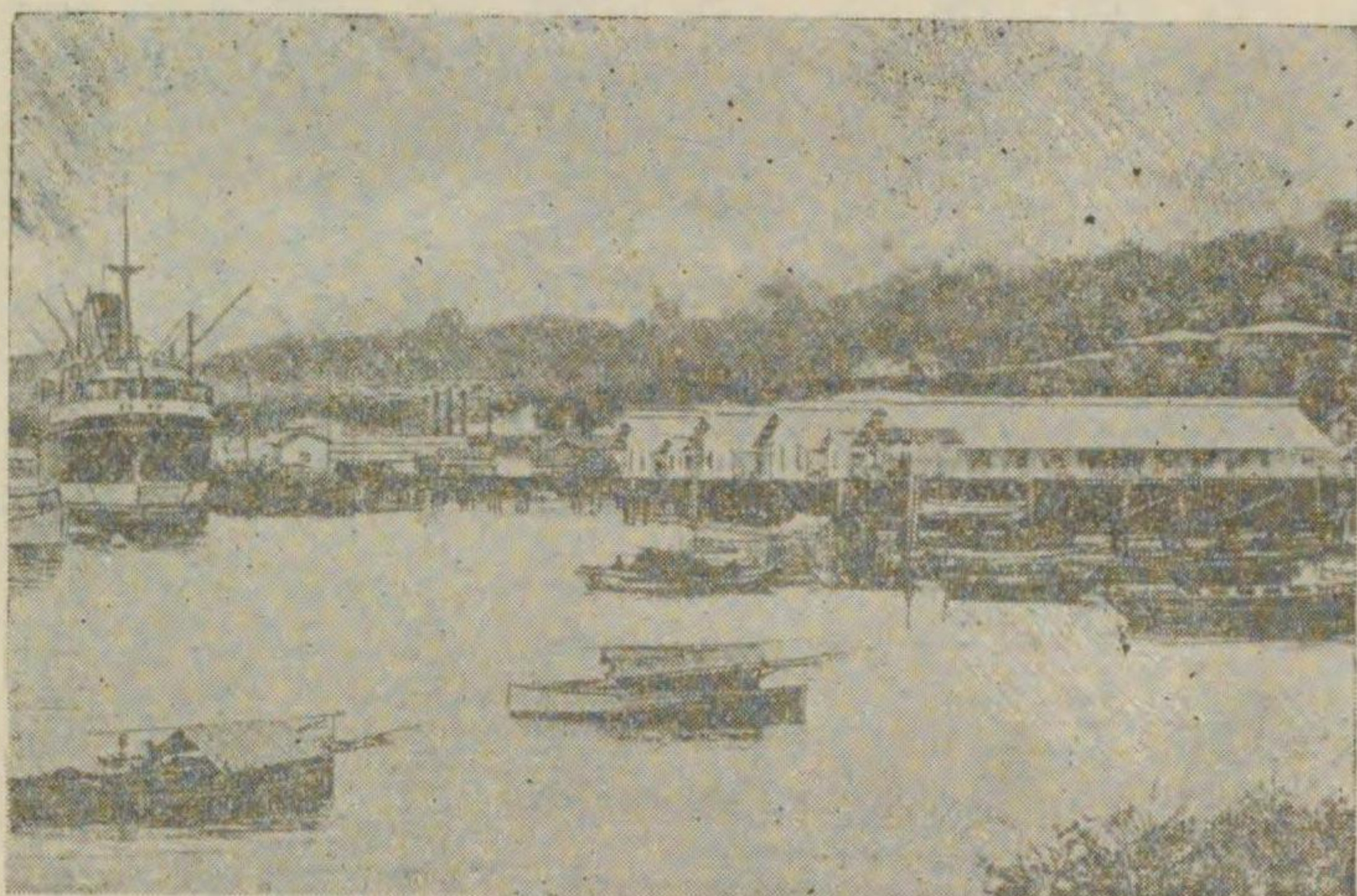
元主忽必烈の雄圖

私達の船は潮に五色の彩をたゞむ石油の膏の港を離れてから、再び針路を南にとつて、やがて西に折れ、ボルネオの西海岸に傍ふて、直路瓜哇の海を北へくと指して駛つた。

翌る日も、又その翌る日も、海は極めて穩かであつた、セレベスの島影を見てから後は、陸地を見ない、三日目の正午、我船は、南緯二度三十三分、東經一〇九度十七分の處にあつて、バリクパパンを距ること六四九ノット五、目ざす交趾支那の柴棍を距ること、八五〇ノット五であつ

た。

(一其)ンマバクリバ港の油石



此夕、月色朗明、カリマタ島を望んで、船はカリマタ水道を通過した、夕陽の海の彼方に、岩樹陰凄なる絶壁に囲まれて、母の懐とばかり和やかに安らげき一個の小さき港がある、この島を望み見て、私はそぞろに元主忽必烈の雄圖を憶ふ。

弘安の昔、我國に來り寇して、西海に溺没し、生きて還るもの僅に三人と稱された元軍は、それと相前後して瓜哇遠征の舟師を起した、水師提督は亦黒迷失、大將軍は史弼、副將軍は高興、先づ船を海南島に艤し、南下してこのカリマタ島を占據し、再び軍容を整へてピリトン及びカリモンを歴て、瓜哇に達し、スラバヤ河口を遡つて首府ダハ(ケヂリ)を掩撃したのであつた、一旦は首府を占領したが、瘴癘の氣に中つて兵士の

死するもの算なく、やがてケヂリの水師の襲撃をうけて、これも亦我西海の覆轍を履んで散々に大敗し、提督大將、生命からく、殘兵を収めて遁げて本國に還つたのであつた、私の船の三等客のうちに、カリマタ出身の男があつた、その男の説によると、島中の一部落は、元軍の敗兵の取り残されたものゝ子孫であるといふ。

翌日の朝七時三十五分十五秒、私の船は赤道を通過した、赤道を過ぐる時、消魂しい汽笛が鳴り響いた、浴室で水浴を試みてゐた私は、船に何か異變が出來したのではないかと驚いて浴室を飛び出したが、船員から赤道通過を祝する意味の汽笛と聞いて竊笑を禁じ得なかつた、此日の正午の私の船の位置は、北緯零度三六分三〇秒、東經一〇八度五分三〇秒、パルクババンを距る八五六哩、柴棍を距る六三四、五哩の處であつた。

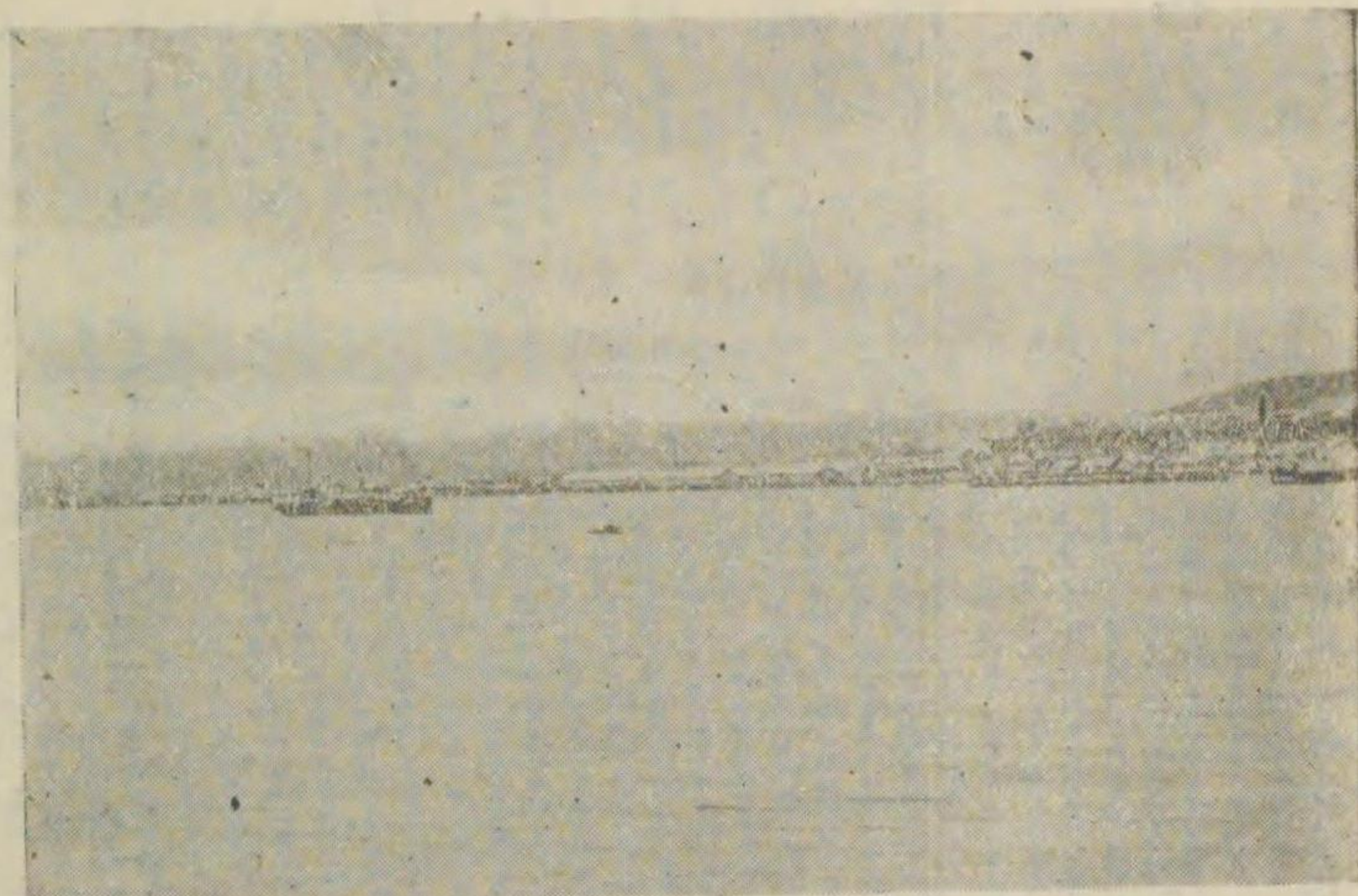
翌る日は朝から雨、正午にナツナ島の島影がほのかに見えたが、やがて又縹渺たる大海の眞つ唯だ中を行くのである、私は早や既に海に飽き果てた、時に大魚の波間に跳るのが見える、鱈であらう、いや鮫であらうなど、無聊に堪へない船客達は、眼の前に起る埒もない一小事相を把つて、話柄となし、天下の椿事でもあるやうに語り合ふ。

盡日事なく唯だ雲を看る

熱帯の海、何といふ平和な海であらう、私の船を繞つて、碧玉の一大圓盤の開展するのみである、膏を湛へた静かな海は、そこに寸波の起つのも見えない、船の舳を迎へて立つ白浪も、やがて寂寞として消え去れば、船の艦より曳く波の、碧玉盤を金剛石で截るやうに、虹とも見らるゝ一條の白線を長く／＼印し留むるのみである、もし小石を捨てて海面に抛うてば、圓波の緩く擴がり行くを見るであらうと思はれるほど、實に熱帯の海は穩かである。

山も見えず、又船にも逢はない、私は榻邊の讀書に飽きはてゝ、盡日、嗒然として雲物の變化を看てゐた。

(二 其)



朝と夕、眼の力の極むるあたりの水平線の、水天彷彿の際に當つて、澄徹する雰圍氣が一線を割して立ち現れる、水蒸氣である、白衣、蒼狗、さまざまの形せる浮游の雲は、この水蒸氣をこぼして透いて見える、さながら水族館の竇道から、玻璃槽をこぼして看る游魚のやうに。

日午の空に見る豪宕にして瑰奇なる雲の峰、殊に落日の空に見る雲の變化の幻怪なるは、欄干に靠るゝ私をして、我を忘れて耽看せしめる、白衣大士が蒼龍に騎がりて、恒河沙の眷屬を率ゐて來り降ると看ゆることもあり、或る時は又、比馬拉耶、アルプス、富士、娥眉山、落機の峰、世界に名ある高山を移し成したる群峰の、一面雪に埋め盡して、尖白天を抽いて立つ莊嚴無比の觀をなすのを看たこともある。

マカツサルから、私達の船に乗つた一和蘭人があつた、同地の州長、本邦の縣知事である、私はこの人と日夕相語つて頗る無聊を慰め得た、齡を問へば四十二といふ、頭は全く禿て、僅に後顛に白髪を止むるのみであつた、少しく日本語を話し、些しく英語を解してゐた、禿頭氏は曰ふ、私の妻は貴國の産、曩に私に先んじて熊本縣に歸省した、私も夏の賜暇を得て、妻の實家を訪れんとて行くのであると。

翌日の正午には私達の船は、北緯八度三十秒、東經一〇七度六分、バリクババンを距る一三二哩、柴棍を距る一七七哩の處にあつた、暑熱やゝ昂り、八十六度に至る、夜に入つて大雨。午夜を過ぎて二時、我チエリボン丸は眉公の河口に入つた、バリクババンの港を出てから日は八日、夜は七夜であつた、マングローブ叢り生ふる支流を遡ること六十哩、午前七時、我船は柴棍に着し、河の中流に錨を投げた。

東洋の小巴里

朝飯をすませてから、端艇を呼んで岸に上つた、折から來かゝるバスを喚び留めて、柴棍さして走らせた。

佛蘭西人はこの柴棍を小巴里と呼び倣してゐる、洒掃された車道の兩側には、合歡、アカシヤ、タマリンドやらの街路樹が、熱帯の日に榮えて蒼翠滴るやうな濃い影を敷いてゐる、佛蘭西風の商店には飾り立てたショーウインド曠やかに、往來の人の歩を留め、桃色と白の段々の暖簾の庇を張り出したカフェーには、路もせに街上椅子を置き並らべて、朝ながら早や漫歩の客を迎へて

ゐる、桃紅に、淺碧に、又た橙黄に、色とりどりに塗られた家毎の壁の色は、この賑やかな街に、和やかな色彩の調和を見せてゐる。

私は詩囊をホテルの一室に卸してから、力車を驅つて三井物産や正金銀行の支店を訪れた、物産のM氏、正金のE氏は、懇にこの遠來の游子を遇した、カシネ街の劇場、天主教の大伽藍、中央郵便局、タベール街の廣場に立つピニユー、ド、ベエース僧正の銅像、ノロドム街の芝生に立つガンベッタの銅像や、美しい圓蓋を頂く交趾支那の總督官邸、さては町の東端にある植物園、動物園、私はその游目に一日を費した。

米の國、木の國、虎の國、孔雀の國、私の多年、酒前、茶後に神を馳するは東埔寨國の北方、グラン、ラック(太湖)の畔にあるアンコール、ワットの大伽藍、昔の人が天竺の祇園精舎と呼び做す大佛塔である、アンコール、ワットは、柴棍を距ると實に五百六十基米、邦里正に一百四十里の處にあるが、自動車を驅れば僅に九時間にして達するのであつた、私は佛語を解しない、安南語も知らない、東埔寨語は勿論の事である、私はそれらの國語を善くする東道者を物色した、しかしながら、三井の人も、正金の人も、その他の在留邦人も、いづれもその業務に忙しい人のみ

で、汗漫の遊びを共にしてくれる人がない、私が數千里の海を渡つて、瘴氣と溽暑を冒して、この僻遠の地に來たその志を壯として、私の爲めに東道した柴棍在留廿年に亘れるS氏なる任俠の紳士微りせば、私は無限の憧憬と無量の怨恨を懷きつゝ、低徊願望してこの柴棍の地を去つたのであらう。

私の行色を壯にすべく、在留紳士は私を柴棍を去る二十哩のシヨロンの永春酒樓に招いて夜宴を張つた、シヨロンは安南の提岸、全市支那人の栖むところ、二十萬と稱せられ、昔の交趾燒と稱せらるゝその窯元の地で、そして又た柴棍米の本場である、柴棍にあつた佛國の統治機關が、先年、河内に移されてから、柴棍の人口僅かに七萬、シヨロンなる提岸獨り一大雄市の名を擅にするに至つたのである。

昔の眞臘、やがて東埔寨、其アンコール、トムなる耶輸陀羅城は、クメール王朝中興の英主、スリ、ヤソヴァールマン王の治世、乃ち紀元八百八十年から九百八十年に亘つて建造された大都市である、更に又たアンコール、ワットなる祇園精舎は、スリ、ヤソヴァールマン第二世の治世、紀元千百十二年頃に建造されたものである、その後王朝の衰微から一旦隣國暹羅の版圖に歸し、

やがて再び故主の手に還されたのである。

私は快速なる自動車を僦ひ得た、縹碧の色に塗られた堂々たるものである、往復一千百二十基米、運轉手と助手との食費を除いて、二百八十金である。

アンコール、ワット参詣記

鶴舞ひ紅蓮花さく現世の浄土

曉風残月、睡蓮、水を抽いて花開くこと正に三分の母國の嫩き夏の朝を思はせるやうな風の涼しさ、その涼風に鬢髪を吹かせながら、私は新知の友なるS氏と共に、縹碧の色に塗られた快速自動車を驅つて、柴棍郊外の舗装道路を北へくと行くのであつた。

六時四十五分、私の自動車はゴドーの河の東岸へと來た、渡守の家につゞいて、物賣る家の路を夾んで相嚮ふ、身に一丝をも懸けない乞食の子の、停れる自動車を圍んで錢を乞ふ、荷を載せた牛車、自動車、物を擔げる僮夫、旅客、唯だ一枚の木蘭色の布を肩から身體に卷いた僧侶など、渡頭より列をなして靜かに船の來るのを俟つてゐる。

やがて汽艇に牽かれつゝ大傳馬ともいふべき船が此方の岸へ横づけされた、列をなしてゐた僮夫、旅客、自動車、牛車は、順々に乗り込んだ、渚のあたりは都べて布袋藻が浮いてゐる、モー

ターボートは、その藻の花をかき分けて船を曳く、源を支那の長江と同じく西藏の山奥から發し、雲南に入つては瀾滄江となり、交趾に入つては眉公河となる、その大河の支流なるこの川は湊滯の間に僅かに牛馬を辨するほどの廣さである、船はやがて中流へと曳かれて行く、蕩々として、味噌汁のやうな濁浪が、船の太肚を打つて渦まき流れる、その度ごとに船は軋々と心地よからぬ響を發する、自動車に乗つたまゝ船に上つた私は、しきりに心の戦くを覺えた。

彼岸に上つてまたひた走りに走つた、蒼茫たる平野のうちに、邦人の黒髮山と呼び做す一峯高く草の海より抽くのを望みながら行くほどに、復た一江の路を斷つて横はるのがあつた、バサツク川といふのは是れである、こゝでも自動車に乗つたまゝ船に上る、銀座街頭で見るやうなモガその儘髪を男のやうに剪つた東蒲寨の女の群、窩んだ眼を白く光らせ、馬のやうな黄いろい齒を剃き出し、車の左右から掌を伸して錢を乞ふさま氣味悪し、船の中まで乞食がゐると思ふなかれ、下級の土人は、外國の旅客とさへ見れば、錢を貰ふのがそのホマチであるのである。

バサツクの川を渡ると、大道は例のごとく坦々として矢のやうだ、行くこと數哩、路左に圓錐形の七尺ばかりの石標が立つてゐた、是より北は東蒲寨領と彫りつけられてあるのである、見渡

すかざりは草の海、そこには山もなく又た丘もない、母國の歌人達は、武藏野を夕立の空より廣しと歌つてゐるが、この東蒲寨の草の海を觀せたなら、抑もや何と歌ふであらう、不斷の夏草、茂りに茂つて、雲は蒸し、霧は罩め、地鏡、遁水、時には繁華な都市とも見える蜃樓をさへ、この茫々たる草海の彼方に幻出することもある、殊には彼の眉公河が雨のふる毎に氾濫して、萬宇巴に草の海へと亂流する、若しこの草の海の隨處に群れ遊ぶ眞名鶴や青鷺の背を借りて、空から下を俯瞰したら、こゝに一泓、かしこに一碧、瓢箪形や心字形、必ず無數の沼や池が見出されるに違ひない。

その草の海の隨處には無數の鶴がゐる、眞鶴、鍋鶴、鶺鴒の鳥の群れである、鷺も亦た無數にゐる、五位鷺、青鷺、トキ色のトキを朱鷺と書くから、その朱鷺でもあるらしい内地では見られない紅味を帯びた黄い鷺の群である、淺草の花屋敷や上野の動物園でのお馴染の、長い嘴から喉へかけて大きな囊をもつ雪より白いベリカン鳥も群れ遊ぶ。

私達を載せた自動車は、その草の海を申く砥のやうな大道をフルスピードで快走すると、警笛に驚いた鶴の群、鷺の群は、颯と一時に舞ひ上る、ベリカン鳥も鳴き交はしつゝ低く飛ぶ、私の

八九歳の少年時代に、二重橋外の秋晴の天に、鶴が舞ひ遊んでゐたのを見たことがある、朝鮮へ行つた時も、仁川から京城への道すがら、大樹の梢にこの鳥の群息してゐるのを見たが、斯る無數の鶴を見たのは、この東蒲寨の草の海であつた、國道の兩側には榕樹の列をなすところあり、又た合歡の木も並木もあり、棕櫚、芭蕉を栽えたところもある、時には、三五六と疎らな人家の里もあるが、國境を踰へてからは、往來の人も少く、偶まに路で出逢ふ人の多くは、紅殻色か木蘭色の大幅木綿を肩から半身に捲きつけて、鐵鉢を手に持ったイガグリ頭の托鉢僧あるのみである。

翠なす草の海の路を夾んで、遙か彼方に、霞のやうに明るく紅い大きな池を、車頭に訝かり瞻めながら私達は快走した、近づいて善く視れば、正に紅蓮の花の眞盛りであつた、見渡すかざり水の色さへ洩さずに、風に揺いて露を轉ばす翠蓋の間より、高く抽いた紅の蓮華の幾萬千莖、それが又た尋常一様の母國の池に咲く蓮華でなくて、寂光淨土の畫繪の上に見る八重に咲いた蓮華である、私達は少時自動車を停めさせて、愛でたくも麗はしい香圍のうちは飽くまでそれを見めたのであつた。

路はやがて林の中を過ぎる、路傍の草葉の、風もないのにざわ／＼と戦ぐと見れば、車の音に驚いて舞ひ立つ孔雀の、その七彩の翼に日を受けて、さながら虹の千切れて飛ぶやうに、低く翔けり行くその美しくしさ、深樹の枝には、百千鳥、そこに好音を弄してゐる、鸚哥もゐる、紅雀もゐる、九官鳥もゐる、母猿が子を伴れて遊んでゐるのも見える、車の前を横きつて、野鹿も時には草の中へ跳つて行く。

東蒲寨の首府ブノムベン

トンデーサツプの川を船で渡つて、十一時、ブノム、ベン市に入つた、東蒲寨國の首府である、柴棍から此の市まで、行程二四〇基米、實に我が六十里に當る、安南人はブノムベンを今でも南旺と稱してゐる、その國の東蒲寨も、矢張昔の如く眞臘と呼んでゐる、安南人の栖める河内、東京、順化、柴棍、その地圖の色は疾うの昔に佛蘭西に變へられてゐるが、安南人は總稱して大南國と稱してゐる、先頃までは漢字で書いてゐたものが、佛蘭西政廳の命令で、羅馬字で書くようになったのにも拘はらず、依然として大南國といつてゐる、誠に不思議な次第である

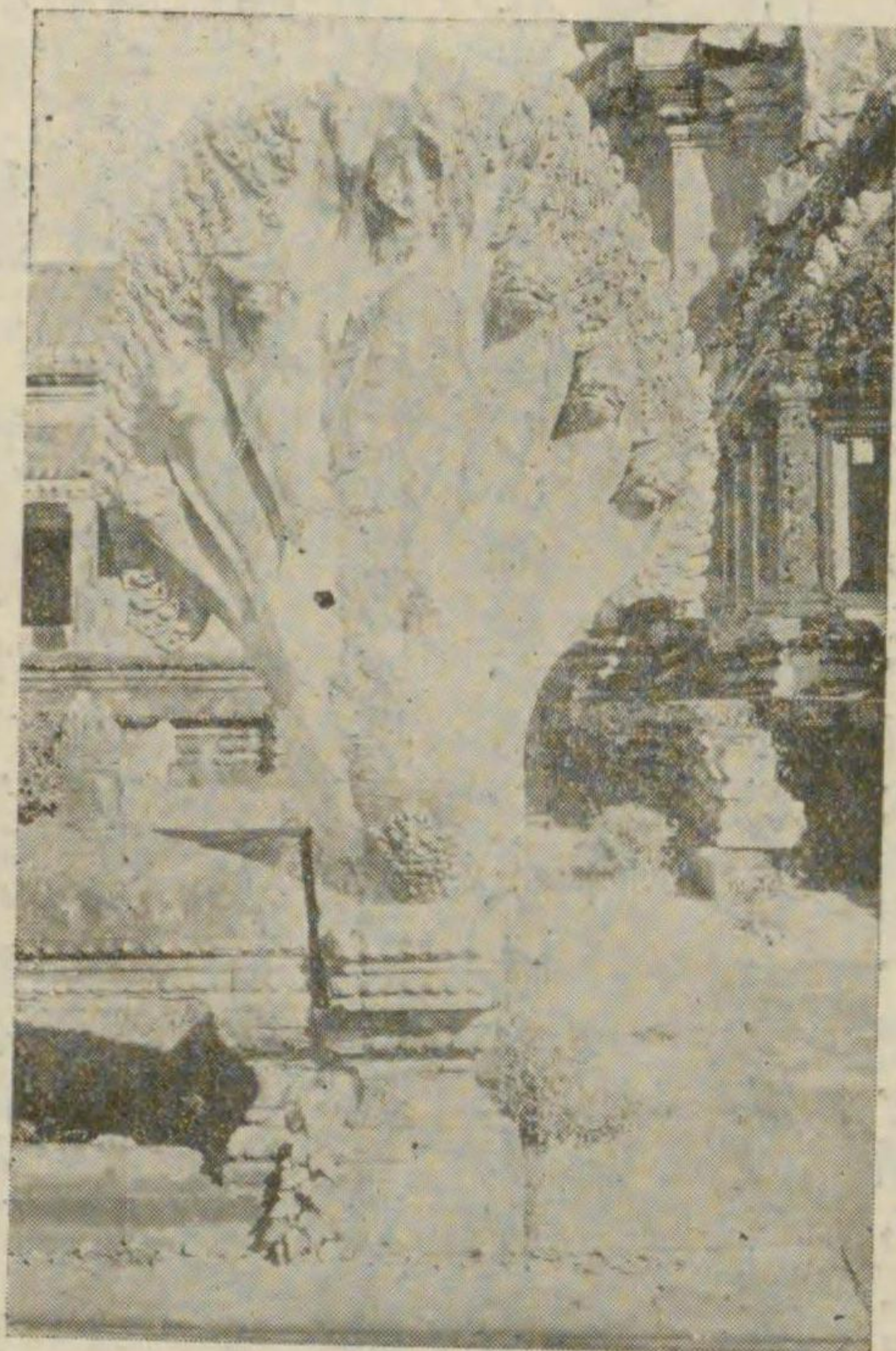
が、一面又た安南人の根強い力がほの見えて、稍や痛快に思はれる。

ブノムベンはトンデーサツプ川に沿ふた殷賑な都である、人口は十萬、主なる市街は洋風の建築で佛蘭西様式の丹瓦粉壁、交通巡査がゐる往來を整理してゐる、私達はグラント、ホテルで午

餐を認めた、食堂は四方の窓の鏝戸を卸して日午の炎風を避け、電燈を點じ、電扇を廻轉し、さながら黄昏のやうな情趣のうちに食を攝つた、人毎に一罇の葡萄酒が供せられる、佛人はこれを普通の飲料水のやうに飲むのである、數ある御馳走のうちに、大きな茹でた蟹の爪があつた。トンデーサツプの川

で漁れるものだといふ、その一箇の蟹の爪は、拳よりまだ大きい、甲堅うして鐵の如し、肉又で突いても卓子の角で敲いてもビクともしない、胡栗を割るクラツカーを取り寄せて、辛くも劈き

ブノムベンの王宮に
七頭龍のガナ橋の欄



砕いて、絹糸を束ねたやうな白い肉に、マヨネーズソースを塗つてこれを咬む、脆美誠に喜ぶべし。

午餐の後、私達は、客室のうちで少時午睡を試みた、天井には東蒲寨の舞踊女の模様を染め出したバンカが徐かに揺れて風を送つてゐる、私はその下の臥床に仰臥して、酣睡すること一時半、二時といふのに呼び醒まされて、又た自動車の人となつた、王宮は河に傍ふて堂々たるものである、朱碧に塗られた數箇の寶塔、國王と等身の黄金佛が安置されてある銀閣も、苑のうちにある、外壁の上には美しい舞臺があつて、時に王室の男女樂人が演舞を催し、市民の觀覽を許すのである。

王宮の見物はこれを歸途にすることゝして、私の自動車は再び北へくと快駛した、草の海は漸く拓けて青疇遠く連つてゐた、野水横流、路を断ちてコンクリートの橋が架る、それが多くは舗装中か修理中で、紅白段々の横木で車行を攔めてある、已むを得ず徐行して、橋の傍に架けられた假橋を渡る、車は重く橋は揺れる、薄い橋板は弓なりに撓み彎る、斯うした假橋を度ると五六回、路を急いで走つて行くと、放牧された水牛がその鈍重な巨體を往來の眞中に横へ、警笛を

鳴らしても動かばこそ、その度ごとに運轉助手は車から飛び降りて、鼻綱執つて路傍に牽いて行き、僅かに車を通るのである。

星月夜のコンポントム

午後五時、コンポントムの村に入り、バンガロ、ホテルに宿つた、ブノムベンから此處までは一六八基米、邦里四十二里である、柴棍からは四〇八基米、實に一百二里に當る、朝より黄昏、食事と午睡の三時間を除いては、正味八時にして百里の路を快走したのであつた。

透垣を結び繞らして石の門、前庭に竹樹を植ゑた瀟洒なバンガロホテルは、政廳の補助を得て佛蘭西人が經營してゐるのである、階段を上つて左右に四室、私達はその二室を占領して、汗と埃に塗れた服を脱いで、シャワーを貪り浴びた、食堂に出て見ると、當夜の客は私達二人のみ、打ち豁けた窓に絡らむ凌霄花、そのほの紅い花の間から、漫天の星光が人を覗ふ、程近い川の早瀬も、雨のやうに聞えて来る、薄暗い電燈、天井に懸けたバンカの徐かに揺れて微風を送るその下で、葡萄酒を飲み、雪駄の皮のやうなピフテキや、猫の反吐のやうなカレイ、ライスを淋しく

食つて、二人は言葉少な晩餐を終つた、國を去つて三千里、遙々來つるものかなといふ感慨と、八時間を車で搖られた疲勞とで、口を听くのも厭やになつた。

宵は淺い、睡むるには早い、私は強いてS氏を誘ふて村を觀るべく門を出た、川に沿ふた片側町は赤煉瓦で、雜貨店、肉屋、饅頭屋、大南旅社など、漢字で書いた燈籠を吊したいと湫隘な旅館もあつた、何れも支那人の家である、都べて十五六軒、その先は一面の草原で、彼方此方に扶疎として立つ樹の陰に、低い草の屋、扉の隙から黄いろい燈火の洩れてゐるのが、東埔寨の人の家である、私は雜貨店で、ゴムの櫛と香水とを購つた、香水は双姉妹、前年中部支那の邊陲で買つたものと同じ支那製であつた、蟬蛸は急雨の如く電燈の周圍に群游してゐる、口を開いて話をすれば喉に飛び込む、その中に店の男は平然と、大肌脱ぎで稼いでゐる、饅頭屋を覗いて見ると、油の鍋の中に饅頭を投げ込み、長い茶箸で掻き廻してゐるその男が、額も、頸も、胸も、臂も、汗と膏とで賓頭盧尊者のやうに光つてゐる、不斷の溽暑と戦ひ、不知案内の異境に出でて、自箇の運命を開拓しつゝある支那人は、誠に偉なりと謂ふべきである。

町を過ぎて川の濬に出た、幅は三四十間もあらう、瀬聲、淙々、晝に見れば、底の小石を轉ばしつゝ雪を噴いて流るゝ早瀬であらう、白ペンキで塗られた釣橋が架つてゐた、風はないが、川の上は流石に涼しい、兩三點の流螢が、つゝい、つゝいと浮いて來て袖を掠めて行つた。

人の一生は、偶然の連続であると私は思つた、小學校の教師、腰辨官吏、文士、新聞記者となつて今に及んだ私、幼にして父を喪ひ、妻を娶り、子女を擧げ、從軍し、觀戦し、母を喪ひ、再び支那に遊び、今又この異域に汗漫の遊びをなす、行藏、得喪、陵夷、隆替、いまだ曾つて初めより思惟し、商量し、企劃したるものではない、齡六十にしてこの南洋を遍歴するなどは、夢にも思ひ到らないところであつた、人生は誠に偶然の連続である、と私は少時、橋の欄干に靠たれつゝ冥想に耽つてゐた。

朝日に燦く五基の大寶塔

翌曉は五時に起きて簡単な朝飯を濟ませ、運轉手を促がして直ぐに出發、爽涼秋に似て、霧は四野を掩ふてゐた、日出で烟銷して青蕪、天に連なり、白鶴、蒼鷺、晴を喜んで盤舞し、路、林藪の中を過ぎれば鹿の遊ぶあり、李鼠の跳るあり、一水又た路を斷つて横はる、シムレアツブの

川である、橋を渡れば、水に沿ふて簇々數十家の村があつた、村の名は川の名をそのままのシム
レアツプ、荇萍髪のごとく清淺の水に浮動し、ベリカン、鶯鳥の群、和鳴して優游す、處々に水
車あり、徐かに廻轉して米を搗くのであつた、もし河邊に熱帯地の植物なく、代ゆるに竹樹の類
をもつてしたならば、正に是れ母國の田家の景趣であることを思はしめる。

市場の前を過ぎて數箇の椽果を買ひ求め、車中にあつてそれを咬みつゝ行くほどに、遙かに茂
林を抽いて、高く五基の寶塔の聳え立つを望み見た、酒前茶後、多年思ひわたりたるアンコール
ワットは、實にこの村を距る六基米(我が一里半)の處にあるのである、村端からは茂林やうやく
盡きて土民の家も疎らになり、眼界頼みに打ち豁らけて、巍々として聳え立つた大伽藍は、藻の
花全く水を埋めた大きな濠を隔て、その雄姿を車頭に露はしたのであつた、コンボントムから此
處まで一五二基米、實に我が三十八里である。

幹の太き三抱へに餘り、高さは數丈、枝を伸べ葉を重ねたその蔭は、數十頭の水牛を掩ふて餘
りある椽果の老木のその邊に、透垣を圍らしたバンガロ風の瀟洒な平家の洋館がある、アンコー
ル、ルイン、ホテルとはそれである、私達はその玄關へと降り立つた、正に七時半であつた、齡

若い佛蘭西人の支配人は、にこやかに出迎へて、珍らしや貴下等は日本の方にてあるかと問ふ、
然なりと答ふれば、善くこそ千里の海を超へて、はるく斯る邊僻のところへ來りたまへる、先
づ憩はせたまへと、いそ／＼しく中央の部屋へと案内し、曹達水に氷を碎き入れたのを出しても
てなす、S氏は私を支配人に紹介して、東京の文士にて南洋諸島の觀光を終へ、交趾を歴てこの
アンコールの廢墟を觀んとて、五百六十基米の路を昨日の朝から自動車を飛ばし、今朝は曉の五
時コンボントムより來りしと告ぐ、支配人は喜び、貴下にはジョツフル元帥を知れりやといふ、
善く知りをれり、先年我が國に元帥の來朝されし時、私は宮城の二重橋邊にて、元帥が參内さる
るその行列を觀たりと答ふ、支配人しば／＼點頭きて、元帥貴國訪問の歸途、柴棍よりこのアン
コールの廢墟を見物にと來られて、我がホテルに一宿されたり、その部屋は、元帥紀念の部屋と
名づけて、世に著聞する客ならねば、入れざるこゝなりをれど、けふは貴下の爲に元帥紀念の
部屋を提供すべしと、ボーイに鍵を持て來させ扉を啓く、中央の部屋を出で、廊下を度れば、そ
の最初の部屋がそれである、廣さは二十疊ばかり、その奥の四分の一ほどを仕切りて、水浴場、
便所、洗面所となし、白綾の蚊帳涼やかに、濁き臥床を置き、椅子卓子を安排し、電扇を備へ、

前後に四つの広い窓があつて、極めて明かるい部屋である、楯間にはジョツフル元帥の寫眞額、高く懸る。

大伽藍の大參道へ

私達は先づアンコールワットを見物すべく自動車を驅つて旅館の門を出た、門前にある椽果の老樹の葉がくれに、黄いろく熟してゐるその果が果々として生つてゐた、村の童男童女の群れは、その木の下に集つて、童男は石を投げて果を隕し、童女は網を兩手に披いて、墮ちて來るその果を拾ふ、果は市に搬ばれて錢に換え、網に受け損じて地上に落ちて潰えたものは、頰ちてこれを啖ふのである、旅館の門を距る半町ばかり、こゝには榕樹の大木があり、村の老人や行旅の客が、その蔭に憩ふてゐた、駄菓子屋なども、屋臺店をそこに卸して、廢墟にふさはしい野趣を添へてゐた。

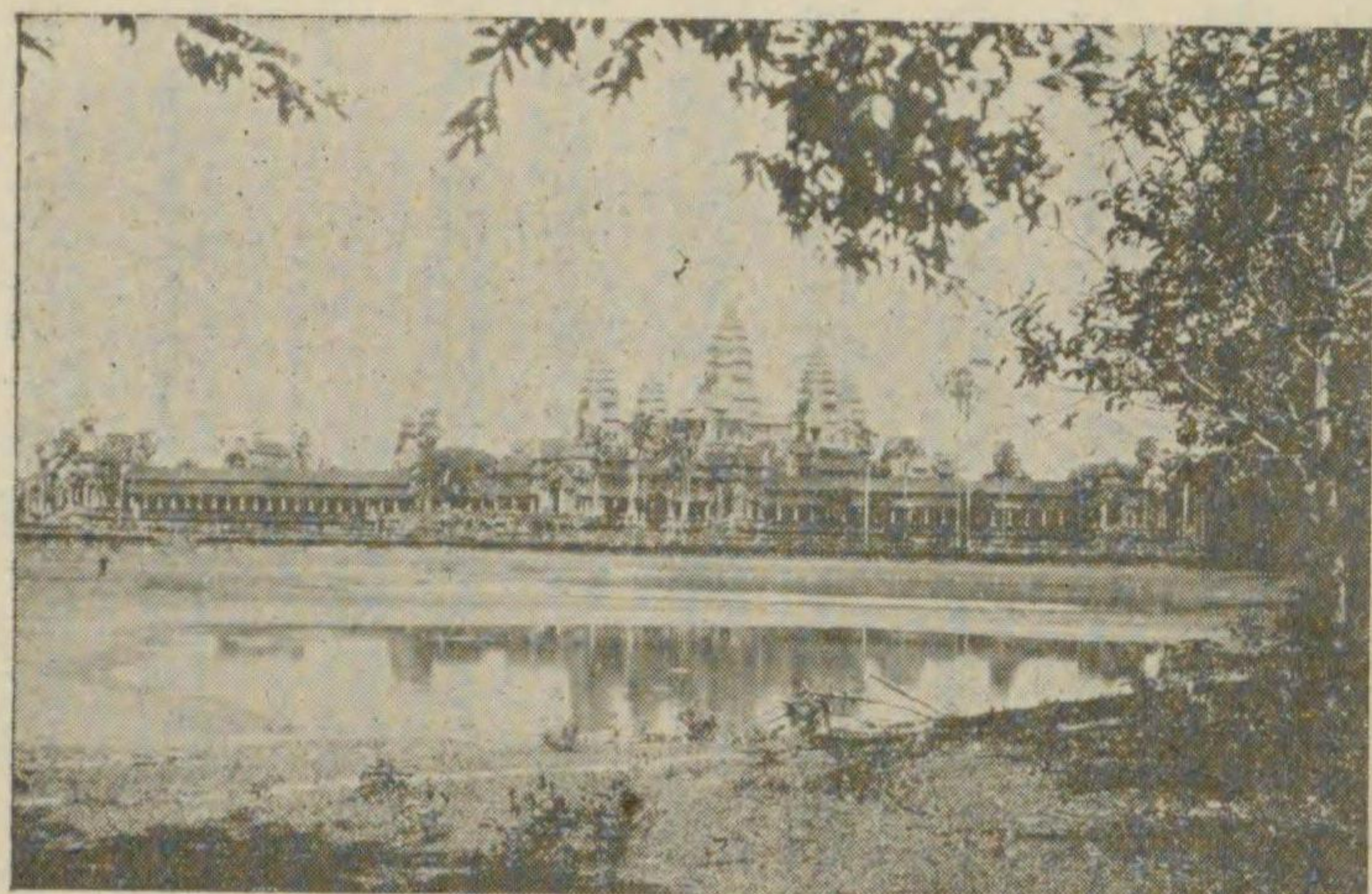
やがて自動車は、濠の畔の正門參道の石磴の下まで來た、私達は降り立つた、大きな石を登んだ數段の石磴、それは十間四方もあつて、正面と左右から登れるやうになつてゐる、正面から登

ると、廣さ六間、長さ三百間と稱せらるゝ磴石の參道が、濠を斷つて眞直にアンコールワットの

大玄關へと通じてゐるのである、石磴の三方に繞らされた石欄干は、無残にもあら方破壊され、門を守る大きな石獅も、三體は散々に壞れ零ち、残る三體は哀れにも缺損してゐる、私はそのうちでやゝ満足な石獅を撫しつゝ低回した、母國の神社にある高麗狗、支那の廟觀に見る石獅、それとは又たその趣きを異にした東埔寨式の怪奇なるその石獅は、頗る私の趣味を惹いた。

二尺四方ばかりの方石を敷きつめた長い參道も全く荒れ果てゝゐた、參道の左右には、この國の人が神物として崇敬するナガー、即ち神龍、若くは神蛇の長い龍身の石欄干となつてゐたのである、これもいまは缺損して、

濠を隔て、アンコールワットを望む



處々に僅かにその片影を留めてゐるに過ぎなかつたが、亦た當年の壯麗さが偲ばれる、濠は水の

色も見えないまでに、可憐な花を抽く布袋藻で埋まつてゐる。

私達は、五基の大寶塔を仰ぎ看めつゝ、參道を度つて進んだ、長さ三哩に亘る濠に圍まれて、そこに大きなアンコールワットの石造の大伽藍が立つてゐるのである。

島野兼了氏の祇園精舎圖

こゝで私は、且らくアンコールワットの小史を述べる、徳川三代將軍家光公の時、長崎の大道辭島野兼了といふ人が、幕府の命を受けて天竺に渡り、祇園精舎の實地を測量して歸朝した、その實測圖は現に水戸の彰考館に秘藏されてある、しかし島野氏の作つたこの圖は、中天竺の祇園精舎の圖ではない、建築學者の考定では、確かに東蒲寨の北邊なるシエムレアプ湖、佛蘭西人の所謂グランラック(大湖)の北畔にあるアンコール、ワットであるといふ。

祇園精舎の名は我が國では夙に人口に膾炙してゐる、平家物語にある祇園精舎の鐘の聲は、諸行無常の響きありといふその卷頭の名文章は誰人の腦裡にも滲みてゐる、祇園精舎といふのは、中天竺舍衛城、現在は印度西北州のバーライチ縣のネパール國境に近いアヨドファ市の北、ラプ

チ河の畔、サーヘト、マーヘトといふ處に當ると伊東忠太博士はいつてゐる、歴史によると祇園精舎はしばしば炎上したが、支那の六朝時代までは尙ほ儼存してゐた、東晋の隆安年間(我が仁徳帝の御宇)西域から天竺に入り、錫蘭に渡り、瓜哇を経て、義熙九年に歸つて來た僧法顯が中天竺の祇園精舎を訪れた時の記事は、佛國記に載つてゐる、唐の玄奘三藏の訪れた時は、法顯より二百餘年の後であるが、頗る荒廢してゐたとの事である、伊東博士が印度の故地を尋ねた時も、遺跡は既に湮滅し、探討するに由もなかつたといふことである。

足利氏の末造から徳川幕府の初期にかけての人が、天竺といつたのは、今の前印度のみを指すのでなく、暹羅や占城なども天竺の一部と認めてゐた、彼の天竺徳兵衛などの稱呼でも善く分る、日本と所謂天竺との交通は、案外容易であつたらうが、中天竺への交通は至難の事であつたと思ふ。

私は東京に在つた時、彰考館秘本の島野兼了氏作るどころの祇園精舎の復本を見ることを得た、その島野氏の圖にある精舎の規模と、このアンコールワットの規模とを對照して見ると、島野氏の圖は日本流の構圖となつてゐるのみで、大體に於いて全く相同じものであることを確かめ

た、私は將軍家光の台命を奉じ、和蘭船に便乗して渡天した島野氏は、所謂天竺の一角に上陸し、交趾、占城からその奥地に入り、眞臘國の太湖々畔にこの石造大建築の廢墟に到達し、正しくこれが自分の尋ね索むる祇園精舎であると斷定したのであらうと思ふ、アンコールワットに近く、アンコールトム、即ちアンコール大城がある、元は耶輸陀羅城といふ、島野氏は和蘭語や支那語には通じてゐたらうが、安南、東蒲寨語は知るまいと思はれる、その所謂天竺の一角に上陸した島野氏は、古の舍衛城への地理は勿論知らう筈はない、大河、廣澤、荒原、幽林、そこに風餐露宿しつゝ、ひたすら内地に向つて數百里を進み入り、略ぼ中天竺とも思はるゝ處に、この絶大なる大伽藍のあるのに逢著し、都城の名の耶輸陀羅が、偶然にも大聖釋迦の妃の名と同じきに想到し、言語の不通と不知案内の旅程とで、正しくこれが祇園精舎であると信じ、歡天喜地、涙を流して佛陀の冥護を感謝したのであらうと思はれる。

アンコール小史

アンコール、ワットはトンレサツプと名づけらるゝ延長百餘哩もある太湖の西北端、湖岸から

北十七基米、シエムレアブから程近い處の古の甘孛智、支那の所謂眞臘國の都府耶輸陀羅城、即ちアンコールトムの近郊に建てられた大伽藍である、今は全く廢墟となつてゐるが、都城は西曆八〇二年より同六〇年の間に、その基礎は置かれ、後八八〇年より九〇八年までの間に王シリ、ヤシヨヴァルマンの建造するところであると傳はる、城廓の中にあるバヨンと稱する殿堂は、當時の美術の傑作品を藏してゐたといふ、甘孛智王の先祖は印度クメールから侵入した英主で、その傳統は今の東蒲寨に及びて二千年來、連綿として續いてゐるといふ、アンコールワットを建造したのは、更に百餘年を歴た後である、元の元貞年間に眞臘國に使臣を派遣した時、隨行した周達觀といふ人がその大城のさまを書いた記行には、金塔、金橋、修廊、複道、その建築の奇巧偉大なることが記されてある、その記行によると、温州から解纜して閩廣海外諸州の港を歴て交趾、占城、それより風に順つて眞蒲に至り、崑崙洋を過ぎて港に入り、河に溯つて查南に抵り、查南から小舟に換へて淡洋を度つてその都城に入つたとある、淡洋は太湖の事である。

眞臘國は紀元一三〇〇年頃までは盛んであつたが、一三五〇年(後村上正平六年)に至り暹羅人の爲めに都を奪はれ、一三八八年にはバツサンに遷都し、莊麗なる耶輸陀羅城は放棄してしまつ

た、暹羅人は真臘の古都を占領して、印度教の伽藍であつたアンコール寺院を、更に佛寺に改めた、島野氏の往き訪づれた時は暹羅の領有に歸してから、約二百五十年の後であるから、儼然たる佛刹の規模を存してゐたものと思はれる、その後暹羅の國運漸く衰へ、一七七一年（後櫻町明和八年）には緬甸に亡ぼされ、一七七八年（後桃園安永七年）には清の封冊を奉じて獨立したぐらゐであるから、アンコールワットの靈域も、空しく草萊の中に埋没し、全く世界から忘れられてゐたところ、一八五八年（安政年間）から數年に亘り、探險家ミュオー氏が瀾滄江探險の際、端なく發見されて世上に喧傳し、一八六二年（文久三年）佛蘭西は東蒲寨を保護國として益々アンコールワット研究に歩を進め、一九〇二年（明治三十五年）に至り一帯の版籍を佛蘭西の手に收めてしまつたのである。

廻廊石壁の大浮彫圖

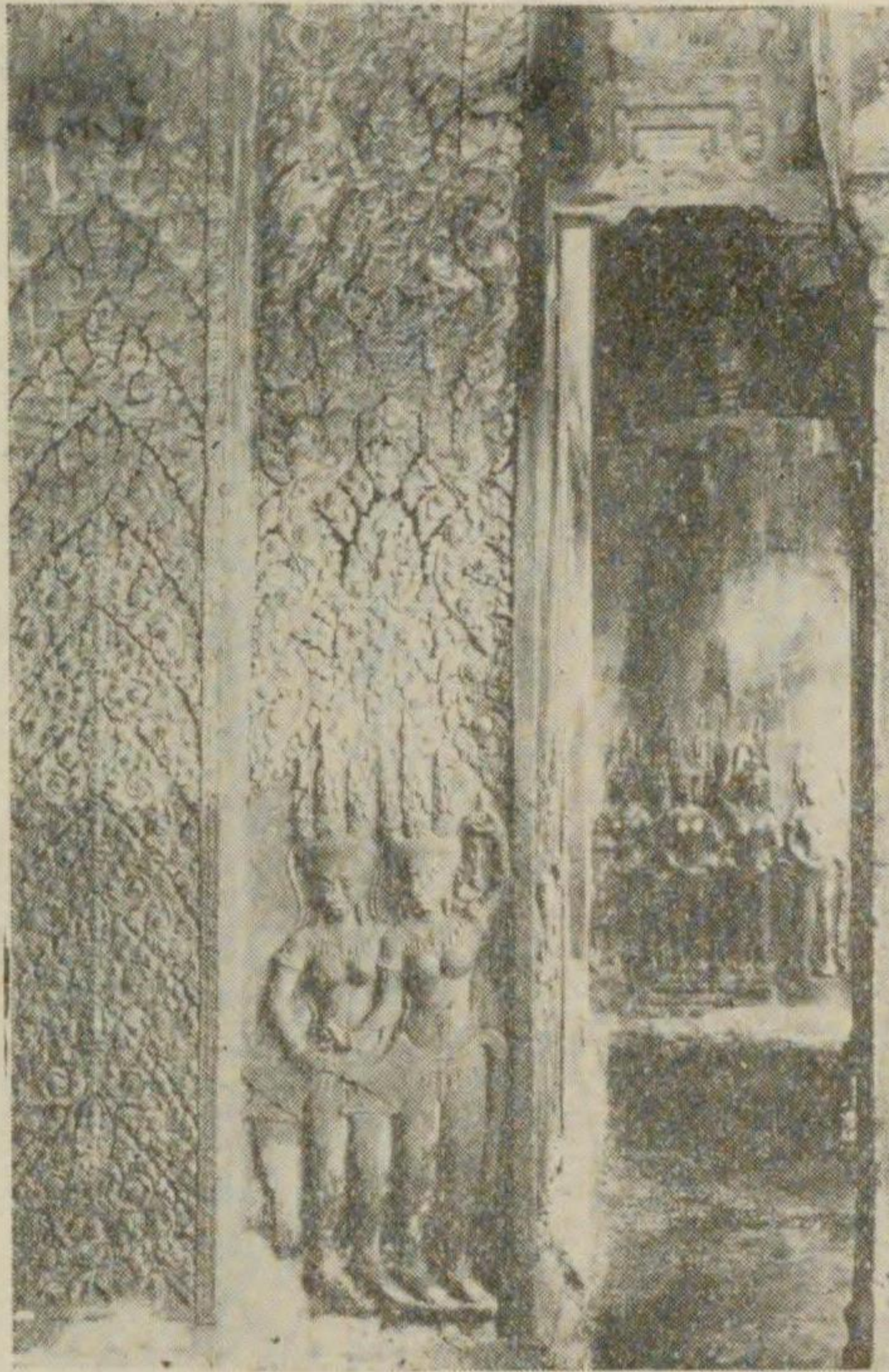
私達は、そのかみの國王が、白象の背の上に載せた寶坐に踞し、麗人を隨へ、禁衛の武士に護られ、翠華揺々この莊麗なる大伽藍に詣で、香を燃き花を散して禮拜した參道の上を度つてその

大立關の石礎の下まで來た、石壇の高さは、丁度、象の背から安らかに降り得らるゝ高さ八尺ほどのものである、四本の大石柱があつて、正面から見れば楯形の圓い屋根を支へてゐる、その玄關を中央にして左右に亘る回廊は八百米突に亘ると註せられる、十三段の石礎を登れば十字形をなせる廣い禮拜壇がある、私は第一廊に入る、列柱、四方に各八十一本、六箇の入口があり、回廊の末端には閣がある、玄關の正面に立つて眺むると、眞中に大寶塔が見え、その四方にやゝ低い寶塔が空に抽いて高く聳え、多年の風雨に蝕ばまれ、葛蘿をまどひ莓苔に封ぜられた石壁磊々として人を威壓し、奇趣誠に言語に絶す、廻廊は左右翼をなして前に太き石柱を列ねて、穹窿なす天井を有し、内部の壁面は、都て精妙なる浮彫がある、浮彫の面は實に二千平方米と註せらる、その外廊の入口には左右に石獅あり、柱には唐草模様を彫刻す、その浮彫ある壁面には諸處に牖を穿ち、珊瑚のさまに輻輳を用ゐて削り成した石の格子があり、一人の僧の伽藍を守るものなきこの空廊には、蝙蝠無數に栖み、蹺音を聞いて嚙々と相喚びて低く飛ぶ、糞臭、鼻を衝く、私達は手帕をもて鼻を掩ひつゝ、先づ廻廊の浮彫を巡り觀たのである。

中央の入口より右折すれば西廊の南翼である、五十米突の長さに亘つて兩軍暗啞して酣戦する

の光景を現はしてゐる、戰士は皆な一樣の兵器を持ち、一樣の服装をなし、その首將は婆羅門神將のやうな冠を戴いてゐる、浮彫の下部は歩兵の進軍を現はし、第二段及び最上段には象に騎れる副將や、日傘、旌旗、便面をもて圍繞された戰車の上に踞した主將を現はしてゐる、更に亂戰の

石柱はすべて密刻の唐草と女神像



浮彫の前に歩を移すと、敵の箭に中つて大地に仆れた軍士を圍みて兵士等の悲嘆せるあり、戰象を急がせ甲冑を脱ぎて走り去らんとする將軍もあり、深傷を負へる一戰士が、兵卒の腕にすがつて車より扶け出ださるゝところもあり、姿態、誠に活けるがごとく、その戰馬の如きは

跌宕奔馳、善くその妙趣を盡してゐる、

遊するの圖と闘鶏戲をなすさまの浮彫がある。

南廊の兩翼は九十八米突の長さに亘る浮彫ありて、クメール彫刻の中でも、最も顯著なる精妙の技工であると稱せられてゐる、刻文はあるが讀むことが出来ない、しかし甘字智の古史に就いて最も著名なる史實を現はしたものである、後宮の宮殿より王妃女嬪は輿に乗り車に駕して隨者雲の如く、列を作つて林丘の上に登る、上には王者の朝會あり、文武大官、婆羅門その左右に侍す、次には行軍の浮彫となり、槍を執り圓盾を持するもの、斧を持つもの、弓矢を執るもの、中に象の背に跨がつて、一足を鞍に置き、一足を象の臀部に伸ばし、方冑を戴き短刀を持った主將もある、王は日傘と加樓羅に騎つたヴィシヌ神を表はした軍旗とに圍繞され、道士、優倡、樂人を先に立てた聖火の行列となる。

更にその東翼に入る、浮彫の長さ六十六米突、上下二段となり、下には地獄の苦惱を現はし、加樓羅の列は中帶を割し、上は美人僕婢兒孫に圍繞せられて、悅樂する寂光淨土の有様を浮彫してある、百味の飲食の供養を受け、天女その背後より團扇を執つて涼を送るなど、具さにその姿態を盡してゐる。

東南隅の閣には些の裝飾もない、次に東廊、その南翼の壁面には長さ四十九米突に互つて雄大なる浮彫がある、題材はラーマヤーナに採り、中央に靈龜あり、マンダラ山を負ふ、ヴァスキなる大蛇がその山を捲く、諸天、阿修羅、その數都べて百七十人、左右より蛇身を抱きて互にこれを曳き寄せんと金剛力を出す、山動き海荒れ、波瀾洶湧し、シヴァ、ブラーマ、ハヌマン、猿王の妖神出で、しきりに鼓舞し聲援する、海中の鱗屬魔類、或は溺れ或は傷き、天上のアプサラ神はこれを見て歡喜し踴躍す、その構圖の瑰奇なるは四廊の壁上これを第一に推す。

東廊北翼の壁面は、諸天と阿修羅の争鬪の圖で、素描のみにて彫刻されずにある、北東隅の閣の裝飾も亦た完成するに至らない、北廊東翼の壁には神話的戰爭の浮彫あり、圖の一端にシヴァ神あり、長髯を蓄へ背光を負ひ、三叉劍を執りて、諸天と諸道士の間に在りて戰を觀望す、諸天のうちにはシヴァの子なる象首のガネーサがある、概してこの廊の浮彫は極めて粗笨なる下畫に由つて彫られてある、第二翼の浮彫も亦た諸天阿修羅の戰爭圖で、中央に迦樓羅に騎したヴィシヌあり、ラヴァナの卒ゆる羅刹軍に向つて諸天を指揮してゐる、聖鷲ハンサに乗つた梵天も居れば、七頭の蛇や孔雀に騎つた諸天もあり、又た金輪車に乗つた日天もゐる、北西隅の閣にも神話

的戰爭の浮彫があつた。

西廊の北翼には、ラーマヤーナの史譚を表はし、ラーマ王は猿軍を指揮して、美人シタを強奪した錫蘭王ラヴァナ軍と鬪ふさまを彫る、十首十臂を有するラヴァナは獅車に駕してラーマ王及び猿軍と酣戦し、軍象潰敗、戰士枕籍の光景を寫す、是等の浮彫は、いづれも皆な婆羅門傳説より東埔塞歴史に混入したるものを題材として、當年の名匠大家が、一刀三禮、その心血を傾注して作製した世界に稀覯の物であると稱せられる。

複廊の大石柱に古武士の題名

遍く第一廊を度りて、その群妙を觀た私達は、更に複廊をわたりて第二廊に入つた、複廊の左右は庭となり、昔はそこに佳木瑞草が栽ゑられてあつたらうと思はれたが、今は瓦石狼籍して、荒草の離々たるを見るのみであつた、複廊から第二廊に入らうとする左右に各一箇の寶庫様の建物ある、島野氏の見取圖ではそこに四千體の金佛が藏されてあつたといふ、言ふまでもなくこの庫も石造で、柱、入口、簷には皆な唐草模様と、女神の像が彫られてあつた、海鼠形の石瓦、波

のやうな優しい曲線を引いて、層々鱗次して次第に高く第三廊の簷端につゞく、島野氏の見取圖には第二廊に八箇の高閣があると記してあるが、今は全く破壊されて残骸を留むるのみである、牖には珠を串くさまに似た轆轤細工の格子列なり、石膚寒むげに欹たてる壁に傍ふて、幾千百體の木佛、或は高く或は低く安置されてある、多くは缺損して、首の落ちたもの、結印の手の零ちたもの、兩臂を缺いたもの、跣坐の脚を失つたもの、瓔珞、背光、今は全く掠め去られて、完膚なきまでに荒されてゐる。

複廊の左右には各小池がある、水は全く涸れてゐた、複廊は四本の大石柱があつてその屋を支へてゐる、柱の面には唐草模様と女神の像が彫れてあつた、私は右方第二柱の下に立つて、その精妙な彫刻を耽看してゐた、偶、首を舉げて、柱の上邊を見た、その刹那、私の瞳に滲み入つた御家流の日本文字があつた、しかもそれが寛永九年の四字であつた。

私は慌しく眼を拭ふて凝視した、そこには數行の日本文字が、正しく御家流の筆意をもて書かれてあるのであつた、私は胸をどろろかしく、石膚に深く滲み入つた墨光漆のごとき題字を読んだ。

最初の行には、寛永九年正月に初而此處に來ると書かれてある、さては鎖國令發布前四年の春、日本から遙々こゝに渡航して來た人の留めた筆の蹟である、私は衣兜から手帖を出して萬年筆を執つて且つ讀み且つ寫した。

寛永九年正月に初而此處來ル、生國日本

肥州之住人藤原朝臣森本右近太夫

一房御堂ヲ志シ千里之海上ヲ渡リ一念

之胸ヲ念シ世々娑婆浮世之思ヲ清ル

爲コ、ニ佛ヲ□(拜)シテ之ヲ書ク物也

攝州津□(國)池田之住人森儀太夫

□□一吉裕道仙之爲娑婆ニ茲書ク物也

尾州之國名黒ノ郡後室□

老母之魂明生大師(姉)爲後世ニ茲ニ書物也

寛永九年正月七日

題字は正に十行で、一字の大きさは七八分、筆力優逸、一字、一劃、そこに書いた人の虔敬の精神が流露してゐる、私は且つ讀み且つ寫しつゝ池田之住人森本儀太夫と云ふに至つた刹那、加藤肥州麾下の勇士の名が電光のごとく私の脳裡に閃めいた、筆を收めて私は、更に又たその題名字を凝視した。

寛永十三年五月十三日に鎖國令は發布されたのである、その四年前、この題名の筆者森本右近太夫一房は、千里の海を渡つて遙かに此の東蒲寨の奥地に至り、この大伽藍に參詣したのである、既に肥州の住人といひ、森本儀太夫といひ、老母の魂明生大姉といふ、正しく右近太夫一房が、その父母の冥福を祈願したものであると私は信ずる。

儀太夫は加藤清正麾下の士で勇猛をもつて稱せられてゐた、征韓の役に從軍して屢々奇功を建て、その晋州城包圍戰の時のごときは、龜甲車をもつて城の石垣を撃破して城内に突進し、勇名を轟かした人である、清正公は慶長十六年六月病歿し、その子忠廣封を繼いだが、やがて出羽の庄内に配流され、家は全く斷絶して譜代の家臣は四方に離散した、儀太夫も亦た浪人となつて攝州池田に退隱し、善き主取りもしないうちに世を捐てたものであらう、其妻も亦た尾州に歸り寡居

久しからずして病歿したのであらうと思はれる、その子右近太夫一房、身は武士の家に生れながら、偃武の世に遭ふては最早其武を用ゆるにところなく、徒らに髀肉の肥ゆるを嘆じてゐた、發憤、海を渡つて異域に自家の運命を開拓しやうと志し、その頃はまだ朱印船が南海、交趾、暹羅邊へ往來してゐたのに便乗して南海を遍歴し、やがて東蒲寨の奥地まで進入して、端りなくこの大伽藍を觀て、これこそ祇園精舎の靈蹟であると信じ、歡喜合掌してひたすらに佛を拜し、矢立を抽いて筆を啣み、案内者なる東蒲寨人の背に跨り、大石柱の上、八尺ばかりの處にこの數行の文字を記し留めたものであらう思はれる。

アンコールの建築材料は、全部沙石である。質は堅固だが水蝕作用を受け易い、日本などで沙石を建築材料に使用すると、雨水や霜雪は石膚の中に浸入して、凍結して龜裂し、久しからずして缺損する、しかし常夏の熱帯地であれば爾うした虞れはなく、永久にその原形を失ふことはない、その石膚の疎鬆である爲めに、墨は深く滲透して、筆の蹟は長くこの世に留まる、前人のアンコールワットを訪づれたものに、友人故長田秋濤氏がある、鶴見祐輔氏もある、徳川侯爵もある、齋藤實子もある、鎌田榮吉氏もある、樋口龍峽氏もあり、藤山雷太氏もある、しかも是等諸

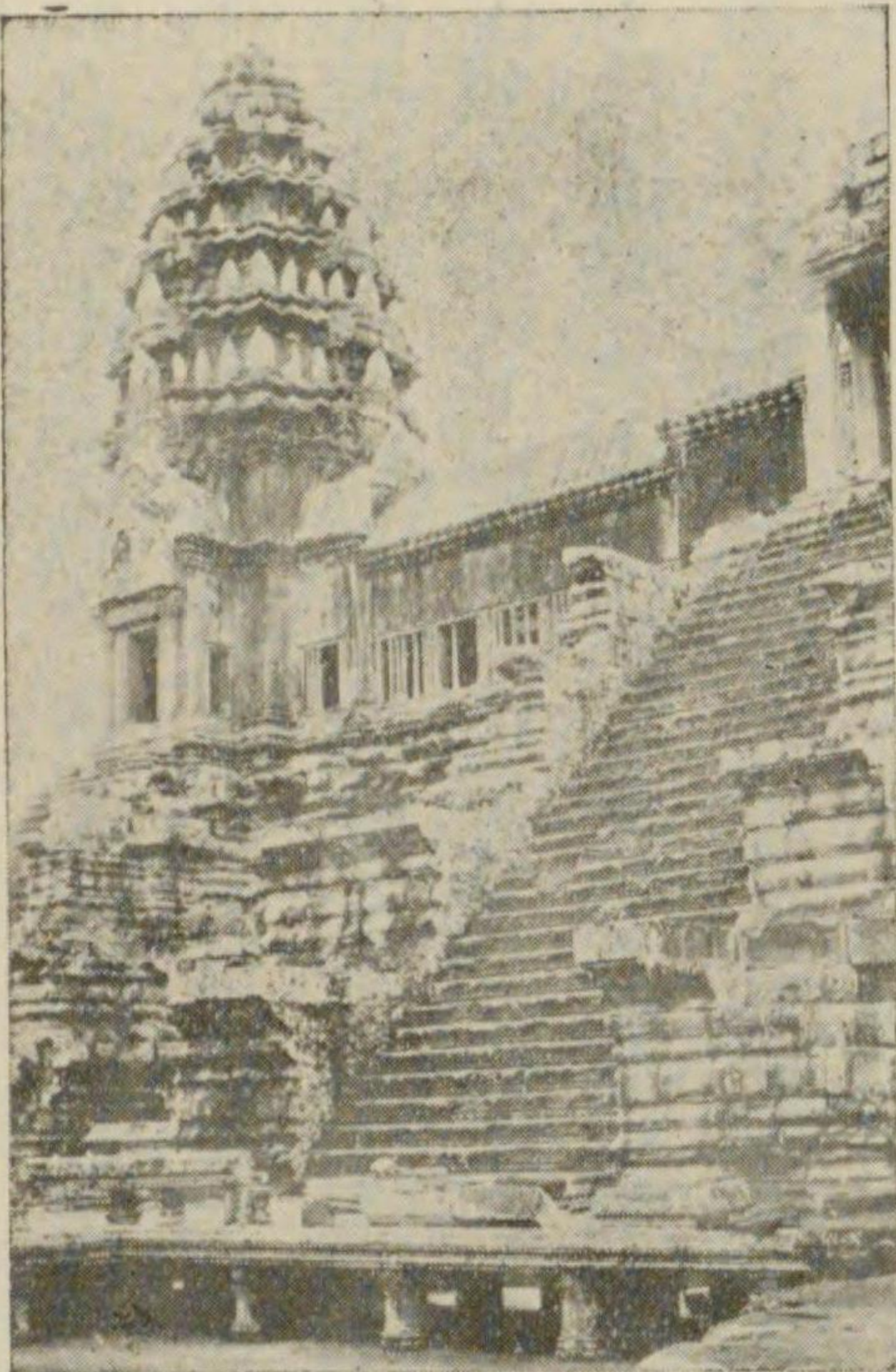
氏の記行中に、記してこの古武士の題名に及ぶものあるを聞かない、私は汗漫三月の遊を南海に試みて、今まこの古場に始めて古武士の題名を發見した、私の驚喜は想ふべきである、私は覺えず石柱を抱いて雀躍した、題名のうち、尾州名黒なる郡名は、今の市町村名鑑にない、調べて見ると今の羽栗郡で、その頃はまだ名黒と呼んでゐたのが分つた、去るにても、この題名ある石柱の、人の身長の及ぶ邊りには、羅馬字や、安南、東蒲寨、暹羅などの、漢字と横文字と、春蚓秋蛇、狼籍として參詣者の樂書がかゝれてある、八尺ばかりの高さであるから、古武士の題名は今ま尙ほ明らかに読み得らるゝが、長い歲月のうちには、やがては他の參詣者の亂塗する墨の痕に銷し埋められるであらうことを恐れる。

ふと私の背後に寫眞機を擔ふた東蒲寨の青年が跟いて來るのを見た、觀光客の爲めに記念撮影をする寫眞師であつた、S氏は寫眞師を呼び留めて、その柱上の題名の撮影を命じた、寫眞師は、黄昏のやうなこの微明のところでは、撮影することが出来ないと答へた、マグネシウムを持つてゐるかと言くと、ソナナ物は持つてゐないといふ、私は強いて寫眞師を促がして、三脚つけた寫眞機を仰角にして、十分時の長きに亘つてレンズを開かして、兎に角この題名を撮影し

た。

中央大塔には金色の大佛

アコンラツト中央大塔の石磴



中央なる大塔は、私の肩を壓して儼として聳えてゐる、高さは百五十尺を超えると仰ぎ見られた、幅三間もある三十三級の石磴は直ちに中央大塔ある廻廊の入口に通じてゐる、石磴の左右には、大きな平石を層々と積み重ねて、上豊かに下窄く、さながら東京の帝國ホテルの外壁の様式と同じ手法の臺がある、私は佛掌

臺とも仙棋盤ともいふべきその石臺の上にS氏と並び立つて、記念撮影をなさしめた。

大塔廻廊の入口は、第一廊の入口と同じ八本の大石柱をもて緻密の彫刻ある二重の屋を支へて

ある、柱にも、臺にも、屋根にも、石礎にも、皆な精妙な彫刻がある、廻廊の四隅にも各一箇づつの小塔が聳えてゐる、中央の大塔、四方の小塔、いづれも上は尖り下は豊かな印度式の圓錐形で、都べて九層に分れ、層毎に蓮華瓣形のうちに佛像を彫り浮べた卒塔婆を聯ね並べて莊嚴されである、千年の風打雨淋に、石は全く白ら寂びたれ、その凹處、竅處にいまだ全く剝落せざる金粉の、燦然として亭午の日に照らさるるのが見える、莊麗なる當時の盛觀は想ふべきである、元の周達觀の記文は、決して溢美の辭ではない。

私は中央大塔の下に立つて仰ぎ見た、香龕のうちに身の丈け一丈ばかりの金色佛が安置されてある、傍に鼯睡してゐた一箇の老僧は、蹙然たる私達の靴の音に華胥の郷より驚き覺め、肩から祛れた木蘭色の布を身に纏ひながら、佛名を低唱し長い線香に佛燈の火を移して、石の香爐の灰に樹てて、私達に喜捨の錢を乞ふのであつた、老僧の禿げた頭上には、紅い紙を剪つて作つた尖塔形の帽子を冠つてゐた、私達はやがて再び長い石壇を下りた、アンコール、ワットの大觀は、これで遍く看ることを得たのである。

瀨王の物見臺とその寶殿

日は亭午を過ぎた、幽邃なる伽藍のうちから、俄かに烈日の下に立つた私は、軽い眩暈を感じて少時は佇んだ。

程近い道を自動車に上つて、私達は午餐を攝るべくホテルへと還つた、食堂には四五人の客があつた、家庭教師の婦人を伴ふた米國の若い女學生、土木技師だといふ佛蘭西人、新嘉坡に住む商人と聞く中年の支那人、これも商人だといふブノム市の東蒲寨人であつた、天井から垂れたバンカの軽く揺いて風を送るその下で、客は皆な口數少なに食事を攝つてゐた。

やがて復た私達は自動車でアンコール、トム、即ち古都を觀るべく林間の道を過ぎた、檉の木に似て巨大なるサオの樹や、圓い葉をもつ十數丈の太木の、その幹から燈油が湧き出すヤオの木といふものもあつた、榕樹もあり、椰樹も亦た茂つてゐた、行くこと二哩ばかりでアンコールトムの廢墟に達した、荒殘した城壁の缺けた處は南門である、私はその門から入つた、數町に亘る草原を前にして高い石壁が立ち並び、上に零落した殿閣があつた、石壁の面には戰象や戰士の浮

彫があり、その下邊には多數の金剛力士が蹲踞して兩手を上げて、その石壁を支持してゐる姿を彫つてある、その基礎に當る處に往々にして燃ゆる火の色に似た爛朱の大石塊が露出してゐる、火山から噴出する熔岩中にある鐵分の凝結したリモナイトである、量られざるの重さを有つ石造大殿堂の基礎には、如何なる物を使用したかといふとは、建築家の多年の懸案となつてゐたが、料らずも此處にリモナイトの大磐石を發見し、這般の石造建築物の基礎は正しくそれであることが分つたといふ。

こゝは癩王と稱せられた東蒲塞王のテラスと呼ばれ、物見臺の址である、臺の上から俯瞰すると、草原を隔てた前面林籓のうちに十數箇の石室が見える、禁衛の將士そのうちに宿營し、この廣場で武技を演じたものであるといふ、丘の中央に、身長六尺ばかりの一箇の石人がある、跌坐して右手を膝に置き、左手は缺けて所在を失つてゐる、癩王の像であると言ひ傳ふ、眉目端麗、鎌倉の大佛ならねど、誠に美男に見えたのである。

テラスの物見臺を距ること數百歩にして、巨大なる殿堂の既に全く潰倒して、巨石磊々、山のごとく積まれてあるのを觀た、バヨン大堂の廢墟である、巨象、人物、佛像などの彫刻ある類れ

た壁を攀ち登つた、廻廊、香壇、僅かに昔の面影を留めて、看て心酔せしむるのに足るの精妙な浮彫がある、奥殿のうち、そこに寶龕ある、金色佛が安置され、僧あり一人淋しくこれを護つてゐた、殿後には十丈にも餘るかと思はるる數基の大石塔が、林樹の中から高く聳え立つてゐる、石塔毎に、ブラーマの大きな顔が刻りつけられてある、顔の長さ一丈ばかり、眉暈臉影いまだ全く銷磨せず、さながら巨人が眼を瞋らせ齒を切し、彼の蒼を仰いで人天を呪咀するかと思はれた、私は、タケオの寶物殿の廢墟を林樹の間に望んで、東の方、勝利の門から古城を出た、タケオ殿内には、寶石エメラルドで作られた佛像が安置されてあつたが、暹羅軍侵入の時、搬び去られ、現に今暹羅王宮内の寶殿に安置されてあるといふ。

蛇身を曳く金剛力士

勝利の門は高さ三丈五六尺もあるべく、穹窿なす石門で、一面に葛蘿が這ひからまつてゐた、門外の左右には、數十體の金剛力士が、神蛇ナガの蛇身を擁して立つてゐる、力士の高さ七尺ばかり、蛇身は人の抱くに餘まる、しかも皆無殘にも缺損し、數年前までは残つてゐたといふ七

頭の蛇首も、亦た今は折れ零ちて、何處に搬び去られたか、その之く所を覓むるに由もない。

城外には、太子殿、母后殿などの廢墟がある、しかし唯だ石材の狼籍たるのみである、私はやがて小高い土坡を度つて池塘の邊に出た、水を掩ひ藏した満池の荇萍のうち、赭色の大きな石のあるを見た、私達が自働車を降りた時、怪しむべし石は徐かに搖き出した、双角、水を抽いて満身に黄泥と青萍とを引き懸けて、大きな水牛が現はれ出でたのである。

池塘は五十間四方もあらう、池を圍みて、五級の石磴寬やかに水に入る、池の中央には石を登んだ小嶼があり、その上に太き數圍の榕樹に似たる老木であつて、露根狼籍、うちに石龜を抱いてゐる、石蛇あり、石龜を繞つて盤旋し、口を開いて水を吐く、今は涓涓の聲も絶へてゐる、ここは耶輪陀羅城にゐた當時の王が、後宮の美姫と共に水嬉の宴を張つた處であるといふ、池の邊に、黄金色の、五瓣を成す小さき花の簇がり咲く大木があつて、幽香細々として人を吹く、その一枝を折り取つて齋らし歸り、ホテルの人に訊いて見たが、その名を知るものがなかつた。

私はホテルを指して車を回した、深林人なく、唯だ鳩の啼くのを聞くのみであつた、路はやがてアンコール、ワットを圍める濠の畔に出た、路の傍の草の中に數頭の水牛が、日盛りに背を晒

らして睡つてゐる、牛の背には鷺が群れてゐる、牛は機を忘れて睡り、鷺も亦た機を忘れて遊ぶのである、ホテルの人にこの話をしたら、牛と鷺とは仲が善い、鷺が牛の背上に集るのは、その毛間に集る半風子を啄み食ふ爲めであるといふ、亦た面白し。

私はホテルに還つて、遅い午睡を試む、覺じれば夕陽、したゝか水浴を試みた後、ベランダの藤椅子に靠つて、近く藻の花咲く濠を隔て、夕靄のうちにアンコール、ワットの寶塔を仰ぎ觀た、亂蟬の聲やうやく歇めば、更に蝸が啼き出した、本邦の蝸よりは、その音高くして且つ長い、遽かに聞けば汽笛のやうに思はれる、暮れ残る濠にはカイツブリの啼く音も淋しく聞え、少年の小舟を盪かして、薄明りの下に藻を刈るのも見える。

珍らしや日本の民謡

夜の食事を終つてから、私達は再びベランダに出で、爽涼たる風露の中に相語つた、ふと喫烟室の彼方から蓄音機の樂音が聞えて來た。

私は耳を欹て、靜かにその歌曲を聴いた、歌曲は正しく我が日本の物であつた、私はS氏の

肩を敲いて、君はあの歌曲が母國のものであることを知らないかと云つた、S氏は、余も亦た先刻から、日本の歌曲ではないかと訝りつゝあつたところであつたといふ。

この時、東蒲寨人のボーイは欣々としてベランダに立ち現はれて、私の袖を控いて、喫煙室の方を指さしつゝ來り聴けといふ意を示めした、私達はそこに入つた。

米國の女學生、その家庭教師、及び佛人、支那人達は、この家の支配人と共に卓上のビクター蓄音機を圍んで、音譜の圓盤をかけてゐた、歌曲は正しく母國の民謡、雲州美保關で歌はれる關の五本松の歌曲であつた。

『それは私の國の民謡です、關の五本松の歌曲です』と、私は我れ知らずブローケン、エンゲリツシュで叫んだ。

旅館の支配人は點頭して『さうです、これは貴下のお國の民謡です』と笑つて答へた。

斯る邊陲の異域にあつて、母國の民謡を聴く、私の驚喜は想ふべしである、私はS氏を介して、私の歡喜と感謝とを支配人に告げた。

支配人は、斯ういつた、私は今日端なくも日本文士なる老紳士が、千里の路を遠しとせずし

てこのアンコールワットの廢墟を來り訪づれたのを迎へて、感激に堪へない、ホテルに日本の國歌君が代の音譜を收めた圓盤がある、私は君が代を蓄音機にかけて、他の相容なる淑女紳士と共に、日本老紳士の清健と多幸とを祝福しやうと提議して、その圓盤を物色したが、終にこれを搜り得なかつた、唯だ獨り日本民謡を收めたこの圓盤を見出した、そこで今まこれを蓄音機にかけて、日本國の隆運と、老紳士の康壽とを祝福してゐるところであるといつた。

この言葉を聞いた私は、感激して言ひ現はすべき言葉を知らなかつた、私は不動の姿勢を執つて、坐中の淑女紳士に對し、日本語で唯一言、難有うと挨拶した、關の五本松は三たびその歌曲を繰り返へした、坐客は皆な拍手して喝采した。

私は東蒲寨ボーイの見せてくれたアンコール、ワットやトムの写真から、十數枚を選び出してこれを購ふた後、私の部屋へ退いた、一陶の葡萄酒に美酔した私は、綾紗の蚊帳を潜ると間もなく、酣睡してしまつた。

夜半に及んで、私は悪夢にをそはれて驚き醒めた、全身の關節に烈しい疼痛を覚え、淋漓たる盗汗は浴衣を沾ほしてゐた、掌を額に當てゝ見ると、體温も昂まり騰つてゐる、岑々として頭痛

がする、さては到頭やられたなど私は思った、枕頭の電燈を凝視すると、火に黄なる暈の懸るのを見た、私は靜かに身を横へて平旦の來るを俟つてゐた。

曉色、縹く窓幃を染めて、けふも亦た晴れて暑き日であつた、扉を叩いてS氏は私の部屋を訪づれた、私の違和を告ぐるを聞いたS氏はデング熱にやられたのであらうといつた、熱國の旅行者の一度は必ずこの洗禮を受けねばならぬものである、私は勉強して衣裳を着けた、連りに眩暈を覺えて、食事を攝るに堪へない、僅に一椀の珈琲を盡したのみである。

六時、病める身を自動車に載せられて旅館の門を出た、車輪の石に觸るゝたびに、全身顛搖し、關節の疼痛は錐でもまれるやうである、途、シムレアップの村に入り、寫眞師の門前に車を停めて、森本右近太夫の題名撮影の結果を見れば、模糊として字體を辨することさへ出來ないのであつた、僅かに中央大塔の紀念撮影のみを得て又た自動車を急がした。

心細きは旅中の病氣

亭午、コンボントムのバンガロホテルに入りて憩ひ、私は唯だ輕きスープのみを攝つた、邪熱

昂騰、三十九度にも上つたらしい、黄昏、川を渡つてブノムベンのグランドホテルに入る、直ちに臥床に上り、粥を作らしめて房中に攝る、行李を搜りて基那を得、頓服して臥す、盜汗全身に冷ねく、終夜、反側して曉に達した。

翌朝、夙く旅館を出た、病める身の、一刻も早く柴棍に歸るべく王宮見物は残り惜しくも割愛し、支那商店に入りて孔雀とベリカンの羽をもて作りなした象牙柄の團扇數柄を購ひ得て、又た自動車を走らす、午熱堪へがたし、一時頃、唯ある淋しき數家村のバンガロホテルに入りて午餐を攝る。

ホテルとは名のみにて、湫陋なる東蒲寨家屋を改造した唯だ三箇の部屋を有する草屋根のものであつた、八疊ぐらゐの中央の部屋が食堂、その左右が客房、別に主人の居間の窄い部屋があるのみ、庖厨は後庭の小屋がそれである、主人は老いたる佛蘭西人、給仕はその妻らしい東蒲寨婦人、政廳の補助を得て、往來の官吏と外人旅客とを宿すべく經營してゐる。

食堂には土木技師らしい若い二人の佛蘭西人のみであつた、昨日から碌に食事をしなかつたので私は饑渴と疲勞とに堪へられなかつた、私は勉めて食事を攝つた、舌苔厚く封じて蠟を嚼むでゐる

るやうである、大きなコップで曹達水の幾杯を鯨飲した、老主人と二人の技師とは、虎の肉味につ

いて連りに議論を闘はしてゐた、若い技師は中年の技師に向つて、貴下は虎の肉を食べたことがあるかと訊く、食べた事はあるが、それは餘り美味なものではなかつたと答へる、僕は數日前、土人が射殺した虎の肉を頒けて貰つて食べたが、思つたほど不味なものではなかつたと若い技師はいふ、中年の技師は老主人に向つて、不味なものではなかつたなら、一番、晚餐のメニューのうちに、虎の焼肉でも加へたまへど揶揄しつゝ哄笑する、私は竊笑するS氏に質して、その問答の仔細を知つた、私はS氏の通譯で、朝鮮馬山浦の知友から贈つてくれた虎肉を鋤焼きにして食べたとき、元山から贈られた豹の肉をも食べたことを語り、虎肉と豹肉、共に異臭がある、唯だ生薑はこの臭氣を消す、バタの鋤焼、尤も

虎大ため留射で落村の棍柴



妙、しかし豹の肉は虎肉に較べてその味や、劣る由を語つた、三人眼を睜つて私の顔を凝視して、野蠻な男があつたものだといふ表情をした。

食後、私は主人の部屋を借りて、臥榻に身を横へた、主人は懇切に私の病を視てくれた、私は基那を服して一時間ばかりの午睡を取つた。

黄昏、私は柴棍の旅館に歸つた、旅館の主人は直ぐさま醫士を喚んでくれた、正しくデング熱であつた、邪熱昂騰、關節に堪へがたい疼痛を感じて後、發疹、全身に互りて紅癩癩のやうになる、下劑を呑み、流動食を攝り、藥は基那の一方のみであると、夜に入つて、果然、全身に紅疹を見た、千里の異境にあつて、言語不通の土人の看護の下に苦惱數日に互る、旅情陰悽、覺えず涙を隕す。

満身の紅疹やうやく銷し、邪熱も亦た退いたのは一七日の後であつた、やがて私は元の頑健の體軀となつた、私は既に熱帶國に於いてその洗禮を受け了した、蠻烟瘴雨、我に於いて何かあらむ。

大南國の事ごも

伏波將軍と阿倍仲麿

支那の文献に、南海の名の見えそめたのは先秦の時代であつた、その時代の南越王趙陀の領土は安南の北邊に及んでゐたらしい、秦亡びて南越國は漢に合併されてしまつた、後漢の世となつて、伏波將軍馬援は安南に遠征し、その版籍を収めて銅柱を立て、凱旋したといふ事が歴史に載つてゐる、それ以來、安南は支那の一部となり、三國の時には南朝に屬し、隋唐の時にはその領土となつた。

唐の時、彼の朝衡阿倍仲麿が、日本に歸る途中の海上で颶風に逢つて安南に漂着した、その漂着した處は、順化府に近い廣南であつたと考證される、仲麿は一たび京洛に還つたが、安南に反亂が起つたので、安南都督となつて遠征し、反亂を戡定して太羅の都督府に駐在した、當時の交趾邊は、林邑國であつた、聖武天皇の時に、林邑の佛哲が舞樂を傳へたことがある、林邑は後の

占城國で、輓近まで存在してゐた國である。

東蒲塞國は、支那の所謂眞臘國であることは前に説いた、今は叢爾たる小國であるが、國運の隆昌であつた時代には、暹羅、緬甸までをその版圖の中に包含したこともあつた、唐時代には、今の佛領印度支那の北部は支那の領土、南は林邑後の占城と眞臘國の版圖であつた、その後占城を併せて國號を大越といひ、始めて獨立國となつた、黎氏、李氏、陳氏を歴て黎氏となり、現今は阮氏その國主となり、國を大南と號し、順化を首都としてそこに王城がある。

八幡船以來、朱印船に至る時代には、安南との交通は自在であつた、徳川氏の初期には本邦人の來り住するもの順化府のみでも數百人に達したといふ事である、順化は佛蘭西人の所謂フーエである、その殷賑なる街衢のうちに日本橋通りと稱する町の名が今も尙ほ残つてゐる、私が柴棍にゐた時、三井物産のM氏に招かれて、數々その私邸で會食した、或る夕の食卓で、M氏夫人は私に順化に於ける最近の出來事を語つた。

順化に邦人の經營する旅館がある、主人は老媪、元は娘子軍の一員で、今でも鬚眉男兒を股掌の上に弄殺する潤達曠快なる女丈夫である、多く支那の志士と交はる、唐繼堯氏の如きは、順化

に来る毎にその家に信宿し、談論日を互るといふ、一昨年春、偶ま來り宿した邦人があつた、身の長け六尺に近く、眉目清秀、殊に背長く裂け眼睛に異彩ある雄貌は、覺えず人をして畏服せしむる、主媼はその風采に心酔して懇ろに待遇した、一日、その浴室に入つたところを、扉の隙間から覗いて見ると、三丈もあらうと思はるゝ白縮緬の兵兒帶を、太肚に巻いてゐた、浴罷んで浴衣を披いて食事の膳に對つた時、主媼はその故を怪しみ問ふた、その人は聲を潜めて私かに告げていふ、まこと我は昔の南越王の後裔である、家に傳ふる秘文を讀んでその陵墓に珍寶の埋藏されてあるのを知つた、地圖を按じてその瑩域の在る地點をも檢べて置いた、我のこの地に來たのはその陵墓を發掘する爲めで、腹に捲いてある白縮緬の兵兒帶は、その墓坎の窆石を縛してこれを揚ぐるのに用ゆるのであるといつた。

幾日を歴た或る夜、その美丈夫は姿を晦ました、越へて一日、佛國官憲から急使が旅館の老婦を喚びに來た、公所に行つて見ると、美丈夫は故王の陵墓を發掘してゐたところを捕へられたのであつた、墓坎の窆石、尋常の人の力では、容易に動かし移しがたいのを、彼は一人の力をもてこれを抱き起したといふ、彼は牢獄の人となつた、主媼は毎日彼にくさくさの料理を差入れた、

一ヶ月の後、彼は終に牢死した、主媼はその遺骸を乞ひ受けて茶毘に附し、懇ろに吊祭してその事を母國の彼の妻女に告げた、妻女の順化に來つて、遺骨を携へ還つたのは、その事あつてから半歳の後の事であつたといふ。

M氏夫人は、偶まM氏と順化に旅してその旅館に宿し、主媼から親しくその話を聞いたのである、彼は杉山敬之といふ人であると、その姓名までも記憶してゐた。

久しく安南に在つて此事を知れるT氏は私に語る、彼は千葉の辯護士で、誇大妄想狂の人である、順化へ來た時にも、人力車の上から日本紙幣を撒き散らして快を叫んだ事があつたといふ、夫人のいふところ真か、T氏の説くところ亦た真か、私はこれを知らない、しかしこの一事件は、一時頗る喧傳されたといふことである。

安南の洋岸附近の都市では、往々にして日本武器を發掘する、彼の東蒲寨のアンコール、ワツト附近でも、數年前、日本刀の鐵鏢を掘り出したことがあつた、銘に國廣とあり、今は河内の東洋學院に珍藏されてある、國廣は桃山時代から徳川の初期に互つた鐔師の名である、祇園精舎の見取圖を書いた島野兼了と同時代であることは、歴史上、頗る面白い事である、更に又たアンコ

一ル、ワツトの大石柱に題名を留めた森本右近太夫が、若し島野氏の護衛として、隨行したのではないか不知と考へて見ると、是も亦た面白い事である、介冑の家に生れた森本氏は、確かに武術堪能の士であつたに違ひない、護衛として隨行したとしたら極めて首肯され得る事である、因みに記す、日本人名辭書には、森本儀太夫の名は正虎とある、しかしその子右近太夫の名は一房である、右近太夫の子で、後に熊本の細川侯の家臣となつたものの名は一瑞である、カヅヨシと訓むのであらう、この一瑞に肥後國志の著がある、一の字は家の名乗であるべく思はれる、果して然らば、森本儀太夫も、亦た石柱の題名中にある一吉といふのがその名乗であると思ふ。

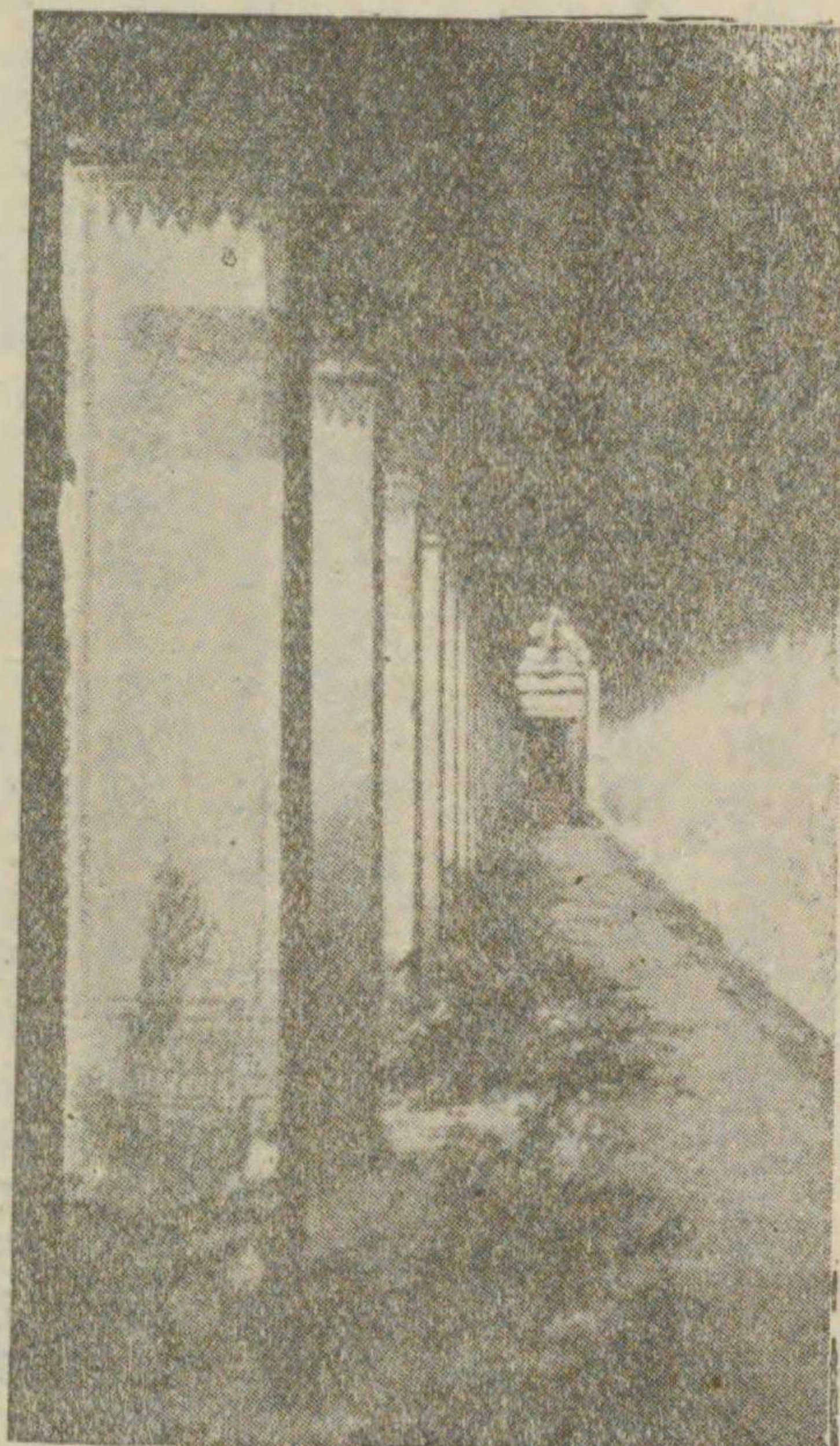
角屋七郎兵衛の事

慶長から元和、寛永の初年にかけて、我が海客の、安南地方に居留してゐたものは殊に多數に上つてゐた、鎖國令が發布されて以來、それ等の人々は母國に還へるの途を絶たれて、いづれも皆な望郷の鬼となつたのである。

私は本篇の初めに於いて、菩提寺に掲ぐる匾額を幸便に托して肥前平戸の知人の許へ注文して來た人のあることを記した、實に鎖國令の爲めに郷里に還へるべき望を失ひ、老いて寂しく安南の土となつた角屋七郎兵衛その人である。七郎兵衛は當時我が海客のうちの雄であつた、國を逐はれた人ながら、廣い邸宅に住み多くの婢僕をも使つてゐて、郷紳の人々とも親しく交際してゐたのである、七郎兵衛はやがてその松本の姓を棄て、魏氏と稱して安南の人となり、阮氏の女その名を隅といへるを納れて夫人となし、一男を挙げ、更に黎氏の女某を第二夫人として二兒を挙げた、阮氏は安南の貴流であり、黎氏も亦た王室と關係あるものであつた、七郎兵衛は既に安南の人となつたが、花晨月夕、思を東の空に馳せて、故郷の人のなつかしく、老の涙の乾くひまもなく、茲に淨財を喜捨して、松本寺なる精舎を建立して、父母の冥福を祈るの菩提所としたのである、寺號の松本は、その姓に由つて名づけたのであつた、その平戸の親戚に寄せた手紙を見ると、額の縦一尺六寸三分、横、二尺七寸七分、これに縁を取り、上下の縁には唐草模様、左右の縁には龍を彫り、彫物はいづれも金箔にて念入に作らせられたく、板の色は紺青、文字は金字とし、松本寺の三字を彫らせられたとある。

蘭人の筆に成れる東京紀行には、風貌骨格、日本人に相違なき住民にしばらく會ひたることを記

してゐる、或る村落には村を擧げて皆な日本人かと思はるゝ人のみにて、絶へて他村と嫁婚を通ぜず、祖先は日本國から渡來したといふことは知つてゐるが、最早や母國の語は忘れてゐた、村の人々は、日本肥前で製作さるゝものに彷彿たる藍色の陶器を造るの特許を受けて、數箇所窯を



廊廻のトツヲルーコンア

設け、盛んにこれを製造してゐる、陶器の型式の古雅にして釉彩の鮮麗なるは、正しく日本陶器と少しも異なるどころなく、好事の人の愛翫するところとなつてゐたといふ、又た音楽に伴れて舞踏する女子の群をも見たことがある、その樂人は純然たる日本人の風貌であつたと記されてある。徳川氏は、商業上の關係をのみ厚くして、徒らに事端の發生するを避くるの政策を採り、海外諸國に居留する者を放棄して、若しその國の禁令を侵す

ものあらば、官憲の心のまんに、これを處罰なされても毫頭異存はないなどと言ひ送つて、日本商人の生命財産を擧げて、一にこれを、その在留國官憲の支配に委するに至つたのである。



彫に柱石のルーコンア 様模草唐るたれさ刻

萬治年間、安南の魏九官といふもの、當時同國に蒙塵せる明の桂王の爲めに、軍資を我國に借るべく長崎に來り、遙かに書を水戸の朱舜水のもとに送りてその斡旋を依頼した、九官は實に角屋七郎兵衛の子で、母は阮氏である、魏九官はその事の成就しがたいと見て、やがて舜水に乞ふて日本に歸化してしまつた、異國の土となつてしまつたその父は、冥々のうちにその子を導いて再び日本

に還へることを得せしめたのである。

加藤肥州の朱印船

私は、前に加藤肥州の朱印船の事を述べた、當時、海外貿易に従事してゐた九州大名には、清正を除いて、薩州の島津陸奥守忠恒、肥前島原の有島修理晴信、平戸の松浦法印鎮信、五島の五島淡路守玄雅、佐賀の鍋島加賀守直茂、豊前の細川越中守忠興の諸侯があつた。

異國御朱印帳の西洋の部に、慶長十二年丁未八月四日、清正の受けた朱印の事が載つてゐる、正しく清正が受けた最初のものである。

本上有状、加藤肥後守被申請、普界一惠之、服部治郎左工門(加内藤)請取也

と記されてある文の初めに本上有状といふのは、當時の外務大臣たる老中本多上野介正純の、朱印允可の書状が筆者の許へ到達してゐるといふことである、朱印状の筆冊は豊光寺承兌がこれを書いてゐる、承兌は外交上の文書を管掌してゐたのである、大関が明使を伏見に引見して國書を受けた時、汝を封じて日本國王となすの辭句があつたので、嚇怒してその封冊を裂いた時、股栗して生色のなかつたのは、石田小西の輩の外に、僧承兌があつた、承兌は外交文書の事を管掌して

ゐるのである、そこで又た朱印状までを管掌することゝなつたのであらう、朱印状の筆者は、本多上野介の允可状を得てから、これを認むるのが例となつてゐたのである、普海といふのは、普ねく世界に流通する貨幣の隠語である、普海一とは銀一枚の事である、朱印状を請乞する當人か

面壁の廊廻ルーコンア
圖闘戦るたれさ彫浮に



ら、その朱印状の筆者に對して、一枚銀を贈つて謝意を表することは當時の恒例であつたといふ、即ち朱印状を請乞した加藤肥後守の家臣服部治郎左衛門が、肥後守の使者となつて、承兌の官邸に往き、朱印状を受け取つたといふことを記録したものである。

當時媽港や廣東や、交趾地方の商船への朱印状には、西洋唐人へ遣はさると書いてある、又た彼の地から來る文書の漢譯には西域國と記されたものが多い、西域國は、西洋に對して葡萄牙をいふ稱呼である、西洋は印度なる臥亞の葡萄牙政廳の管内、主として馬刺加以西の事をいつたもの

であるが、阿媽港地方をも、亦た概括して西洋といつたもので、西洋唐人とは阿媽港の葡萄牙人を爾か呼んだものである。

婆塔卒面佛大のムトルーコンア



慶長十四年の秋、幕府は九州の列侯が競ふて大船を建造するのを疑ひ、五百石積以上の船舶を淡路の由良、岩屋の海に廻漕させ、九鬼長門守守隆に命じて、悉くこれを没収して破却してしま

に、快速力を出さうとしたものであらうと思はれる。
慶長十四年の秋、幕府は九州の列侯が競ふて大船を建造するのを疑ひ、五百石積以上の船舶を淡路の由良、岩屋の海に廻漕させ、九鬼長門守守隆に命じて、悉くこれを没収して破却してしまつた、等閑にこれを捨て置けば、やがてその強大を致して、異日、天下に事あらん時、九州の艦、船艦相啣んで東上し、幕府の力善くこれを拒ぐことが出来なからうといふ杞憂を懐いたからであるといふ、私は華府に於ける軍縮會議の協定に由つて、我が精銳の軍艦を破却したこと以上に、惜しみ且つ悲まざるを得ない。

祇園精舎圖と其裏書

島野兼了氏の祇園精舎圖が水戸の彰考館に秘藏されてあることは、前に説いた、圖の大きさは横二尺三寸五分、縦が二尺二寸二分の紙に、定木に由つて墨書したものである、建物はすべて淡墨をもつてし、周圍の濠は藍をもつて彩色してある、先づその圖の肩書には祇園精舎と記されて、次の行には一字低く、「舎衛國ノ大臣須達長者波斯匿王ノ王子祇陀太子游戲ノ地祇陀園ヲ乞ヒ

其地八十餘頃ニ黄金ヲ布滿テ太子ニ奉リ精舎ヲ立ルト云、塵添瑤囊鈔卷十六佛閣僧居寺ノ條ニ見ユ」とある、更に又た右の上端には「佛誕生所エ行ク」と記され、その下端には、「此所ヨリ檀特山エノ道」と記し、そこに瓢箪形のうちに彰考館と篆字で彫つた印及び此君堂藏本とこれも篆字で



優女の宮王ンベムノブ

彫つた長方形の印を捺してある、左方の下邊には「千間四方皆石ニテ組立申候」と記された、處々に蠹魚の蝕んだ痕を留めてゐる。
祇園精舎圖の紙背には、その由來書が貼附されてある、厚い西の内とも思はれる書簡用の紙に書かれたものである。その文に曰ふ。

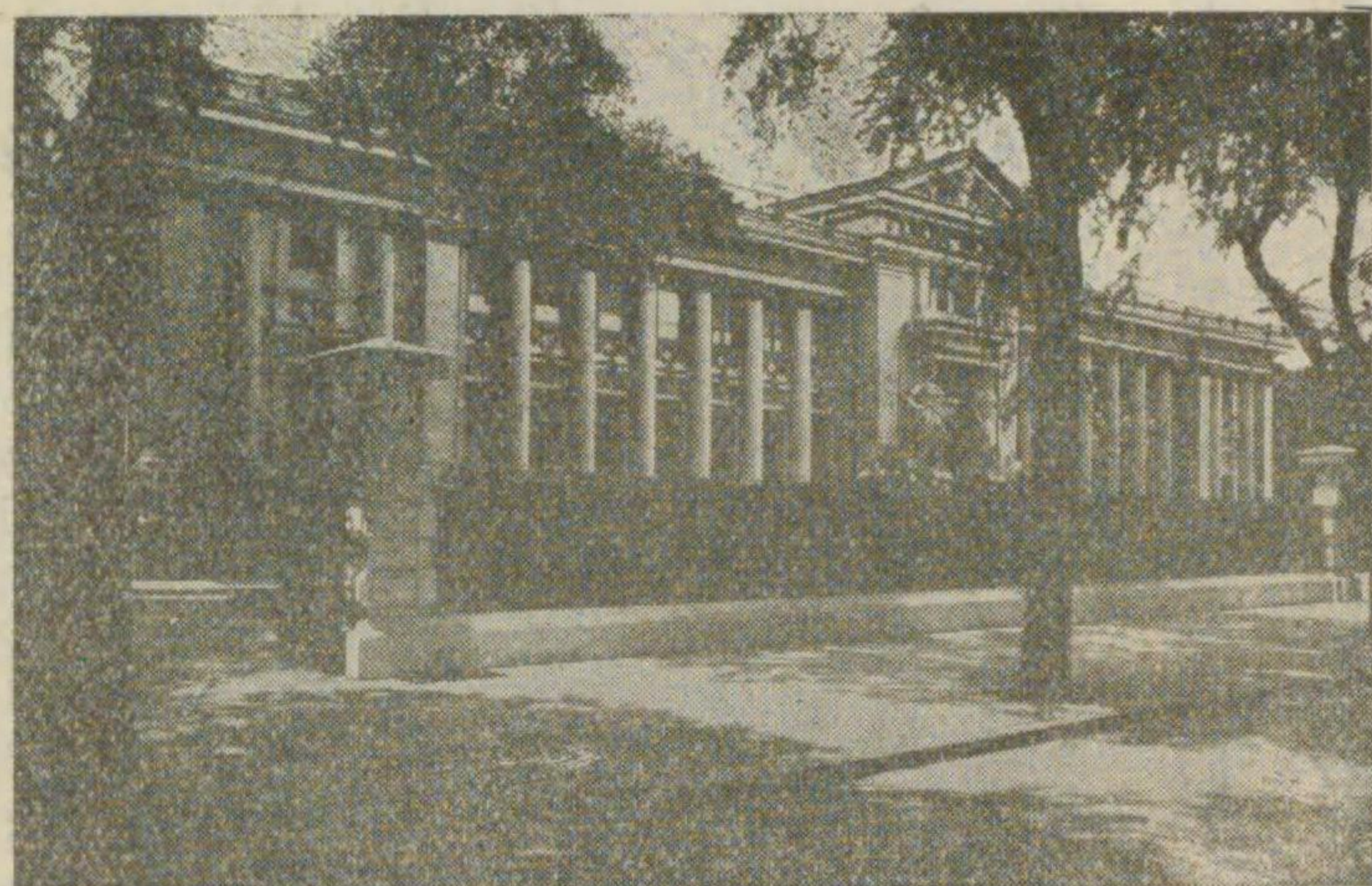
大猷院様御代長崎大通辭島野兼了を被爲召被仰渡には中天竺摩伽多國祇園精舎え罷越致見分罷歸可申旨被仰渡兼了奉畏候段御請申上候又被仰には昔より代々之三藏法師天竺へ渡り候へ

ども渡儀難叶多く相果申候如何其方は可參哉と御尋に付兼了申上候は代々の三藏法師共不了簡に付多く相果申候其故は大唐より天竺迄之内幾千萬里と申儀難相知或は於道惡獸にとられ或は盜賊に逢ひ多く禍に及申候凡日本道百里餘歩行いたし一切人家無御座候依之相果申候兼了罷越候義は阿蘭陀船に乗船仕罷越候て天竺は不及申あらゆる世界を廻り候ても少も氣遣無御座候旨申上候其年阿蘭陀舟に乗船仕中天竺へ罷越祇園精舎に至日本之寸尺を以て繪圖いたし指上候旨右の序に日本之東海々上三千里先に大國有之候是は日本へ可附國と存石碑を建日本國中と印罷歸申候

その次に漢文で左のごときことが記されてある、今ま是を假名交りに書き改めて見ると、斯うである。

正徳五年己未、予が祖父忠義、台命を奉じて長崎に在るの日、忠義その土人某氏（譯士であるかその名を忘る）に問ふて曰く、嘗て聞く昔大猷院君、大譯士島野兼了なる者に命じて天竺に渡り祇園精舎を檢閲せしむといふ、實か否かと、答へて曰く實なり、即ちその模寫するところの繪圖及び實地を示す、忠義傳寫して以て家藏となすものはなり

柴棍の佛國政廳



安永元年壬辰十一月廿五日
藤原忠寄
と書いてある。

この裏書に由つて見ると、島野兼了氏の祇園精舎の圖は、島野氏自身の原圖ではなく、長崎奉行なる藤原忠義といふ人が傳寫したものが、やがて水戸家の彰考館に入つたものである、三代將軍の時に長崎の大通辭に島野氏といふ人が、果して台命を奉じて天竺に渡つたことは事實であらうか、渡天して寫し來つたといふその原圖は、今現に存在してゐるであらうか、更に又たその模寫圖が、原圖と些しも違はないものであらうか、この三箇の問題が解決されない間は、模寫圖の價值も亦た甚だ疑しいものになる。

東洋建築の權威伊東忠太博士は、島野氏の事に就いて熱心に調査を遂げたが、一つもその要領

を得なかつたといふ、第一島野家の實在に就いては些の手掛もなかつたといふ、奉行の藤原忠寄及び忠義の消息に就いても、的確にその人が存在してゐたかが分らなかつたといふことである、この圖の因縁に就いて、具體的に説明すべき材料が他の方面にもないが故に、島野氏が踏査し實寫した原圖を傳寫したといふ忠寄氏の裏書を信するより外に途がないのである、伊東博士は、河内の東洋學院に於いて、單に各種の寫眞及び實測圖とに依つて、島野氏の實測圖と、現在のアンコール、ワットとが符節を合はしたやうに、その規模が些しも違がつてゐないから、正しくは安南に赴かれた時、障ることあつてアンコール、ワットを往訪することが出来なかつたと言はれてある、博士にして當時、アンコール、ワットを往訪して、昔日の榮華の蹟を踏査されたなら、正しく島野氏のこの圖がアンコール、ワットの實測圖であることを断定し、建築學上に於ける傳統、型式、手法等に就いて、その蘊蓄を傾瀉するの大論文となつて、大いに幽光を天下に宣揚したであらう、誠に惜しむべき事である。

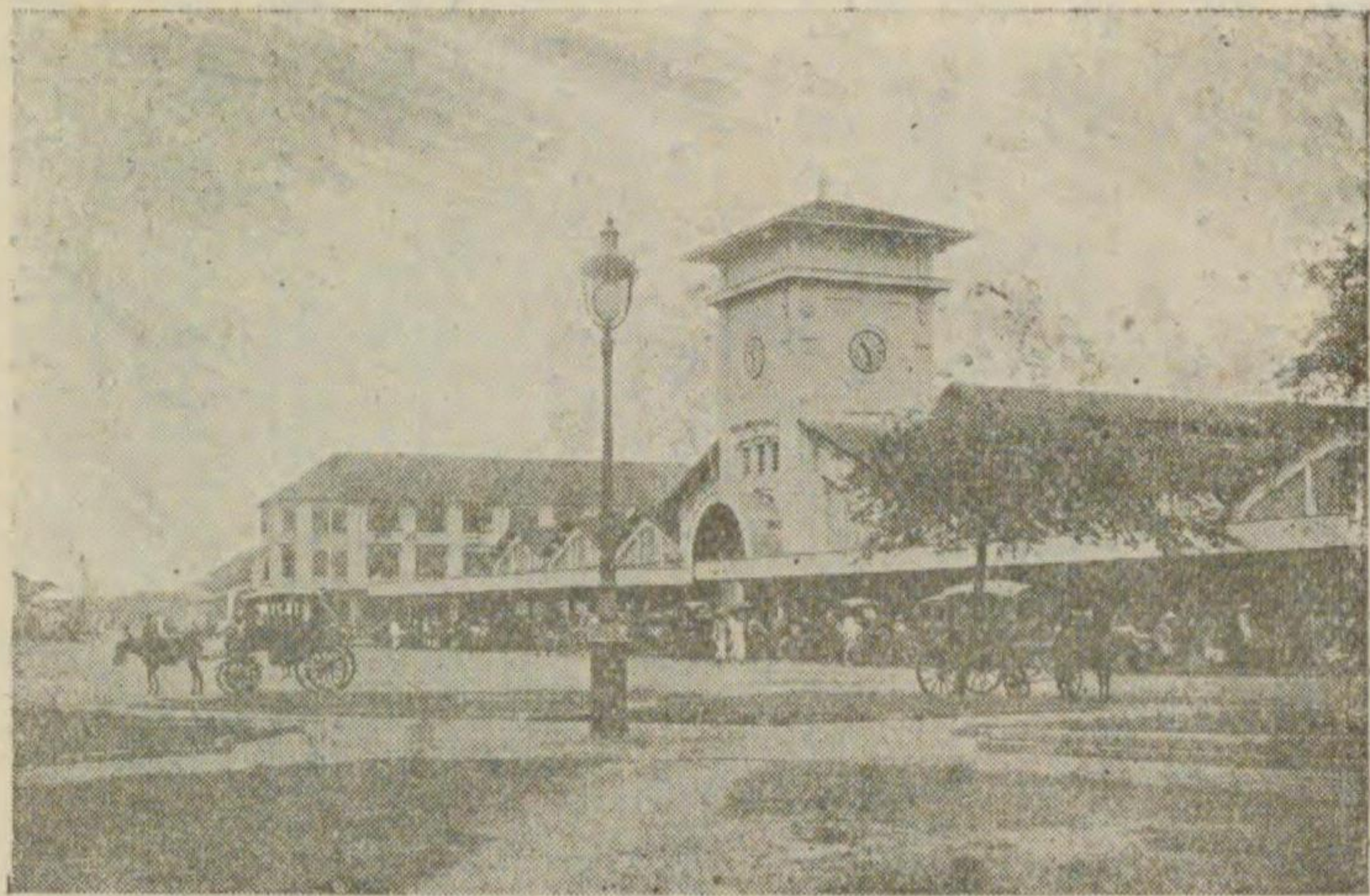
裏書にある日本東海海上三千里先に大國を發見し、日本領の石碑を立て、來たとあるは、ボル

ネオ島、若くはその他の東印度諸島のうちの大島であるらしい。

さらば交趾支那

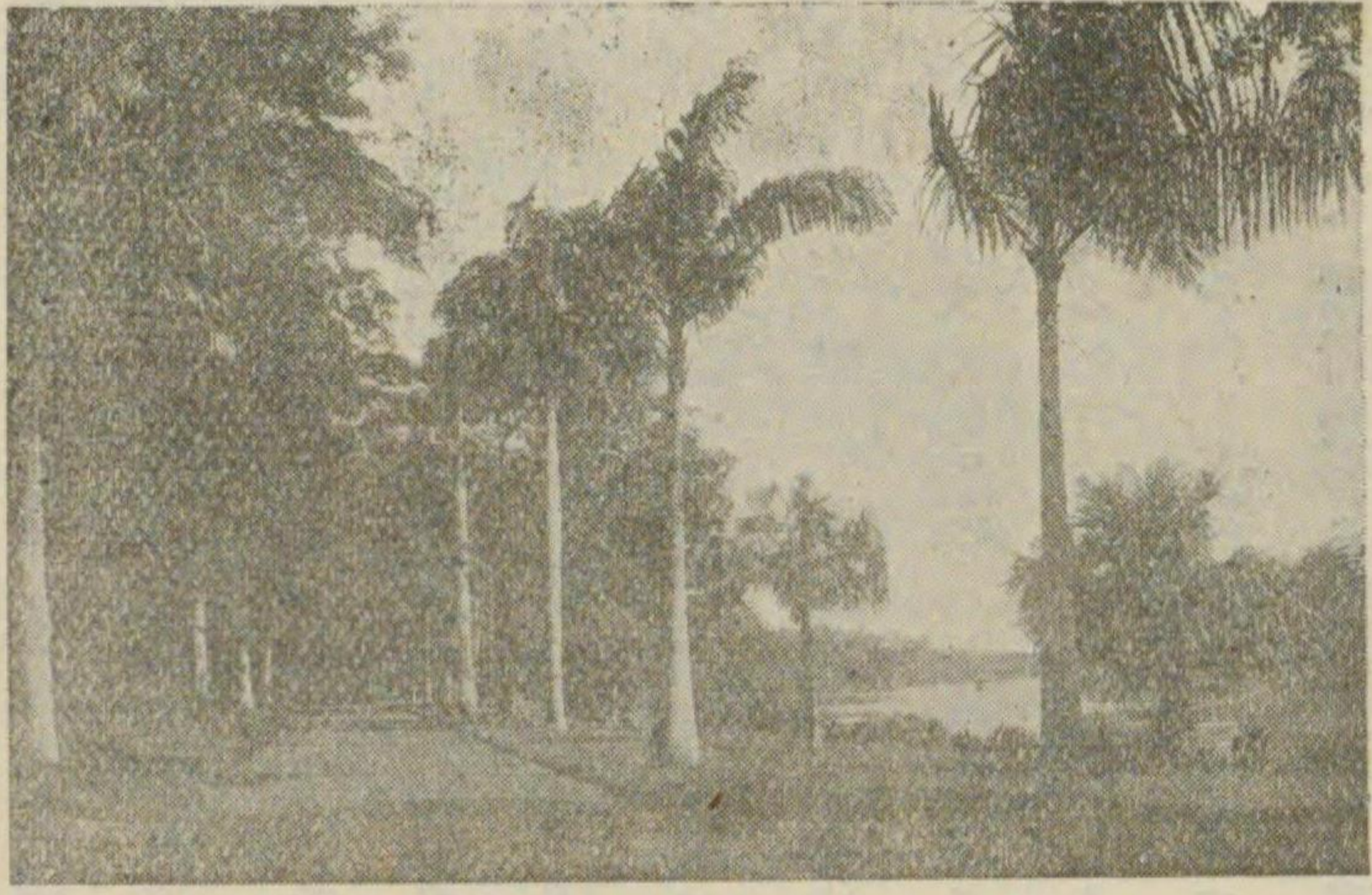
の市場から供給される、朝の六時に店を開き、十時に至つて店を閉ぢる、市場へ買物に赴く人達

柴棍の公設市場



柴棍の私の旅館は、路を隔て、シヨロン(提岸)行きの汽車の停車場となつてゐた、停車場とは名ばかりの、窄い板屋がそのホームである、軌道は街路の上に敷設されて、そこに低い木柵すらない、人は儘ま軌道の上を往來してゐる、機關車を動かす燃料に柴薪を用ゐ、盛んに、煤烟を人家の窓に吹きつけるのである、停車場を踰へて行けば廣場となり、そこに大きな公設市場がある、正面には時計臺、時計臺を夾んで左右に數棟の平屋あり、魚肉菜蔬の賣店が並んでゐる、市民日用の食品は、皆なこの市場から供給される、朝の六時に店を開き、十時に至つて店を閉ぢる、市場へ買物に赴く人達

柴棍の植物園



の十中の八九までは婦人連である、良家の細君から、陋巷に棲める土人の御神さんに至るまで、籃を提げて買物に行くのである。毎日朝の四時間の雑沓は非常なものであつた、私は一日、この市場を訪づれて、總ての階級に亘つてその風俗を視ることを得た。安南人の風貌の、我が邦人に肖てゐるのが看取される、鼻は餘り高くはなく、眼の虹彩は黒く、二重臉のものを多く見かける、顔の輪廓も荒々しくはない、婦人などの後姿は、邦人ではないかと思はれるものがある、膚の色こそ邦人に較べては淺黒いが、もし日本の衣裳でも着せたら、日本人と稱しても點頭かれ得るであらうと思はれた。

の間が窄く、その風貌に何處となく猥悍の氣が見える、恐らくは元來の安南人種に馬來若くはチ

交趾支那の人は、鼻が低く、眼がやゝ窩み、眼と眉と

ヤム人の血が雜つたものかと思はれる、交趾支那の藝術は、今でこそ支那系統のものであるが、占城國であつた時代には、正しく印度馬來系のものであつた。

高丘眞如法親王が渡天の途中、猛害の爲めに薨去されたと傳はる老樞國の人は、安南、交趾の人とは、稍や違つた風貌で、東浦寨人を少し優しくしたやうな顔である、タイ人種で暹羅と同種である、その藝術は、暹羅及び緬甸の系統に屬するものであるといふ。

東浦寨人は、クメール種屬で、昔、印度から移住したと稱せられ、その風貌は、安南、交趾、老樞の人とは全く異つてゐる、その眼は深く窩み、眉と眼との間は尤も窄く、鼻低くして鼻翼左右に張り、まともに見れば鼻孔全く露はる、婦人も男子と同様に、髪を短かく剪つてゐるので、遽かに見れば男女の區別のつきかぬることもあるくらゐである。鳶肩豺目とは東浦寨人に對する好き形容詞であると思はれた、しかしその藝術には一種特有の技巧を有つてゐる、アンコール、ワットの大伽藍を造り上げたその子孫である。

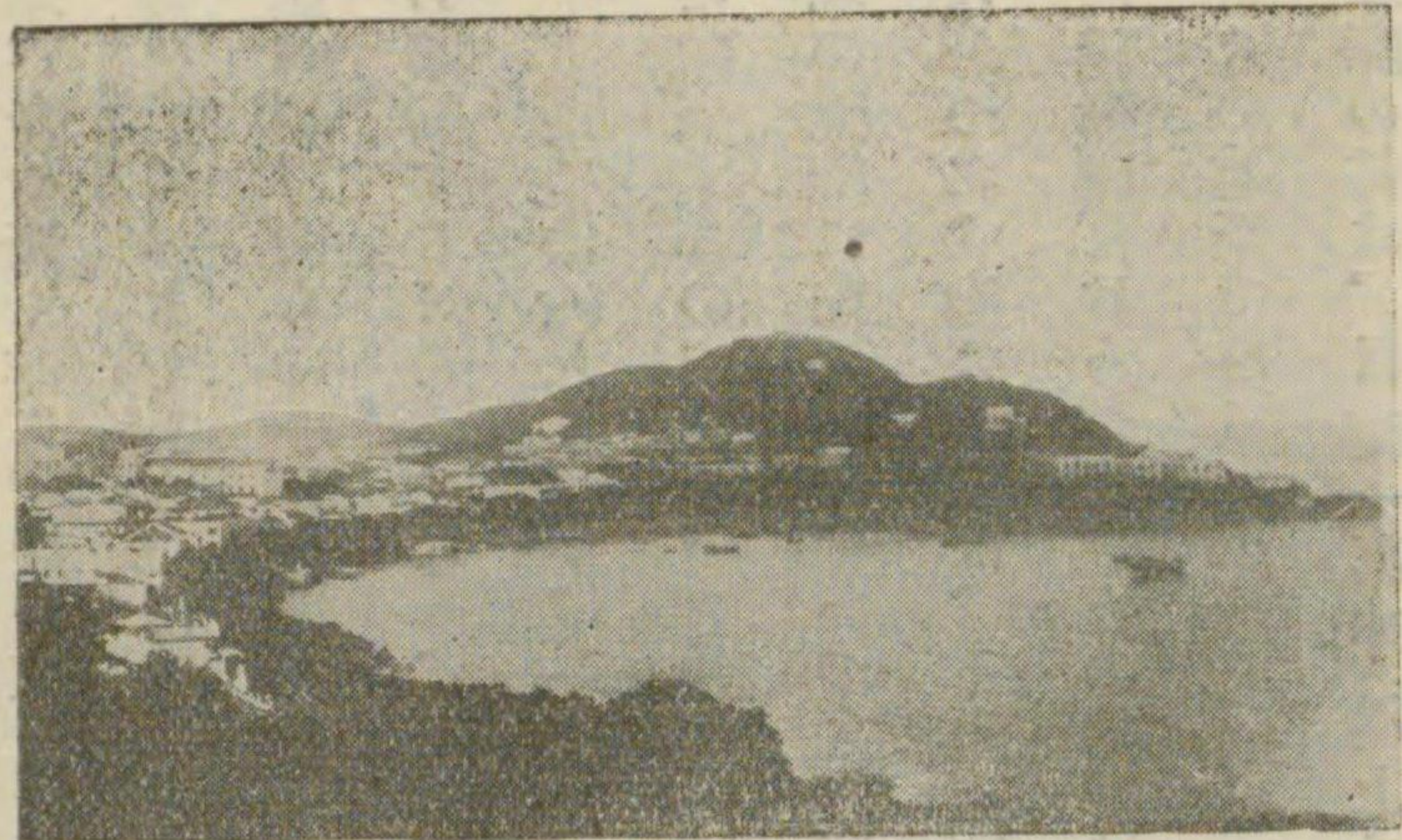
大南皇帝は、維新皇帝と號せらる、袞龍の衣、翠玉の冠、その服裝は明代の服そのまゝである、先帝なる成泰皇帝は、英明の資であつたといふ、その國事の日非なるを慷慨して、竊かに謀る

ところがあつたので、佛蘭西政府の忌諱に觸れ、退位を迫られて今は某處に幽閉されてゐるとい

ふ、ブノムペンにゐる東浦寨のソヴァト王は、私の同地を訪づれた時は、八十八歳の老齡ながら健在してゐられたが、私が日本へ歸へつた夏の眞中、昭和二年八月十一日、終に殞落された。

佛國政廳は、今でも支那人を四等國民として取扱ひ、人頭税を徴收してゐることは安南人等と同様である、邦人は一等國民として歐米人と同じく待遇され、佛蘭西人と協同して事業を興すことも出来る筈になつてゐるが、他に例外の法規があつて、その自由を拮制してゐる、交趾より東浦寨に至る荒茫たる大原野は、それが爲めにいまだ全く開墾されず、唯だ不斷の夏草の生ひ茂げるに委

海山明娟の媽港内灣



し、空しく、鶴、鷺、孔雀、ペリカンの優游自如たる樂土となつてゐるのみである、若し、眉公

河の水を治めて溝渠を通じたなら、そこに涯りなき美哉の沃田が得られるであらう、佛蘭西の國運、今や漸く非に、民を植え土を拓くの資力なしといふならば、應に他國の資を容れてその開發を計るべきである、自から資力を投ずるの力なく、又た外國の資力を借るの勇氣にも缺け、

首鼠兩端、徒らに一日の安を窺ひは誠に遺憾の事である、佛領印度支那の經濟方面は、皆な支那人の壟斷するところとなり、日本からの輸入品は、多くはその手を歴ざるべからざる状態にありて、直接には輸入されず、一旦、香港に揚陸し、その包装を仕直し、支那製品として、始めて佛領に舶來するのである。その商業は、鎖國時代に比較して更に不振の状態であるといふ。

私の柴棍に在るの日、いつも夕刻より政廳前なる廣場にある美しい森林の中を散歩しないことはなかつた、總督政廳は、その玄關の兩方に女神の像あつて、列柱、麻のごとく左右に並び、流石は美術國だけあつて、その結構は、見るからに垢抜けのした看る人をして覺えず心醉せしむるに足るの建築である。

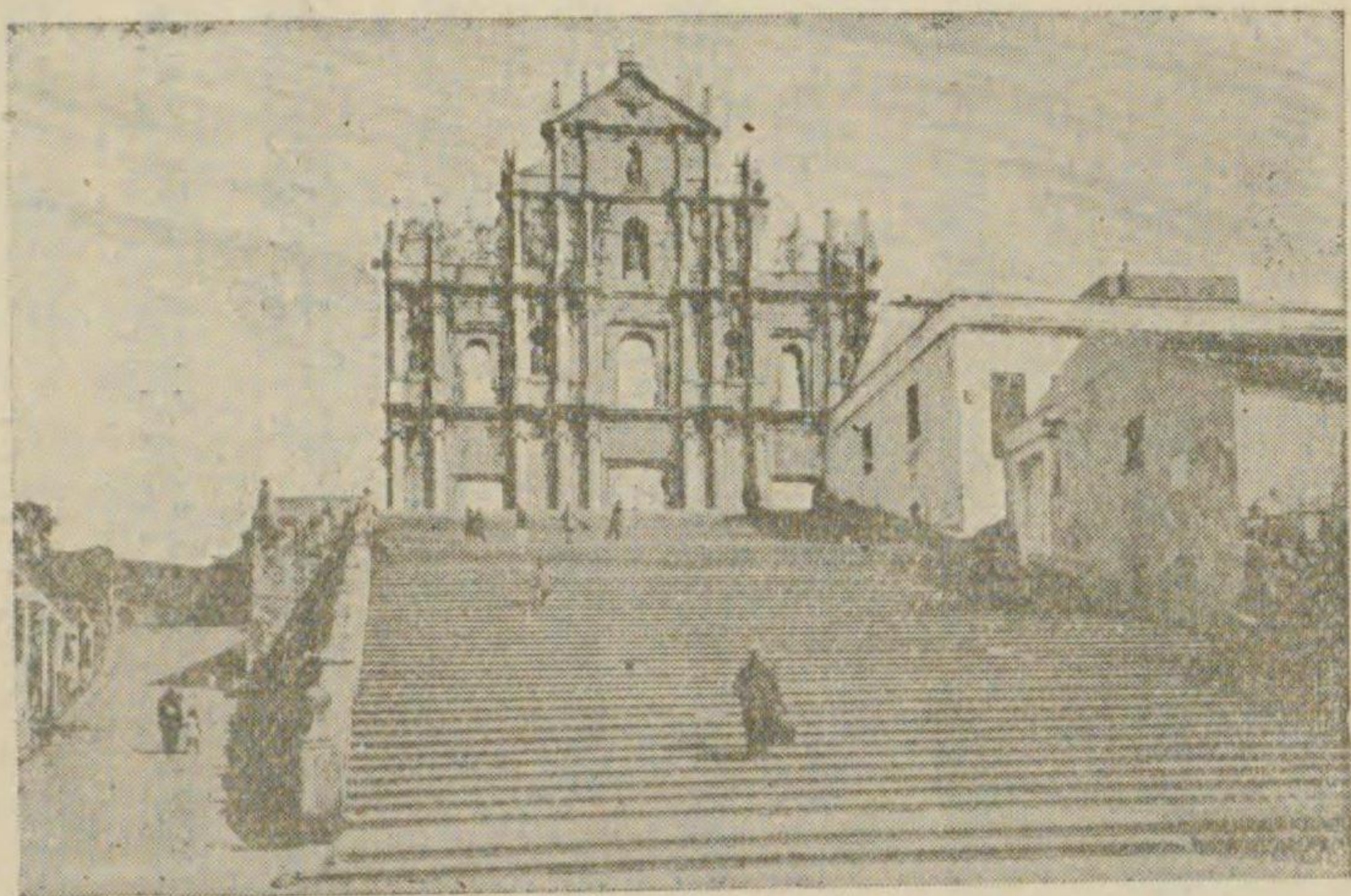
政廳の前は、目測一萬坪以上と思はるゝ廣場で、そこには熱國の喬木が、大道を夾んで規則正しく、列植され、合抱の直幹高く天に參はり、毛氈を展べたやうな芝生、天鷲絨を披いたやう

な青苔の上に、その清蔭を布いてゐる、月の好い宵などは、漫天の清光、滿地の露影、月華散落

して大地にうつる樹の影は、平湖の上に荇萍の風に随つて浮動することく、其林間の細道を逍遙する人をして、覺えず更の闌くるまで歸ることを忘れしめるのであつた。

植物園への散策も、亦た私には快心事であつた、園には人車に乗りて儘ま入り観ることが許されてある、虎、豹、それ等の猛獸は、いづれも野生の状態そのまゝに築造された栖處に放置され、象の如きは、何等の拮束をも受けず、自在に廣き獸園内に遊んでゐる、但しその牙のみは、人を傷くることある虞あれば、皆な根元から切断されてある。但し虎といひ豹といひ、その毛に光澤も

媽 港 の 三 巴 門



なく、しかも甚だ疎鬆であることは、これを我が朝鮮のものゝ、文斑、繪くがごとく、鮮明にし

て華麗なるには遠く及ばざるものであると思つた。

園後は、眉公河の支流に沿ふてゐる、樹木鬱鬱、殊に二た抱へもある檳榔樹が、道を夾み、水に傍ふて、列ね植えられた芝生の一區のごときは、市聲全く到らず、誠に世迢かに人遠き思ひがするのであつた。

柴棍から再び香港へ

溼汀洋を度つて媽港の遊覽

我が井理紋丸は、はや一切の荷役を終へて、纜を解くべき日がやつて來た。

私は一日、安南料理の饗をうけた、支那料理に似たものである、中に、キャベツの葉の上に絲麵を敷き、芹、紫蘇、ドクダミの葉、胡瓜、葱を刻み載せ、白魚仔に鹽を加へて絞り出した汁をかけ、唐辛などの香料を加へ、攪拌して之を食ふのである、ドクダミの葉を咬むは面白し。

數日を柴棍の旅館に過ごした私は、その溽暑に堪へかねた、眉公河畔に建てられたこの都は、旅客が、東洋の小巴里と稱するほどに、私には久戀の地ではなかつた、眉公河のデルタの上に建てられた市街であるから、瘴氣も多少はあるらしく、私の居た時は、蚊の多きに苦まされた、在留の邦人の顔色の、何れも皆な澤庵色に見えたのは、その風土の爲めであらうと思はれる、若い婦人は著しく爾か見られないが、中年以上の婦人などは、皮膚黄蒼にして萎み且つ皴ばみ、衰容

見るに忍びざるものがある、斯る不衛生の異境にありて、我が第一線に奮闘してゐる我が同胞の勞苦は、誠に同情に堪へない。

夕陽の柴棍市を去つて、私は眉公河心に繫泊してゐる井理紋丸に投じた、私を戴せた端艇は安南婦人が權を執つてゐた、船頭は皆な婦人である、犷悍なる船頭では、私は既に馬刺加で懲りてゐる、前年支那長江の蕪湖の埠頭でも、矢張り惡辣なる船頭に脅かされた事がある、何處の港も船頭だけは婦人であつて欲しいと思ふ。

眉公河の沿岸には、蘆竹茂生して、大船をも藏すほどの原始的景趣である、最初私の來た時は、夜闌に河口に入り、曉に柴棍に達したので、その荒莽たる風光を攬ることが出来なかつたのであつた、黄濁した眉公の巨浸は、緩やかに廣茫たる原野の間を迂餘曲折して、船の行くことは極めて遅い、船は七時間の後、漸くにして河口を出で、大海を東へくと南西の信風に駕しつゝ、走つたのである。

海上にあること四日、私の船は香港に入つた、私はこゝで我が井理紋丸の船長、機關長、事務長諸氏に別れを告げて上陸した、旅館は皇后大路のM旅館であつた、今次の旅中、邦人の經營す

る旅館のうちに就い、この旅館は一番廣大で、一番清潔で、一番設備の整つてゐる旅館であつた。

私は洋風の客室を避けて、茶室まがひに作られた日本風の室を選んで、そこに詩囊を卸した、先づ風呂に飛び込んで、百日に互れる久游の塵垢を一洗し、紺の香高い浴衣の襟を披いて小豆革の褥の上に安坐しつゝ冷めたい麥酒の滿を引く、私は納々として吾が家に還りついたやうな心地がした。

香港の觀光は、既に前度の遊びにこれを盡した筈である、暑さを避けて晝間は閑居して、船載して來た母國の新聞雜誌を識み、倦めば枕に親しんでゐた、夜は出で、繁華の街を散歩する、同宿の客に山口高商の教諭N氏があつた、氏は賜暇を得て南支那を游歴してゐるのである、出發前、私の小著新入蜀記を讀んだといふその文字の清縁によつて熟面の友のごとく語り合つた、N氏は強いて病餘の私を勾引して、一日、媽港の觀光を試みた。

S氏と私、通譯の若き支那人、三車相聯なりて皇后大路を西へ西へと走つた、繁華な街につゞいて南北行の一區となる、コンミツション、マーチャントの住む町である、これを過ぎて三角馬

頭、媽港通ひの瑞安丸が浮んでゐた、薄曇りして蒸暑い、私達は上甲板の籐椅子を占領して、冷めたソーダ水を飲みながら眺望した、七時、船は動き出した、幾個の青螺海上に碁布して、吾が船を迎送した。

途に滯汀洋を過ぎた、南宋の忠臣文天祥の詩をもて、支那の史書を讀む人の口に膾炙するところである、右すれば廣東、左すれば媽港に行くのである、天低く波に垂るゝあたりは崖山、南宋最後の古戦場である、風煙縹渺、しきりに汗漫の游子をして、懷古の情に禁へざらしむ、私は舷端に立つて、一杯の葡萄酒を採りて、幼沖の天子龍宮に入るの海に酔して憑吊した。

航路三十六渚、九時に香港を出た私達の船は、十一時に媽港の埠頭に着いた。媽港は澳門、昔の濠鏡の地である、蓮華莖と稱する細い地頸があつて、島を陸地に繋いでゐる、澳門互市の起源は、明の嘉靖年間(紀元一五三四年)で、都指揮黃慶が葡萄牙人から莫大の賄賂を受けて上官に申請し、始めて濠鏡を通商地となし、葡國は毎年二萬金を出してその地を租借したのに始まる、清の世となりて道光三十九年(紀元一八四九年)葡國の總督、支那人の爲めに殺害され、首級は廣東に持ち去られたが、爾來、澳門は葡國の占有するところとなり、光緒十三年(紀元一八八七年)に

至り全くその領土となつたのである。

澳門をマカオといふのは阿媽港の義である、朱印船の往來してゐた頃の人達は、これを天川と呼んでゐた、海賈に天川屋と名乗るものさへあつた、港の一端にある海上保護の女神天妃宮、媽后閣の名から轉じて港の名となつたのであらう、人口は五萬と稱せられ、そのうちに葡人は二三千人、残る都ては支那人である、昔は海上に雄飛してゐたその國の、今は僅かにこの彈丸黒子の地を東洋に於ける領土として、喩へば老ひさらばひたる寡婦の、あたり近所の人達に心を置きて遠慮勝ちに、簷傾き壁も敗れた家にすまひて、烟も細々と寂しく暮すさまにも似てゐる、亦た憐むべきである。

三巴門と媽后宮

私達は埠頭に自動車を喚びて、市街を走らせた、先づセント、ポロ寺院に參詣す、支那街の北、モンテ砲臺の西にありて、十六世紀頃の建築であつたが、今から八十年前に炎上して、寺の前面の高い壁の殘骸を留むるのみである、その形、門に似たれば、支那人は三巴門と呼んでゐる、

潤くして緩傾斜の石磴を登つて三巴門を仰ぎ見た、壁面の龕中に、聖母と使徒保羅の彫像がある、彼の馬來半島の馬刺加で入寂したザビエルも、一時此の寺に錫を留めた、その遺蹟を記念するため、この邊の町にザビエルの名をつけてゐる、門の左側に、道家の神の那陀太子の廟がある。

翠阜、海を抱いて朱瓦粉壁の洋館が軒を列ね、岸に沿ふて榕樹の並木があり、青螺その前に在り、海山の眺めは極めて明媚、景色としては、今次の旅中には第一なり、途を行く人達の容貌を見るに、支那人にもあらず、安南人にもあらず、そこに一脈邦人の血を享けてゐるかと思はるるものもあつた。

海岸通りをドライブして、媽港の名に因縁ある媽后宮に詣でた、純然たる支那式の廟で、苔蒸す石磴を夾んで奇岩並び聳ち、竹樹幽靜、さながら近江の石山寺に參詣したやうな心地がした、去つて公園のカモインス洞窟に詩人カイモンスの銅像とガマ公園に大航海者ヴァスコ、ダ、ガマの銅像とを觀た、ガマの銅像臺に掛入された銅版上に、彫刻された飛颯、怒濤、天使と裸身の人物は、構想雄大、刀法放膽、まことに傑作と思はれた。

去つて南環街の番攤館に入つた、こゝは公許の賭博場である、木造二層の洋館で、打ち見たところ、東京近郊の新開地にある安西洋料理店のやうである、碁盤目の板を圍んで、人々は己が好める番號の上に錢を置く、やがて二箇の骰子は催主の手から抛却され、その數字に由つて輸贏を決するのである、日曜日には香港から多數の人が押し寄せるが、けふは常の日とて、私達の看てゐた時は、賭場は三ヶ所、雉廬を争つてゐるものは二三十人に過ぎなかつた。

亭午を過ぎてや私達は文園酒店に上つて午餐をした、めた、廣東の文園と同じ店であるといふ、いかさま本場の廣東料理であつた、數ある珍饈のうちで、私は田鶏の天麩羅を殊に貪り食べた、田鶏とは蛙のことである、若い鶏のサ、身を咬むやうで誠に旨い、更に濠鏡名物の蟹がある、火の燃ゆるやうに酣紅した甲良を劈くと、甲良の中に堆く盛られたその蟹黄、玫瑰酒を濺いでこれを飲む、舌もとろけるやうだ、缺の孔に象牙の箸を押し入れると、絹絲のやうに白く光る拇指ほどの肉が出る、何等の脆美ぞや、私達は皿を換へて耽食した。

楊貴妃の好物南海の荔枝

三時に船が出るといふので、私達は自動車を捨て、復た市中を散歩した、棧橋の前通りに魚戸が軒を並べてゐる、籠に入れた活きた大きな蟹を賣つてゐる、果物店では、今が荔枝の旬であるので、枝も撓はゞに生つてゐる累々たる紅いろのこの果を、山に積んで賣つてゐる。

豊麗婉美、千古の麗人と歌はれた唐の貴妃楊大真が、驛馬を馳せて南方から取り寄せて、嗜み食ふたと傳へられるこの荔枝を見て、私は先づその一枝を購ふて之を咬んだ、さながら輕羅をもて包んだやうな、皺紋ある嫩紅色の薄い皮を剥ぐと、下に潔白の肉がある、雪を團めたやうである、漿液甘酸、物の喩ふべきやうもない、その核は黄黒色で、半ば熟した蓮の實に似てゐる、多年私はこの果に菜頤してゐたが、これを食べたのは今日が始めである、私はその幾枝の果を大きな籠に盛らせて購ひ還つた。

荔枝は閩中に多く産し、蜀にも嶺南にも産する、木の高さは二三丈、幹の太さは徑尺から合抱までになる、葉は冬青に似て四時常に緑に、樹相は團々として帷蓋のやうである、花は青白色で橘の花に似て、その實は皆な双つ並ぶ、實は初め青く、熟するとほんのりと紅くなり、さながら朝の霞の色を思はしめる、その果の盛んに生る五六月頃には、土地の人その木の蔭に集つて燕を

張り、手づから之を采つて啖ふ、この木、尤も麝香を忌み、枝を折るの美人が若しその衣裳に麝香を薫じてゐると、果は枝を離れて地に零ちるといふことである、楊貴妃が驛使をやつて取り寄せた荔枝は、恐らくは蜀に産する物であらう、昨年巴蜀に遊んだ時、涪州に此樹があるといふことを聞き、土匪に路を阻てられて終に往き觀ることを得なかつた、蘇東坡が黄山谷と、その樹下に燕樂して、詩を賦したことは地誌にも載つてゐる、貴妃若し廣東邊からこの果を取り寄せたとしたら、雲山千里を隔てゝゐるので、途中で味が變つてしまふ筈である、蜀なら嘉陵江を溯るか、成都から棧道を歴て、天朝の力をもつてすれば十數日にて到着すると思はれる、肌膚豊胖、身體中が皆笑渦であつたと稱され、暑い夏の日には、白い絹の手帕で汗を拭ふと、鶴の血のやうにそれが紅く染まつたといふくらゐの汗掻きで、坐右に珽や翡翠で拵らへた寶魚や瑞果を幾個となく並べ置き、それを啣んで口熱を冷ましたといふ大真が、白玉盤に盛られた荔枝を採つて、陛下も一箇如何でございますなどいひつゝ、玄宗に媚びながら、喜び啖つたことを思ふ。

三時半、瑞安號は香港に向つて纜を解いた、媽港の埠頭には支那船が舳艫相啣んで繫泊してゐた、その舷頭に、どの船にも、舊式の大砲の筒先を露はしてゐないものはなかつた、多いのは左

右舷に六七門、少ないものでも二三門の大砲を載せてゐる、この邊一帶の海には今でも海賊が横行してゐる、これに備ふるため航行の民船は、皆な武装してゐるのである、和寇當時の八幡船も亦たこれと同じやうな船であつたらうと思つた。

矢の如き歸心を載せて

香港に還つた私は、矢の如き歸思を覺えた、その月の六日に郵船の白山丸が、新嘉坡を解纜して近くこの香港に入る豫定となつたからである、白山丸の入港は數日の後である、私は英國皇帝の天長節を旅館で迎へた、郊外の練兵場では、駐屯兵と支那へ行くべき軍隊との盛大なる觀兵式が行はれ、午砲を相圖に、百一發の祝砲は、海山に轟き渡つた。

その次の日であつた、アンコール、ワットに同游した柴棍のS氏は、急に故郷に還るべく私の後を追ふて、佛蘭西船で、私の旅館へ來た、氏は翌る日に出帆する同じ郵船の墨洋丸で日本へ還るといふのである、孤獨の旅は、談敵あるのに若かず、私はS氏が私の爲めに奮つてアンコール東道の主となつたその厚意に酬ゆべく、同じ船で歸朝すべく思ひ立つた。

墨洋丸の客となる前一日、私は新知の人々を南唐酒樓に招いて留別の宴を張つた、こゝは女皇大路の中ほどにある五層の支那料理店である、各箇に分れてゐる宴室の前面は、廣い露臺となり、露臺一杯に竹棚を構へて、そこに夕顔をからませである、滿棚の翠葉、處々にぶら下つて椰掄するやうに人の頭を撫でる胡蘆に交りて、電灯入りの岐阜提燈を懸けつらねて、日本趣味横溢す、邦人の宴を張るに皆なこの樓に於いてすといふ。

宴、果てゝ後、私はS氏と共に皇后大路を散歩した、夜闌の大路の商塵は、早や既に大戸を卸してゐた、私はその戸を卸した商塵の、軒の下、石壇の上に、乞食とも思はるゝ人達の、筵を敷き眩を曲げて眠つてゐるのを見た、稻藁を束ねて枕として、ながくと足を伸ばして鼾睡してゐるものもある。中には、窓の格子に疎らい布を廂のやうに結びつけて、その陰に、父子とも見らるゝ人の私語しつゝ、蓆を展べて臥床を作つてゐるさへあつた、是等の人の多くは、埠頭に出て船舶の荷役を生業とする家のないものであるといふ。浮浪の客が他人の家の軒下を、雨露を凌ぐの宿とするといふことは、若しこれが我が國であれば、必ず巡邏の査公の一喝を浴びるであらうが、この地にあつては、査公は見ても見ぬふりしてこれを看過し、その塵前の廂下を占領された

主人も亦た些の關心するところなく、彼等に甘睡一夜の場を與へてゐる、一體、支那人は、口角沫を飛ばしてやかましく自分の利益を主張する性質を有つ民であるが、一面には又た斯うした寛容なるところがある。

私はS氏と共に旅館に還つて、行李を理めた。

翌る日の正午、私達は墨洋丸の客となつた、この船は、香港を基點として、門司、神戸、横濱を歴て南米へ行くものである、一萬餘噸の大船で、元の東洋汽船會社に屬するの船、主として移民を載せるのである、今次も三等船房には、支那移民が多く乗つてゐた、その一等室といふのは僅かに數箇に過ぎず、私達の外には、神戸にある支那商店主人と、共に行く若き支那人四五名あるのみであつた。

船は南西の信風に駕して、支那海を東へくと快駛した、八幡船や朱印船が、冬季、北東の風に乗じて南海に出で、夏季、南西の風を受けて、母國に還つたそれである、我が墨洋丸は、上海へは寄港せずに、直ちに門司を指さして行くのである。

海上にあること六日、その黄昏、朱く爛れた夕榮雲が、涯も知らぬ大海原を臙膩の色に染めな

した時、天の水に粘する東の方に數箇の青螺の相依つて浮ぶあるを望見した、言ふまでもなく我が九州の五島であつた。

翌日の朝、我が墨洋丸は門司に入港した、直ちに上陸、艇夫に行李を擔がせて税関の検査を受けた、私の瓜哇から齎らし來つた更紗數端、匕首、バリ島土人の作つた木像や、セレベス土人の漁具なる竹鋸、弓箭、丁子の實を集めて作つて玩具の船、東埔寨のブノムペン市で購ひ得た孔雀、ペリカンの團扇などは、皆な關稅を徴收されずに通過した、媽港で求め得た例の荔枝は、尙ほその兩三枝を餘してゐた、税関の人々は淡紅色なすその美しきものを愛で看めた、私はこの數枚を摘して頒ち與へた、人々はこれを摩いて食ひつゝ、頬を叩いて旨しとたゞへた、凡そ海外から舶來する植物や果實は、往々にして害蟲の寄生するあるが爲めに、嚴重なる検査を要し、或る種の苗木若しくは果實のうちには、絶対に輸入することを禁止されてゐる、しかし私の齎らし來つた荔枝のみは、これも難なく税関の門を通過することを得た。

私達は艇夫の勾引するに任せて唯ある旅館に行李を卸した、商人宿と覺ばしくして、障子は煤け、疊は黄ばんだ家であつたが、午餐の膳の上にある海鮮の美味なるには、一驚を喫せざるを得

なかつた、新嘉坡、馬來半島に幾夜の夢を趁ひ行ける旅館の食饌の、英國流のものであり、瓜哇に渡つては隨處の旅館いづれも和蘭風の献立である、交趾より東蒲塞の旅次のは、佛蘭西料理であつたことは勿論である、多くは腥羶の食、たとへ海魚があつたにしても、それが皆な俗にいふオホ味のものばかりで、細かに味ひ靜かに咬みて、私の舌牙を悦ばせ樂ませる妙諦を缺いてゐた、南洋の海の肴で鮮美なものは、唯だ蟹があるのみである、蟹以外には旨いものはない、今遽かに母國に還ることを得て、門司の埠頭に於いて始めて海魚を味つたのである、私は竊かに思ふ、海魚は日本のものに限る、日本以外の海に栖む魚に、旨いものは決してない。

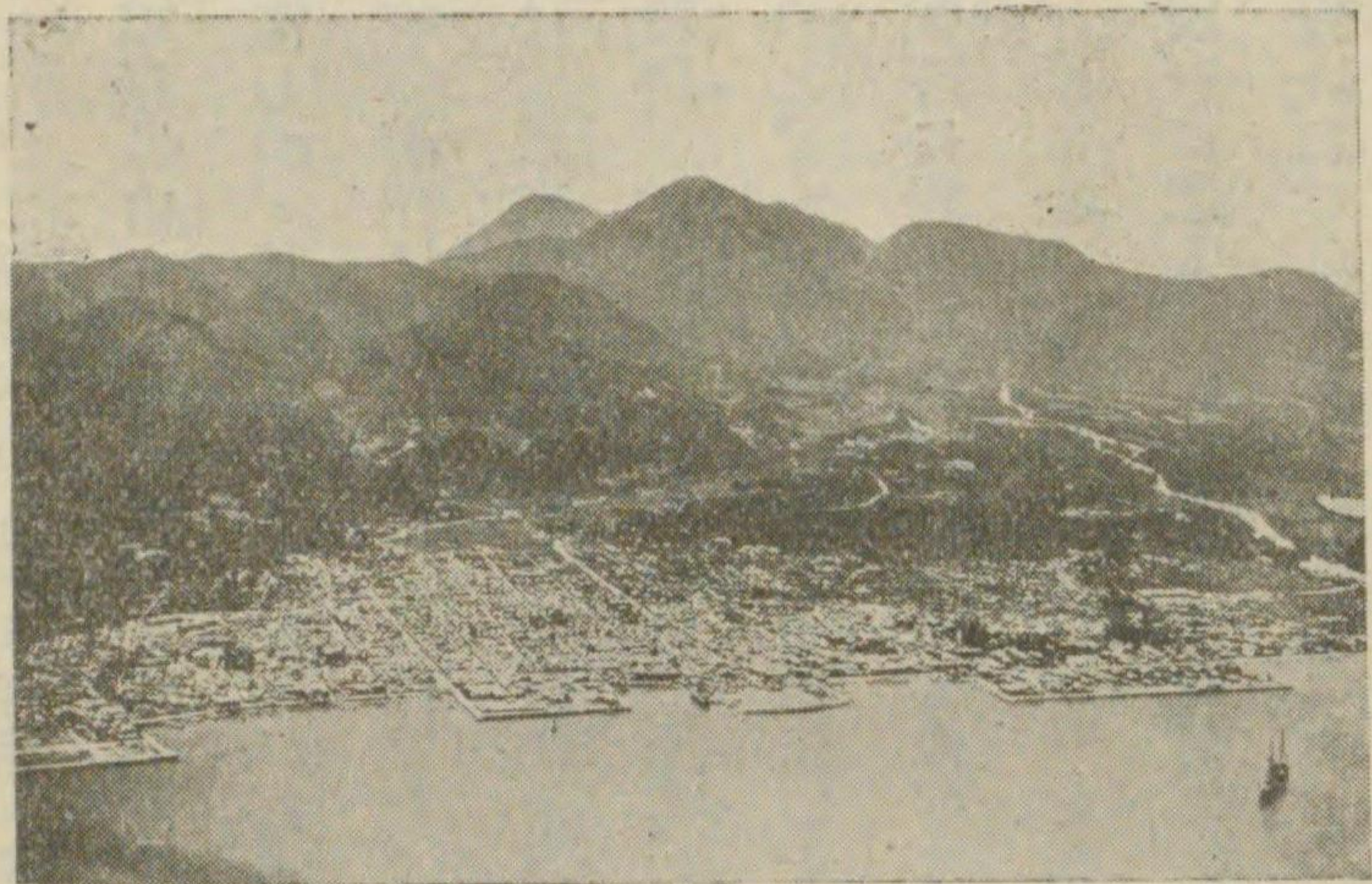
大友宗麟氏と海外貿易

私は門司の驛頭にS氏の郷里熊本に向ふを見送つた後、獨り大分行きの汽車に上つた、百餘日に亘る汗漫の旅の疲勞を醫さん爲、別府温泉に淹留數日すべく思ひ立つたのであつた。

最初、私が南洋の旅に上るの時、別府の古老H翁は、南游を終へたなら、路を枉げて別府に來れと懇ろに慫慂した、H翁は徳富蘇峯氏と尤も親密なる間柄で、私とも亦た十數年來の交遊であ

る、私はその約を履んだのである。

飛行機の上より別府の温泉市



黄昏、汽車は別府に近い、相識の鶴見山四極の峯は辱顔笑ひを含み、翠を舒べ碧を拖いて依依として私を迎へた、私は驛頭にH翁と手を握つて久潤の情を叙し、直ちに自動車を驅つてH旅館に入つた、始めて茲に旅の衣を脱却して先づ温泉に快浴し、東京から送つて來つた日本服に着かへた、心寛かに體胖かに、襟を披き帯を緩うして籐椅子を風前に移してH翁と相語つた、是れより數日H翁と共に山に登り水を涉りて優遊した、同宿の人に南京領事のM氏がゐた、前年の春、中部支那漫遊の時、南京に氏を訪ふて共に朧る月夜の奏准の酒樓に會飲したことがある、氏は福本日南翁の女婿、翁の世に在りし

時、私も亦た翁と相識の故をもて、尋常一樣漫遊の客以上に私を遇した、南京事變當時、氏は脱

痘を病みて起つこと能はず、事の急なるに及びて居留邦人と共にその使館を守り、南京赤化兵の襲撃を受けて堪ゆべからざる劫掠を忍び、共に僅かに萬死を免れた、當時、私は新嘉坡にあり、新聞電報に由りてその事變を知つた、今ま端なくも同じ旅館に痾を養ふあるに邂逅した、氏は悲憤慷慨しつゝ私に當時の事を語つた。

別府の遊びは、これで三度目である、前度の會遊の、その最初は、大正二年の夏であつた、次の遊びは大正五年、三年間の發展はやがて町制より市制となり、今度の三遊に於いて、殊に豫想以上の發展を成し遂げてゐるのに驚嘆した、大正二年の時は、私は新聞記者團の一員として來たのであつた、春日の浦に近き蓬來館に大分市及び別府町の名流の催うされたる歡迎會に列席し、市長の挨拶に對して私は、日向線並びに肥後線の鐵道が開通したその曉に、若し再遊の機縁あらん時、私は應さに驚異の眼を睜つて新大分並びに新別府の繁榮舊に倍するを看るであらうと述べた、別府に遊ぶ毎に、殷賑は前遊に倍したことを看た、今次の三遊に於いて私は更に發展の著しきに驚いた。

今年には空梅雨と旅館の女中がいふのを聞いたが、久しぶりで終日ふりくらししたその夕、雨を怕

れて訪るゝ客もなきまゝ、私は會遊を回憶した、彼の馬刺加に入寂した聖、ザビエルは、四百年の昔、千里の海を越へて遙かにこの豊後の大分まで傳道に來たのであつた。大分縣廳の構内に、ホルトガルと稱する老樹の、今も尙ほ繁茂してゐるのを見たのもその時であつた、縣廳は元の大分城の本丸のあつたところである、その正廳は、大正天皇の、東宮にましました時、鶴駕を駐めたまひしところである、庭には佐賀の關の白濱黒濱にありといふ黒石と白石とが布かれてあつた、形は鶏卵の大いさで、白石は雪のごとく、黒石は漆のやうに光つてゐた、そこにホルトガルなる木が栽えられてあるのである、樹膚は梅に似て、その葉は柳のごとく、青い小さな實を垂れてゐた、大友宗麟の時、葡萄牙人の齋らし來つて栽えたものであると傳ふ、その樹相を看るに、正しく、外國より舶來したものらしく、我が國では頓と見たことのない奇木である。

その當時には別府灣口を扼して瓜生島といふのがあつた、その後久しからずして地震の爲に汨没してしまつたが、その島の形は、さながら蓮の花の咲いたさまに似てゐたといふ、そこでこの入江の事を菡萏灣と稱してゐる、蓮花灣といふ意味である、灣口に島が横はつてゐた爲めに、正しく母の懷ともいふべき良港であつたに違ひない、大友氏の盛時には、西洋南蠻の船を簇から

せ、鮫鼓蟹笛、海の繁華はいふばかりもなかつたといふ、神宮寺の浦から海濱にかけて洋客の館舎打ち並び、大分城内には、耶蘇教會堂もあつたのである、ザビエルは、定めてこの會堂に錫を留めたのであらうと思ふ。

大友氏の貿易政策は、一面に於いては海外から新銳の武器を輸入するにあつた、大友宗麟氏の威勢が、當時四隣に雄張してゐたのは、實にこの最新式の武器を外國から得たからである、輸入されたものに佛郎機があつた、當時にあつては新銳なる大砲である、名づけて、『國崩し』といつた、この砲一たび轟發すれば、營に陣を破ぶるのみにあらず、城を抜くのみにはあらず、威力は正さに邦土を潰滅するに足るといふので、爾か名づけられたものである、國崩の巨煩を有する大友氏の、覇を九州に稱したのは、蓋し當然の事であつた。

大友家の年中行事のうちに、毎年の冬至に行ふ面白い儀式があつた、夜のいまだ明けぬ寅の刻、今の午前四時ごろとなつて、當主は廣間に出で、豫て屏風を引き廻して作られた寢所のうちに入りて少しまどろむ、小姓や近侍、膳番の人々皆な其處に伺候して、屏風の外でいろ／＼の物真似をする、先づその一人は、鶏の啼く音をまねて聲高く、日本國は勿論、唐、天竺までの寶

物を、御内に取つて來うといふ、その次に他の一人は、門を守る犬の真似して、我れは御館の御門を守るものである、そなたは何方の國から來たれると、びよう／＼と高くさけぶ、さて一同聲を揃へて、夜は明け申したと言上して主公を起す、主公起て嗽盥し、服を更めてその座に就くと、銚子、提籠を並べて簡素な酒宴となる、小姓や近侍は又た餅賣、饅頭賣、昆布賣などの真似をする、その物真似をするものも、觀る者も、聲を放つて賑やかに打ち笑ふ、宗麟以前は鶏の啼く音を真似て、唯だ日本の寶物を御内に取つて來うといつたが、宗麟の世になつて、唐、天竺の言葉を加へたものであるといふ。

第二次の別府訪問當時、私は九州一帯に亘つて旅行を試みた、私は鹿兒島に淹留數日した、窓といふ窓、何處からでも櫻島の紫屏顔を容れないことはないといふ萬葉の海市、私は南洲終焉の地なる岩崎谷の洞窟や、淨光明寺の南洲以下の瑩域に賽し、更に、島津公の磯邸を訪づれた、その後庭にある覆宇のうちに、島津公の祖先が、大友宗麟と戦つて、分捕したといふ巨砲『國崩し』があつた、長さ一丈ばかり、青銅製の砲背に二百七十匁、十九番と鑄出されてあつた。二百七十匁はその砲丸の重量をいひ、十九番とあるを見れば、二三十門の大砲があつたと思はれる、こ

の外、朝鮮役で分捕りした佛郎機があつた、砲身には葡萄牙の文字で彫つてあつた。

大友宗麟の島津義久と戦つて大敗したのは天正六年の十月であつた、この時宗麟は兵を卒いて日向に入り、長手、大江の城を屠つたが、薩軍の勢ひ漸く盛んに、先づ高城に敗れ、兵を引いて日向に還り、耳川を挟んで殊死して戦つたが、遂に全く潰散して、一族及び麾下の勇士千餘人を亡ひ、歎を通じてゐた四境の城主も皆な大友家に背いたので、さしも九州に威を振つてゐた大友家も、この敗戦の後は、豊後一國の外には、武を伸ぶること能はざるに至つたのであつた。

佐賀の關の白濱黒濱

別府に淹留すること七日の後、私は歸東の途に就いた、その前一日、梅雨の新霽に乗じて、私は且翁と共に佐賀の關の黒濱白濱に清遊を試みた、汽車のうちに一群の客があつた、いづれも大分府の紳士であつた、これ等の紳士は、胡麻鹽頭で髭のない一老紳士を圍みて盛んに政局を論じてゐた、私は眼睛に異光あるその老紳士の風貌が、何處かで逢つた人のやうに思はれてならなかつた、尋思の後、新聞紙の寫眞で善く見る前遞相A氏その人であることに想到した、群客は次の大分驛から皆な去つた、老紳士、獨り車窓に凭つて、峯走り水迎ふる車外の風光を看めてゐた。

私は刺を通じて老紳士に敬意を表した、A氏は曰ふ、其後は絶へて久しく相見えなかつた、清健誠に羨むに堪へたりと、私は、何處で貴下に見えたかを忘れましたといつた、A氏は晒つて曰ふ、牙山戦前の一晩、素沙場に露宿して貴下と相見えた、熊本新聞から特派された余はその時の従事記者の一人であつた、當時君も余も年少氣鋭、筆を投じて戎軒を事とするの概があつた、爾來三十餘年、白頭偶々客車のうちに相逢ふは、誠に奇縁といふべきであると、私は始め當時同じく軍に従ふ青年文士のうちにA氏某なる人あることを想ひ浮べた、彼問ひ吾語り、吾問ひ彼語る、語つて佐賀の關に至りて終に相別れた。

佐賀の關は、東九州に於ける古い港である、私は、加藤肥州が、上國に赴くことある毎に、この港から纜を解いたことを聞いてゐる、今は高さ三百尺と註せられる鑛石精鍊所の大烟突が、萬斛の煤烟を中空高く撒きちらすある以外には、寂しい海市となつてしまつた、驛から乗合自動車で、元の港の町に入つて唯ある船宿の門を叩き、舟の用意をなさしめた、舟を待つ間に私達は、

椎根津彦神社に参詣した、延喜式内の古社である、灣を隔て、山勢の海に入るところ、そこには急日女神社がある、これも式内の古社である、この二た柱の女夫神は、上古この灣頭に宮居して、この邊一帶を鎮護したまひし方である、速吸の瀬戸なる峽門の名は、實にこの急日女神の名から起つたものである。

舟の支度が出来たといふので海濱に出て見ると、十噸もあらうと思はれる大きな石油發動汽船が浮んでゐる、私達は扁舟を浮べて黒濱白濱を観べく吩咐したのである、斯る大きな船には用はないと斥けると、船頭は頭を掉つて、この邊の海潮には、發動汽船でなくば危険である、疾く疾く召したまへと、甲板の上に蓆を展べ、長い踏板とつて岸に投げ架け、猶豫する私の手を執つて、板を度つて船の中に導き入れた、いかさま潮は今や高い、巨浪むくく起つて、岸に觸れては電狼し又た雨狂する。

船の中には一陶の酒と幾皿かの肴があつた、私達は蓆の上に箕踞して杯を把りつゝ山海の景趣を看めた、急潮に簸翻さるゝ私の船は、十二分に汽力を出して萬馬の馳騁するにさも似た波頭を突破しつゝ進んだ、椎根津神社の山の陰から、折れてその蒼崖の下を度つた、危礁亂立し、浪

は殊に高くなつた、そこに先づ白濱の、糺々たる白石の宛ながら雪のごとく平布された磯濱のあるのが見えた、欵崖と欵崖との間にある、長さ三四町に亘るの濱である、潮は私達の船を驅つて、磯邊に押上げた、私は船から磯へと飛び降りて、その白石の上を度つた、寄せては返へす浪につれて、鶏卵のやうな無数の白石は、相觸れ相撃ちてころ／＼と高く鳴りつゝ滾轉する、この邊の海の底は、すべてこの白い石のみであるといふ。

私は復た船頭の背に負はれて船上つた、潮の華は衣帽を亂れ敲いて、淋漓と濡れてしまつた、磯より二里ばかりの沖に、一箇の島があつて、今は海堡築造の最中であつた、海鷲の低迷するところ、そこに一抹の青を拖くは、四國の蹉跎岬である。

白濱の沖を傳ふて行くとき久しからずして、黒濱があつた、萩の餅ぐらゐの大いさの無数の黒石が平布されてあつた、濱は白濱ほどの長さに亘つてゐた、私は船の上からこれを見た、深藍なす海潮は、こゝに至つて黒暗々たる色に變じた、海の底はすべてこの黒石のみであるからである、私達は急潮に船を縦つてその往くところに信せつゝ、再び又た白濱の邊を過ぎず、石光、潮を透して、月を罩むかと思はるゝその底に、鯨とも思はるゝ一隊の魚あつて行くのが見える。

天はやがて疎雨を催した、風煙縹渺、海氣は森然として人の膚に迫るを覺えた、私達は船を回した。

黄昏、私達はこの寂しい町の唯ある旗亭の門を叩いて酒飯した、將さに發せんとする自動車を喚び留めて、辛うじて終列車の客となることを得た、その別府に還つたのは十一時を過ぎてゐた。

佐賀關附近の山に、多く野生の棕櫚を見た、更に海を傳ふて日向路に入ると、この木が殊に多い、彼の青島は、島を擧げて熱帯植物が繁茂してゐる、私は靜かに會遊を回想した、砂濱から棧橋を度つて一步その島に入ると、そこに竹にもあらず又た蘆にもあらぬ植物が蒼々として茂げつてゐる、正しくは是れ南洋隨處の濱に生ふる蘆竹である、荒奔なる蘆竹の林の蔭には、三尺に餘れる文珠蘭の叢を成すのがあり、又馬鞭草科のハマカツラの籜をなすのものもある、海桐科のトベラ、水龍骨科のオニヤブソテツも亦た多い、紫金牛科に屬するモクハチバナの、幹の太さが七八寸で高さは二丈に越へたものや、衛矛科のマサキの巨大なものもあり、桐の一種でヒキリといふものもあつた、殊に當時、私をして驚嘆せしめたものは、周圍十四五町と註せられるこの島山を掩ふて、

生ひ繁れる檳榔樹の茂林であつた、蒼白い太い幹の、孟宗竹のやうな節を變んで、すつくすつくと立ち並んだその異觀は、内地の何處にも見ることが出來ないものであつた、その大きな羽團扇のやうな葉を重ねて、蓬々として海風を扇ぐさまは、何にさま其の實を咬みて齒の涅みたる黒い蠻人が、その葉を編んだ腰蓑を着け、鱈魚の牙を植えた長い木鉾を提げて、その樹の蔭から躍り出て來はしまいかと怪しむばかりであつた。

島には彦火々出見尊、豊玉姬尊及び鹽筒命の三柱の神を祀つた青島神社といふ古い社がある。その社の邊にある大きな芭蕉は、私の目には珍らしいその實を累々と着けてゐた、潮流の關係によりて、この九州の海邊に熱國草木の種子を齎らして來つて、長い年所のうちに茂生したのであるといはれてゐるが、いづれは雪をも見ない南海の亞熱帯地である、昔はこの邊に、この種の樹木の可なり多く繁茂してゐたのであらうと思はれる。

翌る朝、私は別府を出で、關門海峽を度つて、その晩の特急列車に擔じた。

後記

鵬程一萬里、「南洋に遊びて」を書き終つて、私は萬年筆を擱いた。

長崎の大通辭に北島見信氏がある、新僭置一大洲説を著し、日本を中心として、蝦夷、靺鞨、朝鮮、琉球、臺灣、呂宋、瓜哇、淳泥などの洋中に碁布する大島を包括して「大版圖」となし、名づけて Fortis Janato と號すべしと説いてゐる、私はその言辭の雄大にして、見識の非凡なるに驚嘆する、過ぎし昔はいざ知らず、今の世には早や全く武力に由るの侵略は容れられない、唯だ通商貿易の上に於いて、覇を海上に唱ふべきである、暹羅、馬來半島、交趾支那、東蒲寨や、皆な我が祖先の七寸の鞋痕を印し留めたところである、瓜哇、淳泥、三佛齊、そこにも今尙ほ巨利がある、私は我が海客諸士に、邁往勇進してその抱負を現實に發揚せんことを祈る。

「南洋に遊びて」の稿を書き終つて數日の後であつた、曾つて佛領河内の東洋學院の顧問であつたM氏は、私に書を寄せて、東京の日佛協會に滞在してゐる東洋學院の學士オーブアン氏が、私

の發見した大石柱にある古武士の題名に就いて、面晤したいとの希望あることを私に告げた、オーブアン氏はその音を探つて鷗舞庵と號し、善く邦語を操り、邦史にも通じ、漢文と漢字交りの文を読むを得るの人である、私は電話でM氏にその會見の日時とその場所とを交渉した、そしてオーブアン氏が私の家に来訪せんといふのを辭謝して、日佛協會に於いて會見すべく約束した。殘暑のきびしい晴れた秋の日の午後であつた、私は赤坂山王山の日枝神社の後なる協會を訪づれた、富豪故M氏の邸園の、一部の高丘に立てられた洋館はそれである、玄關には東蒲寨式の石獅子が左右相並んで据えられてあつた、刺を通ずると白哲長身の若い紳士が現はれて、私の手を握つた、年齒卅四五、それが鷗舞庵その人であつた、氏は私をその書齋に導いた、私は先づ懐から原文のまゝ一字も増損することなく認めた漢字交りの彼の題名を氏に呈して、談は直ちにアンコールの事に及んだ。

鷗舞庵はその紙片を執つて、些の滯滯するところなく朗々と聲を揚げてそれを讀んだ、私は感服した、私はその題名ある石柱の位置を詳しく説明して、東蒲寨の寫眞師が閃光粉を携帯してゐなかつた爲めに、撮影することを得なかつたと語つた、氏は、アンコール、ワットを研究しつゝ、

ある學者達が、いまだ會つて見出すことの出来なかつた貴重の文字を、今、貴下によつて發見されたことは、誠に奇特の事で、學徒の爲め、歴史の爲め、この上もない幸慶であるといひ、自分は近く再び佛領河内の東洋學院に還る筈である、河内に歸つたら、直ちに院長に相談し、この古武士の題名の銷磨し去らざるやう、何等かの善き方法を講すべく、又た寫眞師を遣りてこれを撮影し、その題名の文と共に、これを來年出版すべき東洋學院の年報に載せることに致すべく、寫眞と年報とは、必ずこれを貴下に呈すべしといふ、私はその厚意を謝した。

斯くて鷗舞庵氏は、題名文の中に就いて、右近太夫といひ、藤原朝臣といひ、裕道仙といひ、明生大姉といふことについて、私にその説明を求めた、右近太夫とは、昔の皇城にあつた左右禁衛軍の右軍に屬する官名で、やがて後世に至つてそれが武士の稱號となつたこと、藤原朝臣とは、我邦には皇室より分派した貴流の姓に源氏、平氏、藤原氏、橘氏などあり、日本の武士は祖先を尊崇する信念に由り、華胄より出でたる血統を矜る、藤原朝臣とは、その祖先の藤原氏に出でたことをいふ名譽の稱號であること、裕道仙や明生大姉は、導師より佛敎信者に授くる戒名にて、歐米諸國の基敎信徒の基敎徒名クリスチャンネームと同様なものであるが、戒名は死後その人に追贈する論號な

ることを説明した。

私は二時間以上も鷗舞庵の書齋に留まつて、既刊の年報その幾冊を亂抽してこれを披見し、且つ歴史と地理、民俗風土に就いて快談し、益を得ることが極めて多かつた、辭して協會の門を出ると、蟬聲、雨のごとく、夕陽は協會の粉壁を朱く染めてゐた。

鷗舞庵氏が河内に還つてから、今や早くも四五月を歴たが、いまだその消息に接しない、しかし私は、佛蘭西政廳が、必ずこの古武士の題名を、長く保存すべく最善の方法を講じてゐることを確信する。

南洋に遊びて (終)

不許複製



昭和三年四月廿五日印刷
昭和三年五月十三日發行

南洋に遊びて
定價金貳圓

著者 暹塚金太郎

發行者 濱井松之助

東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者 山崎一男

東京・日本橋・數寄屋町

大阪屋號書店

振替東京一三七五番
電話日本橋(24)三三七五番
四五六七三八三五番

暹塚麗水著

新入蜀記

金壹圓八拾錢
書留送十八錢

田山花袋著

滿鮮の行樂

金貳圓八拾錢
書留送十八錢

上田恭輔著

趣味の支那叢談

金貳圓五拾錢
書留送十八錢

後藤朝太郎著

支那趣味の話

定價金參圓
書留送十八錢

同

支那風俗の話

金貳圓八拾錢
書留送十八錢

沖野岩三郎著

滿鮮紀行 薄氷を踏みて

金貳圓五拾錢
書留送十八錢



東蒲寨の北、大湖畔にあり、ワット・トット大佛蹟

578
84



